

和洋女子大学

2017年度 目標と計画

《自己点検結果》

和洋女子大学 2017年度目標と計画

1. 「目標と計画」策定について

以下の各項目について、各学群、各学類（専修）・研究科（専攻）の「目標」、「年度計画：活動内容」を記述してください（※各部署は該当する項目のみ）。ただし、複数の専修がある学類は、学類と各専修に分けて（※参考例参照）記述して下さい（アドミッションポリシーは学類記述事項であることに留意）。

「目標と計画」の項目	要点（「大学基準と点検・評価項目」[大学基準協会]等に準拠） （この「要点」は最低限記述されるべき内容を示したものであり、策定の際は関連事項をできるだけ多くとりあげること）
1 人材の養成に関する目標と計画	<ul style="list-style-type: none"> ●ディプロマポリシーを考慮して記述 ・卒業・修了時の学修成果及びその達成のための諸要件等
2 入学者受け入れの方針と定員の確保	<ul style="list-style-type: none"> ●アドミッションポリシーを考慮して記述 ●定員の確保に向けての具体的な計画
3 学生定員（総収容定員）の確保	<ul style="list-style-type: none"> ●学修支援方針・計画（能力別補習教育、留学・休退学状況把握と対応、障がい学生支援等） ●学生生活支援（各種相談等）・進路支援の方針・計画
4 組織の効果的運営	<ul style="list-style-type: none"> ●役割分担、責任所在明確化 ●成員の主体性・個性・満足感等をベースとした組織の活性化・効率化の方針・計画
5 学士（修士 博士）課程教育	<ul style="list-style-type: none"> ●カリキュラムポリシーを考慮して記述 ・課程編成・実施方針に沿った教育課程・内容・方法の保障、学修成果測定基準の妥当性保障等
6 研究の活性化と外部資金の導入	<ul style="list-style-type: none"> ●組織としての研究環境の保障 ●各教員の外部資金導入等による研究活動の目標と計画
7 社会人教育体制の構築	<ul style="list-style-type: none"> ●社会人入学者にとっての魅力的な教育内容・体制の構築 ●一般社会人向け教育体制の構築
8 国際交流の推進	<ul style="list-style-type: none"> ●留学・研修・学術訪問等の国際交流 ●海外諸機関・企業・地域社会との連携
9 社会・地域連携の推進	<ul style="list-style-type: none"> ●地域連携体制 ●産官学連携への学生参加の推進
10 教員自身の資質の向上	<ul style="list-style-type: none"> ●FDの企画・実施、学内外FDへの積極的参加 ●海外・国内研修への積極的参加
11 図書館・学術情報サービスの活性化	<ul style="list-style-type: none"> ●必要な質・量の図書等資料の確保、学術情報へのアクセスの充実 ●専門知識を備えたスタッフによるサービスの活性化

和洋女子大学 2017年度目標と計画

【記入上の注意】

- 「目標」と「年度計画：活動内容」を明確に区分して記述して下さい。
- ・ 「目標」は「将来あるべき姿」（例えば「5 学士課程教育」なら、4 年生がどのような人間になって卒業するかを具体的に示したもの）で、それに至るまでの、教育方法、戦略等を具体的に記述して下さい。
- ・ 「年度計画：活動内容」は目標を達成するための、当該年度に実行すべき「行動プラン（教育・指導内容）」を記述して下さい（昨年度の課題と具体的に対応する活動内容の記載が望ましい）。
 - ◆ 『誰が（教員か、学生かを明確にする）』、
 - ◆ 『何を（より具体的に）』、
 - ◆ 『なぜ（理由・目的を明らかに）』、
 - ◆ 『いつまでに（複数年の計画の場合は当該年度の計画も合わせて明記する）』、
 - ◆ 『どのように（手段・方法）』、
 - ◆ 『どの程度（定量化できるものは具体的な数字を、定量化できない計画はどのような状態になればよいか、達成度や効果を明示する）』、を“簡潔に簡条書き”して下さい。計画は「具体的」で、「計測可能」で「期限の設定がある」ことが大切です（具体的な数値で示す場合、その根拠を明示）。
- 1と5の違い：1の方はやや包括的な目標と計画であり、5は各年次の学生に与える教育の計画。
- 6の外部資金の導入については、外部資金申請の具体的な数値目標を記入して下さい。
- この「目標と計画」は、H26 年度改組後の組織で構成されています。旧カリキュラム履修生に関しては、新しい組織の中で、記述して下さい。

2. 「目標と計画」達成度作成について〔年度末〕

1で策定した各項目について、「達成度（S, A, B, C）」、「実施結果と次年度課題」を、記述して下さい。

「達成度（S, A, B, C）」については各策定項目に対して、4段階評価で自己点検して下さい。

「総合達成度」については、括弧内にS, A, B, Cを記述してください。

※参考例

1 人材の養成に関する目標と計画
1-2. 国際学類 英語文化コミュニケーション専修 国際社会専修
目標総括
例（1）国際学類 （2）英語文化コミュニケーション専修 （3）国際社会専修

和洋女子大学 2017年度目標と計画

年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）
例（1）国際学類 （2）英語文化コミュニケーション専修 （3）国際社会専修	
実施結果と次年度課題	総合達成度（ ）
例（1）国際学類 （2）英語文化コミュニケーション専修 （3）国際社会専修	
1 人材の養成に関する目標と計画	
1-3. 日本文学文化学類 日本文学専修 日本語表現専修 書道専修 文化芸術専修	
目標総括	
例（1）日本文学文化学類 （2）日本文学専修・日本語表現専修 （3）書道専修 （4）文化芸術専修	
年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）
例（1）日本文学文化学類 （2）日本文学専修・日本語表現専修 （3）書道専修 （4）文化芸術専修	
実施結果と次年度課題	総合達成度（ ）
例（1）日本文学文化学類 （2）日本文学専修・日本語表現専修 （3）書道専修 （4）文化芸術専修	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

目次

1 人材の養成に関する目標と計画	9
1-1. 人文学群	9
1-2. 国際学類 英語文化コミュニケーション専修 国際社会専修	9
1-3. 日本文学文化学類 日本文学専修 日本語表現専修 書道専修 文化芸術専修	11
1-4. 心理学類 心理学専修	12
1-5. こども発達学類 こども発達学専修	13
1-6. 家政学群	14
1-7. 服飾造形学類 服飾造形学専修	15
1-8. 健康栄養学類 健康栄養学専修	16
1-9. 家政福祉学類 家政福祉学専修	17
1-10. 大学院：人文科学研究科 英語文学専攻 日本文学専攻	18
1-11. 大学院：総合生活研究科 総合生活専攻 博士前期課程 博士後期課程	19
2 入学者受け入れの方針と定員の確保	20
2-1. 人文学群	20
2-2. 国際学類 英語文化コミュニケーション専修 国際社会専修	21
2-3. 日本文学文化学類 日本文学専修 日本語表現専修 書道専修 文化芸術専修	22
2-4. 心理学類 心理学専修	24
2-5. こども発達学類 こども発達学専修	25
2-6. 家政学群	26
2-7. 服飾造形学類 服飾造形学専修	27
2-8. 健康栄養学類 健康栄養学専修	29
2-9. 家政福祉学類 家政福祉学専修	30
2-10. 大学院：人文科学研究科 英語文学専攻 日本文学専攻	31
2-11. 大学院：総合生活研究科 総合生活専攻 博士前期課程 博士後期課程	32
2-12. 広報・入試センター	33
3 学生定員（総収容定員）の確保	33

和洋女子大学 2017年度目標と計画

3-1.	人文学群.....	33
3-2.	国際学類 英語文化コミュニケーション専修 国際社会専修.....	34
3-3.	日本文学文化学類 日本文学専修 日本語表現専修 書道専修 文化芸術専修.....	35
3-4.	心理学類 心理学専修.....	36
3-5.	こども発達学類 こども発達学専修.....	37
3-6.	家政学群.....	38
3-7.	服飾造形学類 服飾造形学専修.....	39
3-8.	健康栄養学類 健康栄養学専修.....	40
3-9.	家政福祉学類 家政福祉学専修.....	41
3-10.	大学院：人文科学研究科 英語文学専攻 日本文学専攻.....	41
3-11.	大学院：総合生活研究科 総合生活専攻 博士前期課程 博士後期課程.....	42
3-12.	教務課.....	43
3-13.	学生課.....	44
4	組織の効果的運営.....	45
4-1.	人文学群.....	45
4-2.	国際学類 英語文化コミュニケーション専修 国際社会専修.....	45
4-3.	日本文学文化学類 日本文学専修 日本語表現専修 書道専修 文化芸術専修.....	46
4-4.	心理学類 心理学専修.....	47
4-5.	こども発達学類 こども発達学専修.....	47
4-6.	家政学群.....	48
4-7.	服飾造形学類 服飾造形学専修.....	49
4-8.	健康栄養学類 健康栄養学専修.....	50
4-9.	家政福祉学類 家政福祉学専修.....	50
4-10.	大学院：人文科学研究科 英語文学専攻 日本文学専攻.....	51
4-11.	大学院：総合生活研究科 総合生活専攻 博士前期課程 博士後期課程.....	52
4-12.	教務課.....	53
4-13.	全学教育センター.....	53
5	学士（修士 博士）課程教育.....	54

和洋女子大学 2017年度目標と計画

5-1.	人文学群.....	54
5-2.	国際学類 英語文化コミュニケーション専修 国際社会専修.....	55
5-3.	日本文学文化学類 日本文学専修 日本語表現専修 書道専修 文化芸術専修.....	57
5-4.	心理学類 心理学専修.....	59
5-5.	こども発達学類 こども発達学専修.....	60
5-6.	家政学群.....	61
5-7.	服飾造形学類 服飾造形学専修.....	62
5-8.	健康栄養学類 健康栄養学専修.....	63
5-9.	家政福祉学類 家政福祉学専修.....	65
5-10.	大学院：人文科学研究科 英語文学専攻 日本文学専攻.....	66
5-11.	大学院：総合生活研究科 総合生活専攻 博士前期課程 博士後期課程.....	67
5-12.	教務課.....	68
5-13.	進路支援センター.....	69
5-14.	全学教育センター.....	70
6	研究の活性化と外部資金の導入.....	71
6-1.	人文学群.....	71
6-2.	国際学類 英語文化コミュニケーション専修 国際社会専修.....	72
6-3.	日本文学文化学類 日本文学専修 日本語表現専修 書道専修 文化芸術専修.....	73
6-4.	心理学類 心理学専修.....	73
6-5.	こども発達学類 こども発達学専修.....	74
6-6.	家政学群.....	75
6-7.	服飾造形学類 服飾造形学専修.....	76
6-8.	健康栄養学類 健康栄養学専修.....	77
6-9.	家政福祉学類 家政福祉学専修.....	78
6-10.	大学院：人文科学研究科 英語文学専攻 日本文学専攻.....	78
6-11.	大学院：総合生活研究科 総合生活専攻 博士前期課程 博士後期課程.....	80
6-12.	研究支援課.....	80
6-13.	全学教育センター.....	81

和洋女子大学 2017年度目標と計画

7 社会人教育体制の構築.....	82
7-1. 人文学群.....	82
7-2. 国際学類 英語文化コミュニケーション専修 国際社会専修.....	83
7-3. 日本文学文化学類 日本文学専修 日本語表現専修 書道専修 文化芸術専修.....	83
7-4. 心理学類 心理学専修.....	84
7-5. こども発達学類 こども発達学専修.....	85
7-6. 家政学群.....	85
7-7. 服飾造形学類 服飾造形学専修.....	86
7-8. 健康栄養学類 健康栄養学専修.....	86
7-9. 家政福祉学類 家政福祉学専修.....	87
7-10. 大学院：人文科学研究科 英語文学専攻 日本文学専攻.....	87
7-11. 大学院：総合生活研究科 総合生活専攻 博士前期課程 博士後期課程.....	88
7-12. 教務課.....	89
7-13. 地域連携センター.....	89
8 国際交流の推進.....	90
8-1. 人文学群.....	90
8-2. 国際学類 英語文化コミュニケーション専修 国際社会専修.....	91
8-3. 日本文学文化学類 日本文学専修 日本語表現専修 書道専修 文化芸術専修.....	92
8-4. 心理学類 心理学専修.....	92
8-5. こども発達学類 こども発達学専修.....	93
8-6. 家政学群.....	93
8-7. 服飾造形学類 服飾造形学専修.....	94
8-8. 健康栄養学類 健康栄養学専修.....	95
8-9. 家政福祉学類 家政福祉学専修.....	95
8-10. 大学院：人文科学研究科 英語文学専攻 日本文学専攻.....	96
8-11. 大学院：総合生活研究科 総合生活専攻 博士前期課程 博士後期課程.....	97
8-12. 国際交流センター.....	97
9 社会・地域連携の推進.....	99

和洋女子大学 2017年度目標と計画

9-1. 人文学群.....	99
9 社会・地域連携の推進.....	99
9-2. 国際学類 英語文化コミュニケーション専修 国際社会専修.....	99
9-3. 日本文学文化学類 日本文学専修 日本語表現専修 書道専修 文化芸術専修.....	100
9-4. 心理学類 心理学専修.....	100
9-5. こども発達学類 こども発達学専修.....	101
9-6. 家政学群.....	102
9-7. 服飾造形学類 服飾造形学専修.....	102
9-8. 健康栄養学類 健康栄養学専修.....	103
9-9. 家政福祉学類 家政福祉学専修.....	104
9-10. 大学院：人文科学研究科 英語文学専攻 日本文学専攻.....	104
9-11. 大学院：総合生活研究科 総合生活専攻 博士前期課程 博士後期課程.....	105
9-12. 地域連携センター.....	106
10 教員自身の資質の向上.....	107
10-1. 人文学群.....	107
10-2. 国際学類 英語文化コミュニケーション専修 国際社会専修.....	107
10-3. 日本文学文化学類 日本文学専修 日本語表現専修 書道専修 文化芸術専修.....	108
10-4. 心理学類 心理学専修.....	109
10-5. こども発達学類 こども発達学専修.....	110
10-6. 家政学群.....	111
10-7. 服飾造形学類 服飾造形学専修.....	111
10-8. 健康栄養学類 健康栄養学専修.....	112
10-9. 家政福祉学類 家政福祉学専修.....	113
10-10. 大学院：人文科学研究科 英語文学専攻 日本文学専攻.....	114
10-11. 大学院：総合生活研究科 総合生活専攻 博士前期課程 博士後期課程.....	115
10-12. 全学教育センター.....	115
11 図書館・学術情報サービスの活性化.....	116
11-1. メディアセンター.....	116

和洋女子大学 2017年度目標と計画

1 人材の養成に関する目標と計画	
1-1. 人文学群	
目標	
<p>人文学群では、深い人文教養と広い国際的視野を持ち、国際言語・社会、日本文学・文化、心理、こども発達などの専門知識を修得して社会で活躍できる、自立した女性の育成を目標としている。具体的には、人間と社会、そしてそこにおける価値についての全体的な知識を有することにより、人間同士・社会間対話を活性化させることができ、人間社会諸現象を統一的に解釈することのできる、人文教養をしっかりと身につけた次の諸人材を育成する。</p> <p>(1) 英語をはじめとする外国語の運用能力と国際社会に関する高度の知識をもつグローバル人材</p> <p>(2) 日本文学文化を中心とした文化芸術の専門知識を身につけた人材</p> <p>(3) 発達心理学、臨床心理学、教育心理学などを中心とした心理学の高度な知識を身につけた人材</p> <p>(4) 保育学、教育学関連の高度な知識と専門的スキルを身につけた幼稚園教諭・保育士を中心とした専門人材</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
(1) 現代的人文教養の内容について、学群教授会および学類会議を通して議論を深め、学群レベルでの認識を共有する。	(1) B
(2) 現代的人文教養の重要性について、学生に分かりやすく説明し、動機付けを行う。	(2) A
(3) レベルに応じた学修指導のあり方について検討すると同時に、ラーニングステーションとの連携により補習的指導を強化する。	(3) A
(4) 留学、海外研修、地域連携型学習等の実践的学びを展開する。	(4) A
(5) 少人数制等によるきめ細かな学修指導を図る。	(5) A
(6) ディスカッション、プレゼンテーション、学生企画等の能動的学修を展開する。	(6) B
実施結果と次年度課題	総合達成度 (A)
<p>総じて学類レベルでは活動内容について実施できたが、その経緯を学群レベルで議論して共有するまでには行かなかった。次年度は学科長会議での意見交換を通して学群レベルでの議論をどのように行うかを協議する必要がある。</p>	
1 人材の養成に関する目標と計画	
1-2. 国際学類 英語文化コミュニケーション専修 国際社会専修	
目標	
<p>1. 国際学類</p> <p>グローバル化が進む日本社会の内外で必要とされる英語をはじめとする外国語の運用能力と国際社会に関する広く深い教養とに支えられて行動できる人材を養成する。</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

2. 英語文化コミュニケーション専修

英語圏の言語・文学・文化、異文化コミュニケーション、英語教育の理論と実践を多角的に学びながら英語のスキルアップを図り、深い洞察力、豊かな表現力、国際的な視点と発信力を身につけた女性を育成する。

3. 国際社会専修

今日のグローバル化する国際社会について広く、かつ深い教養を備え、異質な文化や社会に寛容な態度で接することができる自立した女性を育成する。

年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）
<p>1. 国際学類</p> <p>(1) 入学直後に新生に行うガイダンスにおいて国際学類のディプロマポリシーの説明を丁寧に行い、4年間の学びの目標を意識させる。</p> <p>(2) 佐倉セミナーハウスで行う1年生の国際セミナーでは学園の歴史と伝統、学類・専修の教育目標、大学生としての生活態度について学ぶとともに、共に学ぶ友人との交流を深める機会とする。</p> <p>2. 英語文化コミュニケーション専修</p> <p>(1) 1年次では基本的な英語力を養い、英語圏の言語・文学・文化、異文化コミュニケーション、国際社会の仕組みを理解して国際的な視野を広げる。</p> <p>(2) 2年次では小人数の演習科目、試験対策科目、海外留学や語学研修で実践的な英語力を増強し、ディスカッション演習、ライティングやリーディング科目を中心として英語による発信力の養成を図る。</p> <p>(3) 3年次ではネイティブ教員による少人数制のチュートリアルイングリッシュを中心に英語の実践的学びと発信力の増強を図り、専門的な分野を学ぶ文学演習・文化演習では、教養を深めると共に論理的な思考の鍛錬と表現力を育成する。授業だけでなく講演会やセミナーなどを通して国際協力や地域貢献への自覚を促す。</p> <p>(4) 4年次では、引き続き実践的英語力を強化し、国際協力や地域貢献への参加を促進する。3年次までに修得した国際理解や専門知識を総合して、論理的に構成された、独創性のある卒業論文を完成させる。</p> <p>3. 国際社会専修</p> <p>(1) 1、2年次では、社会科学の複数の分野の授業を履修させ、学生に広い視野を持たせると同時に、異質な文化や社会の存在を意識させる。</p> <p>(2) 3、4年次では、社会科学の特定の分野を中心に、これに関連する複数の分野も合わせて集中的に学習し、レポートや卒論の作成を通じて、人間の営為を国際的視野に立って社会科学的に分析し、広く深い教養を身につけさせる。</p> <p>(3) 各教員は2～4年次のゼミや1年次からのオフィスアワー・担任制度を積極的に活用し、個別指導を通じて、学生の国際社会</p>	<p>1.</p> <p>(1) A</p> <p>(2) S</p> <p>2.</p> <p>(1) A</p> <p>(2) A</p> <p>(3) A</p> <p>(4) A</p> <p>3.</p> <p>(1) S</p> <p>(2) S</p> <p>(3) A</p>

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>や異質な文化への意識を高める機会をふやす。同時に学生の学習面や生活面の指導を行うことによって、学生生活を充実させ、退学防止にも資するようにする。</p>	
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (A)</p>
<p>概ね目標が達成された。次年度も基本的に同じ目標を立て、A以下の部分について改善を図る。英語文化コミュニケーション専修は、次年度は2年生の数が少ないので、スリム化前の最後の年度として少人数制のメリットを極力活かすことに注力する。それにより学生の英語による発信力の向上を図りたい。</p>	
<p>1 人材の養成に関する目標と計画</p>	
<p>1-3. 日本文学文化学類 日本文学専修 日本語表現専修 書道専修 文化芸術専修</p>	
<p>目標</p>	
<p>1. 日本文学文化学類 日本の文学と言語、古代から現代に至る多様な文化と芸術、書道の書学と書法を深く理解し、それぞれの領域で論理的な思考力、豊かな表現力、高度な技能を身につけて、文学・文化・芸術の継承・伝達・創造を意欲的に行う人材を育成する。</p> <p>2. 日本文学専修・日本語表現専修 世界の文化・芸術・伝統の中であって、自国の文学や文化のあり方を相対的に認識し、その豊かな表現の世界に対する関心を深め、自らも表現者として外界へ積極的に発信できる創造性に富んだ人材を養成する。また、国語科の教員として十分な知識と実技能力を有する人材を育成する。</p> <p>3. 書道専修 書への理解を深め、高いレベルの知識と表現力を身につけさせ、有力な書道公募に積極的に参加し、4年次には在住市町村で個展を開催させる。また、書道の教員や指導者として十分な知識と実技能力を有する人材を育成する。</p> <p>4. 文化芸術専修 芸術・倫理・科学・宗教等の文化諸分野に対して主体的感受性を養い、活発な芸術・表現活動によって地域文化・伝統文化を創造する担い手や、文化遺産に対する深い理解に基づき積極的な発信力をもつ人材を養成する。また、美術科の教員として十分な知識と実技能力を有する人材を育成する。</p>	
<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度 (S, A, B, C)</p>
<p>1. 日本文学文化学類 日本の文学や文化・芸術などに関する多様なテーマ・課題に積極的に取り組むように、オリエンテーションなどを通じて丁寧に説明する。また、各授業に対する取り組みとして、シラバスを精読した上で、事前・事後学習を含め、十全の努力をするように促す。専修に分かれる前の1年次には、日本の文学・文化に関する基礎的な知識や、発表・質疑応答などの方法を身につけさせる。</p> <p>2. 日本文学専修・日本語表現専修 (1) 2年次には、文学の研究方法、日本語表現の分析方法などを身につけさせる。</p>	<p>1. A</p> <p>2. (1) A</p>

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>(2) 3年次には、研究対象に対して問題を設定し、解決の方途を見つける応用力を身につけさせる。</p> <p>(3) 4年次には卒業論文を完成させ、優秀作は卒業論文発表会において発表させる。</p> <p>(4) 2～4年次を通じて、数多くの文学作品を読ませ、また、表現の機会を多く与える。</p> <p>3. 書道専修</p> <p>(1) 2年次には、書写的実技能力を体得し、書道史や文字学などの本格的な知識を身につけさせる。</p> <p>(2) 3年次には、専門的実技能力にあわせて書論および鑑賞など書学的知識を深めさせる。</p> <p>(3) 4年次には、卒業論文を完成させ、優秀作は卒業論文発表会において発表させる。また、作品を展観する個展を自主企画として在住市町村で開催させる。</p> <p>4. 文化芸術専修</p> <p>(1) 2・3年次には、広く日本の文化に関心をもたせ、抽象的な概念についての理解力を高めると同時に、絵画・デザイン・映像表現などの実践力を身につけさせる。</p> <p>(2) 2・3年次には、文化資料館における地域文化創造に関わる展示を企画・開催させ、また、同館での学生作品展に出品する作品を仕上げさせる。</p> <p>(3) 4年次には卒業論文・卒業制作を完成させ、優秀作は卒業論文発表会において発表させる。また、卒業制作展を市川市で開催させる。</p>	<p>(2) A</p> <p>(3) S</p> <p>(4) A</p> <p>3.</p> <p>(1) A</p> <p>(2) A</p> <p>(3) S</p> <p>4.</p> <p>(1) A</p> <p>(2) A</p> <p>(3) S</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (A)</p>
<p>人材の養成という点では、ほぼ満足のいく成果が得られている。書道や美術の技術的な側面とは異なり、文章を通じての理解力・思考力・表現力などは、なかなかその達成度を計ることが難しく、その点は主として日本文学専修・日本語表現専修の課題となっている。</p>	
<p>1 人材の養成に関する目標と計画</p>	
<p>1-4. 心理学類 心理学専修</p>	
<p>目標</p>	
<p>大学での学習方法やTP0に応じた言葉遣いなどの社会生活を営む上での具体的な技量を身につけた一人の女性として、また自立した人間として尊厳を備え、相手の気持ちを酌み、豊かな人間関係を取り結ぶことができる女性を育成する。</p> <p>心理発達コース（過年度生）においては、基本となる心理学の知識に加えて教育学の知識も獲得し、自分の可能性を探りながら、自立した自己を作り上げる。心理学・教育学の専門知識を生かした社会的活動の道を拓げる。</p> <p>心理学類については、現代に生きる人間の心の科学的な解明をめざして、発達心理学、臨床心理学、教育心理学の領域を中心に理論と方法の両面から学ぶ。そのことを通して、コミュニケーション能力、データ処理能力、心の働きに関する広い知識と深い洞察に基づいた実践的な技術を身につけさせる。</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
<p>在籍する心理発達コースの学生については、心理学・教育学に加え広く社会にむけての知識や視点を持ち、自分の可能性を探りながら、自立した自己を作り上げ、学びの集大成として卒業論文を完成させる。</p> <p>初めての4年生を迎える心理学類としては、4年間のカリキュラムに沿って、基礎ゼミー基礎科目ー専門科目という流れを踏襲しながら、以下の内容を達成するようにしたい。</p> <p>(1) 事実を知るためのデータ分析能力、人との関係を築くコミュニケーション能力、人の心の基礎を理解する能力を身につけさせる。</p> <p>(2) 社会人の基礎力となる、グループで議論する力や文章力、発表力、論理的な説明力などを身につけさせる。</p> <p>(3) 発達、臨床、教育などの領域を中心に、人の生に対する問いを解明するツールとその使い方を身につけさせる。</p> <p>(4) 学びの集大成として卒業論文を作成する。</p> <p>(5) 自分の将来の進路について情報を得て深く考えることができるようにする。</p>	<p>(1) A</p> <p>(2) A</p> <p>(3) A</p> <p>(4) A</p> <p>(5) A</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度 (A)
<p>専門科目での講義、演習、実習、卒業研究などとおして、上記の内容を学年の進行カリキュラムに沿って達成することが出来た。2014年度に第1期生として入学した学生たちを2018年3月に初めて社会に送り出すことになったが、4年生の学生たちは、心理学類のディプロマポリシーに沿って展開されている授業科目を修得しながら、発達、臨床、教育などの領域の中から自ら問いを立て、人の心の科学的な解明をおこない、学びの総決算として卒業論文を完成させた。4年間を通して学類で醸成された力は、自己の将来の進路についての熟考と自己決定を可能にした。94.1% (2018年2月14日現在) という就職率の高さはそのことの証左であるとする。</p> <p>次年度課題</p> <p>次年度は2期生の卒業生を送り出すとともに、心理学類最後の入学生を迎える年となる。2期生をスムーズに卒業させ、進路決定に導くとともに、最後の新入生を含め、他学年の教育においても、心理学類のディプロマポリシー達成に向けて教育をすることが次年度の課題である。</p>	
1 人材の養成に関する目標と計画	
1-5. こども発達学類 こども発達学専修	
目標	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

こども発達学類は、乳幼児を中心とした子どもの発達について、保育学、教育学を基礎として関連諸科学について学び、保育をめぐる今日的課題に応えられる広い識見と子どもの発達を援助できる高度な実践力と専門性を持った保育・幼児教育の担い手を育成する。以下に示す能力や知識、技能を身につけさせることを目標とする。

- (1) 社会や時代の変化の中で、子どもを取り巻く問題を探し、多角的に捉える広く深い教養と方法的知識
- (2) 教育・保育の場で実践する保育者としての専門知識と技能
- (3) 広い視野から子どもや保育の問題を捉え、探究するための専門知識と技能
- (4) 自ら学び続ける保育者として必要とされる課題解決能力とコミュニケーション力

年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
(1) 学生に対するきめ細かい指導のために担任（アドバイザー含む）や実習担当が中心となって面談を半期1回以上行い、学生自身がそれぞれの課題を明確にする。それと同時に教員同士で履修上の問題の情報交換を行う。	(1) S
(2) 将来に向けて幼稚園・保育所との良い出会いの機会であると同時に、「学校インターンシップ」制度導入を見据えながら、積極的に保育の場との接点を作るよう学生に対して教員が指導する（夏季休業中のアルバイトやキャリアデザインⅡの応用等）。	(2) A
(3) 異学年の交流の機会を設け、学生自身が学びの見通しをもち、深められる機会を設ける。	(3) S
(4) コースや学類全体の教員間での情報の共有と課題の検討をおこなう。	(4) A
(5) 学生ごとに manaba の利用や実習カルテを作成して、学生・教員とも長期の学びを追跡できるようにし、最終学年の最後に4年間の学びの振り返りができるようにする。	(5) S
(6) 卒業時点での目標を、①公立幼稚園・保育士の採用試験で3名以上、②就職者90%以上とする。	(6) S
実施結果と次年度課題	総合達成度 (S)

昨年度に続き新入生が定員を超過し、過去最大の学生数となった。新任教員3人に加えて、副学長・特任教授で業務を担当できない教員分を補うために非常勤教員を実習指導に導入することになったが、教員間の連携によって、個々の学生への対応は丁寧にするように心がけた。特に、出口となる保育者としての就職関連では、各自自治体の保育士増強策により、例年になく公立幼保での採用率となった（1/末現在15人超）。公立では就職活動が長期にわたる。次年度は公立園での採用人数が激減することが判明しているため、引き続き、学生へのフォロー及び実習園をはじめとする私立園との関係作りに今後も努めていきたい。

1 人材の養成に関する目標と計画

1-6. 家政学群

目標

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>以下のディプロマポリシーに従って「人を支える心と技術を持って行動できる女性」を養成する。</p> <p>生活を総合的・科学的に分析・考察できる力を身につけ、人々の生活の質の向上のために知識と技術を習得する。</p> <p>地域連携型の学びを導入し、生活の中での課題や問題を発見し、その解決に取り組む意欲と力量をつける。</p> <p>そのために、授業、ゼミ、卒業論文、卒業制作などを通して、学生1人1人の個性に合わせた丁寧な教育を目指す。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
<p>教員は、助手・実験助手の協力を得て以下の学生教育を担当し、学生の学習目標達成を支援する。</p> <p>(1) 3年への進級率をほぼ100%にする。</p> <p>(2) 4年では、集大成として卒業論文、卒業制作に取り組み、全員が提出できるようにする。</p> <p>(3) 数年かけて学群学生の延べ50%が地域連携型の学びに参加するように、教員が学生に積極的に働きかけるとともに、2017年の計画として、地域連携に参加した学生数を学群で集計し参加実態を把握する。</p>	<p>(1) A</p> <p>(2) A</p> <p>(3) A</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度 (A)
<p>(1) 3年生に進級せず2年留め置きとなった学生は、家政学群2年生272名中9名で3.3%であった。ただ、学生の10%に達する学類もあり取組が望まれる。</p> <p>(2) 卒業論文・卒業制作の提出は健康栄養は100%提出、他の2学類は未提出者が、6名と3名となった。課題1と同様に未提出が約10%となる学類もあり、今後経年的傾向を見ていく必要がある。</p> <p>(3) 家政学群共通科目である、「地域創造演習」の履修者は、主に1年生で110名であった。これは1年の40%を示している。</p>	
次年度課題	
<p>学生に対するていねいな教育の実施を各学科で検討することを依頼していく。課題3については、学生アンケート等の実施により、地域連携授業・企画の参加人数把握と地域連携の教育的効果の検討を行いたい。</p>	
1 人材の養成に関する目標と計画	
1-7. 服飾造形学類 服飾造形学専修	
目標	
<p>広く豊かな教養を文化的小よび科学的な側面から醸成するとともに、衣に関わる専門知識と、衣に関わる専門技術を基礎から応用まで身につける。知識と技術を有機的に関連させることを学び、その上で、高度な技術や表現力などを総合的に習得する。学びの専門性を高める資格取得を目指し、衣のエキスパートとして、社会で活躍できる女性を育成する。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>(1) 衣に関わる知識と技術に関連させて学び、社会で活躍できる人材の育成を学類の目標にしていることを、履修ガイダンス、授業、佐倉セミナー、衣料管理士説明会等様々な機会に学生に周知する。</p> <p>(2) 学類で取得できる資格について、学生に周知し、多くの学生が資格取得に挑戦する。</p> <p>(3) 1年次：服飾造形学類で学ぶための基礎技術の習得および、衣料材料等の専門知識について学ばせ、1年次からバランス良く履修させる。</p> <p>(4) 2年次：1年次の導入教育に専門性を付加しながら、適切な縫製技術の向上を図るとともに、順次実験系科目を履修させ、資格取得のために幅広く学ぶ。</p> <p>(5) 3年次：これまでに学んだ科目を、有機的に関連づけ理解させられるように、教員間でも連携を深め、応用へとつなげられるようにする。</p> <p>(6) 4年次：これまで学んだことを総合的に活用することで、自由な発想によるテーマで制作あるいは論文を発表させる。特に構成系では感性豊かなイメージの具現化、高度な縫製技術の習得、科学系では自由な発想と着眼、論理的思考、問題解決能力を重視する。</p>	<p>(1) A</p> <p>(2) A</p> <p>(3) S</p> <p>(4) A</p> <p>(5) B</p> <p>(6) S</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (A)</p>
<p>(1) 1年次の縫製基礎技術と知識に関連させての習得及び社会で活躍できる人材の育成を学類の目標に掲げている事を周知した。</p> <p>(2) 3年次までの知識や技術を応用して、4年次には、知識技術を応用して総合的に活用できる良好な指導ができ、目標にかなう人材養成がほぼできたと考える。特に、学んだことを総合的に関連づけるために、地域連携型の学びを多く取り入れ、多くの学生が地域で活躍しながら学ぶことができた。</p> <p>(3) 2019年度からの新カリキュラムについてはカリキュラム委員会を中心として精査・検討を行った。</p>	
<p>次年度課題</p>	
<p>(1) 達成度向上のために、教員は本学類のディプロマポリシーを、授業や佐倉セミナーなどのほかに、履修ガイダンスや衣料管理士説明会などさまざまな機会に、学生にわかりやすく伝えなくてはならない。今年度よりも資格取得者の割合を増やすことも課題である。</p> <p>(2) 教員間の連携を深め、学生が関連づけて理解ができるように、毎月の学科会の際に、各教員の担当科目の理解度や授業態度について情報交換し、授業に反映できるよう努め、大切な課題として継続して検討を行っていく。</p>	
<p>1 人材の養成に関する目標と計画</p>	
<p>1-8. 健康栄養学類 健康栄養学専修</p>	
<p>目標</p>	
<p>食と健康に関する総合的な知識、技術を習得し、人々の健康や生活の質 (QOL) 向上のために情熱をもって対応できる人材の養成を目指す。保健・医療、地域、</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

学校、職域、その他社会のあらゆる分野において、対象者のことを親身になって考え、思いやりを持って実践的対応ができる専門家の育成を目標とする。	
年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）
(1) 導入教育：学生は基礎ゼミ、キャリアデザイン、佐倉セミナー等を通じて、ヒューマニズムや倫理観を身につけ、コミュニケーション能力等、表現力を高め、栄養士・管理栄養士の使命や役割を知る。	(1) A
(2) 専門基礎教育：学生は導入教育に専門的な学習を追加して、基礎的な理論と技術を身につける。	(2) A
(3) 実践専門教育：学生は専門基礎科目で学んだことを関連づけて理解し、実践できるように、応用的な学問を修める。	(3) A
(4) 総合的な力量を高める：学生は栄養士・管理栄養士として就労することを目標に、実践的な活動を追加し、現象を的確に捉えて問題点を把握して課題解決に向けた目標設定・計画立案ができるようにする。計画に応じて実施した結果を解析して評価し、報告書や論文にまとめることができるような能力を身につける。	(4) A
上記計画において、学習の一貫性をとるために関連領域の連携がとれるようにする。	
実施結果と次年度課題	総合達成度（ A ）
目標の達成を目指して、教員、スタッフは学生教育に熱心に取り組み、導入教育、専門基礎科目、実践専門科目をおおむね計画どおり実施した。 次年度は、学類のディプロマポリシーをしっかりと理解してもらうために、導入教育（基礎ゼミ、キャリアデザイン、佐倉セミナー）の更なる充実を図る。	
1 人材の養成に関する目標と計画	
1-9. 家政福祉学類 家政福祉学専修	
目標	
生命と環境を尊び、生活者の視点で多様な人びとの人権と尊厳を満たす共生社会をつくるため、衣・食・住・生活経営・家族関係といった家政学と、人の自立を支援することを対象とする社会福祉学がコラボレーションされた知識と技術を修得する。学びの専門性を高める資格取得をめざし、社会で活躍できる女性を育成する。フードスペシャリスト、家庭科教員免許、社会福祉士などの資格取得に向けて、自主的に取り組むグループづくりの雰囲気涵養する。 地域との連携を図り、卒業生のリカレント教育に資するため、地域への情報発信を積極的に行い、相談等には丁寧に応答し、学類の人材育成についての理念を周知する。また、学類で目標とする資格等の種類が多いため、個別の学生への支援など、入学時から卒業までの教育プランを立て支援していく。	
年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）
(1) 学類で取得できる資格について学生に周知し、多くの学生が資格取得を目標にする。	(1) S
(2) 学類の特色について、佐倉セミナー、オリエンテーション等の機会に学生に周知する。	(2) S
(3) 資格取得を自主的に勉強するグループを作る。	(3) S
(4) 福祉学習支援センターを中心に、ボランティアを紹介し、地域との連携を深める。	(4) S
(5) 問い合わせがある卒業生には、資料を配布するなど丁寧な対応をし、大学から卒業生への情報伝達を工夫する。	(5) S

和洋女子大学 2017年度目標と計画

実施結果と次年度課題	総合達成度 (S)
<p>家庭科教員、フードスペシャリスト、日本茶アドバイザー、社会福祉士を合わせて、4年次の半数以上が取得できる予定である。そのほか、福祉住環境コーディネーターなど家政福祉に関連のある資格について力を入れていきたい。資格取得に向けて、入学直後に実施している佐倉セミナーにおいて、学生に周知しており、関心のある資格取得についての情報周知が実施された。取得を目指す学生全員が、卒業まで資格取得できることが次年度の課題である。また、次年度は学科のディプロマとカリキュラムポリシーに基づいた学年ごとの目標を明確にした教育を徹底する。</p>	
<p>1 人材の養成に関する目標と計画</p>	
<p>1-10. 大学院：人文科学研究科 英語文学専攻 日本文学専攻</p>	
<p>目標</p>	
<p>1. 英語文学専攻 専攻分野を中心に広く深い学識を身につけさせ、収集した資料から研究課題を発見し、自らの問題意識と新しい知見や視野を持ち、高度な専門知識を持って社会に貢献できる職業人を養成する。</p> <p>2. 日本文学専攻 日本文学・日本語学についての深い知識と高度な専門性を獲得させることを目指し、また、高等教育機関及び研究機関における研究・教育従事者の育成はもとより、高等学校・中学校等の教育機関、文学館・博物館・資料館等の諸機関、その他の機関・企業等において、組織を支え、リーダーシップを発揮し得る人材を育成する。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
<p>1. 英語文学専攻 (1) 専攻する分野の専門書を原書で読み、テーマや論理の理解など英文の読解力と、言語事象の分析力を高める。 (2) 学生が文献を読み、与えられたトピックについて、日本語で筋道立てたレポートを作成する訓練をする。</p> <p>2. 日本文学専攻 (1) 広く深い知識と高度な専門性を獲得させるために、日本文学・日本語学の各分野について、古代から現代にわたる科目を出来得るかぎり開講し、専門的で高度な教育を行い、また研究方法を習得させ、その総括としての修士論文を作成させる。 (2) 研究者としての教育・訓練のために、学内外の学会・研究会への参加・加入を促し、他の機関、大学院の研究者との交流をはからせ、また、口頭による研究発表、論文等によって研究成果を公表・発信させる。 (3) 学内においても大学院学生の発表のための研究会等を設け、大学院学生の研究活動の機会と場所を提供する。 (4) さまざまな機関・学校等でリーダーシップを発揮し得る人材を養成するために、大学院学生にTA等への応募を促し、学生指導補助の経験を積ませる。</p>	<p>1. (1) S (2) S</p> <p>2. (1) A (2) A (3) A (4) A</p>

和洋女子大学 2017年度目標と計画

(5) 学生の意欲をはかるべく、研究内容を検討し進めていく。	(5) A		
実施結果と次年度課題	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="1798 217 1906 272">総合 達成度</td> <td data-bbox="1906 217 2150 272">1. 英文専攻 (S) 2. 日文専攻 (A)</td> </tr> </table>	総合 達成度	1. 英文専攻 (S) 2. 日文専攻 (A)
総合 達成度	1. 英文専攻 (S) 2. 日文専攻 (A)		
<p>1. 英語文学専攻 学生は、最新の研究から問題意識と深い知見を身につけ、その研究成果として優れた修士論文を完成させた。 次年度は入学者がいないが、大学院で学びたい学生のニーズを探り、それにマッチした研究指導ができるよう準備を進める必要がある。</p> <p>2. 日本文学専攻 概ね例年通りの成果が得られたと考えられる。また次年度以降、学生のニーズに合わせた科目を開設することにより、志願者の確保をはかっていきたい。</p>			
1 人材の養成に関する目標と計画			
1-11. 大学院：総合生活研究科 総合生活専攻 博士前期課程 博士後期課程			
目標			
<p>1. 博士前期課程 境界領域学問である生活科学に根差した基礎的研究能力の獲得を目指す。現行組織である栄養・食品分野、家政・福祉分野並びに服飾科学分野に拘泥することなく、総合生活研究科の特徴である視野の広い問題解決方法を見いだせる専門家の育成を行う。また、日本女子大学大学院家政学研究科との単位互換性の協定を補完的に活用する。</p> <p>2. 博士後期課程 研究テーマの設定に際しては、テーマの持つ社会的意義と重要性を意識し、人類、社会に貢献できる生活科学に根差した問題解決能力のある研究者育成を目指す。博士後期課程修了者は、研究・教育のプロフェッショナルとしての誇りを持ち、大学の教育職や公的機関、企業体の研究機関に就職できるように努める。</p>			
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)		
<p>1. 博士前期課程 (1) 学際領域である「総合生活」の意義を把握させ、多角的な問題解決能力を止揚することを目的に総合生活概論（オムニバス方式）を受講し、広い視点に基づく修士論文作成の一助とする。 (2) 年一回以上の学会発表、English Academic Presentationを行なうことで、プレゼンテーション能力を養成する。 (3) 質の高い修士論文の完成を目指す。</p> <p>2. 博士後期課程 (1) 個人の問題解決に関連ある分野並びに付随する研究分野が何であるかを理解させるために総合生活特講（オムニバス方式）を受講させる。それにより研究企画力の養成を行う。 (2) 国内学会、国際学会での成果発表を推奨し、支援する。</p>	<p>1. (1) S (2) S (3) A</p> <p>2. (1) S (2) A</p>		

和洋女子大学 2017年度目標と計画

(3) 課程期間の3年で終了できるための指導教員のスキルアップ。	(3) B		
実施結果と次年度課題	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="1794 248 1906 308">総合 達成度</td> <td data-bbox="1906 248 2143 308">前期 (S) 後期 (A)</td> </tr> </table>	総合 達成度	前期 (S) 後期 (A)
総合 達成度	前期 (S) 後期 (A)		
<p>実施結果</p> <p>当初計画に加え、今年度は研究倫理とその土台となるコンプライアンス教育も総合生活概論にて取り扱い、高い志に基づく研究者倫理が根底に流れている教育・論文作成に取り組んだ。社会人博士後期課程修了予定者は、本業との関係で原著論文の数が揃わず、残念ながら満期修了となってしまった。指導教員を含めたサポートが十分ではなかったことを反省し、期間内に終了できるような指導教員を含めたサポートを継続したい。</p> <p>次年度課題</p> <p>非常勤講師のいわゆる5年ルール順守に伴い、次年度はEnglish Academic Presentation 担当外国人講師が交代となる。現在は電子メールベースでやり取りをしているが、次年度へ向けて綿密な打ち合わせを一層行い、前任講師と同様の効果を得ることが出来るように尽力したい。</p>			
<p>2 入学者受け入れの方針と定員の確保</p>			
<p>2-1. 人文学群</p>			
<p>目標</p>			
<p>(1) 人文学群では、名実共に高等学校卒業以上の基礎学力を有する者の中から次の基準により入学者選抜を行う。</p> <p>(2) 異文化コミュニケーションの基礎的能力があり、国際交流・協力を強い意欲をもつ。</p> <p>(3) 日本の文学や文化芸術に関する基礎的知識をもち、大学でそのレベルを高め、人生に活かしていきたいという意欲が認められる。</p> <p>(4) 人間のこころの科学的探求に関心があり、人間・社会とのコミュニケーション能力向上に強い意欲をもつ。</p> <p>(5) 保育・幼児教育に強い関心をもち、関連免許・資格を取得して社会に貢献したいという意欲をもつ。</p> <p>(6) 入学定員の確保に努める。</p>			
<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度 (S, A, B, C)</p>		
<p>(1) 定員確保のために次の諸点に注力する。</p> <p>1) 各種セミナーに参加して入学結果状況の情報収集に努めるとともに動向を把握し、定員未充足の学類について学群として対応を検討する。</p> <p>2) 具体的な広報活動として、オープンキャンパスでの取り組みについて再点検し、学類として工夫する。</p> <p>(2) 間接的な広報活動として、次の諸点に注力する。</p> <p>1) 高大連携関連交流を強化 (国際学類の「テキスト」を媒介とした交流、出前授業等)</p>	<p>(1)</p> <p>1) B</p> <p>2) A</p> <p>(2)</p> <p>1) B</p>		

和洋女子大学 2017年度目標と計画

2) 学類発行・開設のメディア（国際学類の「コクプロ」など）を有効活用する 3) 社会的認知度をあげるイベント（競書大会など）に注力	2) A 3) S
実施結果と次年度課題	総合達成度（ A ）
活動内容の（1）-1）では学群としての対応について十分に検討する余裕がなかったが、そのほかの項目では定員確保に向けて良く取り組めた。とりわけ、（1）-2）のオープンキャンパスでの取り組みや（2）-2）に関連して大学ホームページでの心理学類をはじめとした学類の広報活動の取り組みは高い達成度を示した。次年度はオープンキャンパスやホームページの学びのページなどを通じて各学科は引き続き積極的な活動を進めるのに加えて、今年度の課題であった大学入試の動向について学外の高等教育情報誌などの情報収集を積極的に行い、学科会議でその動向を分析する。	
2 入学者受け入れの方針と定員の確保	
2-2. 国際学類 英語文化コミュニケーション専修 国際社会専修	
目標	
<p>1. 国際学類</p> <p>国際学類では、自分の視点を保ちながら異文化を理解・受容すると同時に、自らの考え・文化を積極的に発信することのできる国際的なコミュニケーション能力と、国際社会の仕組みや動向に対する深い洞察力をもち、国際諸地域の多様な文化背景をもつ人々との共生を具体的に検討し実現していく能力を培うという本学類のアドミッションポリシーに沿って、主に次の基準により入学者選抜を行い、定員の確保をめざす。</p> <p>（1）英語をはじめとする外国語によるコミュニケーション能力の向上に強い意欲をもつ。 （2）世界諸地域の社会・文化・歴史に興味をもち、日本や世界の時事問題に関心をもつ。 （3）異なる社会や文化、人々と積極的にコミュニケーションを行おうとし、国際社会の協力と共生に関心をもつ。 （4）航空、観光、貿易、金融などの仕事に関わる職業に就きたいという意欲をもつ。 （5）高等学校卒業以上の基礎学力を有している。</p> <p>オープンキャンパスでは両専修の緊密な連携により学類として特色をより際立たせる取り組みの場とする。昨年に引き続き在学生の視点から専修の学びの魅力を高校生とその保護者にアピールしてもらう機会を設けたい。</p> <p>また昨年に引き続き特待生入試制度について県下の高校を訪問して広報活動を行う。</p> <p>なお、両専修とも本学のホームページ上のブログにおいて広報活動を積極的に行う。</p>	
年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）
<p>1. 英語文化コミュニケーション専修</p> <p>（1）ホームページ上の専修発のトピックスを通して、英語教育と留学体験促進などの活動を広報し、認定留学、海外セミナー</p>	<p>1.</p> <p>（1） A</p>

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>(6ヶ月・1年留学)などの学内奨学金の充実を積極的にアピールする。</p> <p>(2) オープンキャンパスで、外国人教員による授業、地域・文化に関わる授業、ALC を用いた英語授業やその他のユニークな授業を紹介し、海外セミナーや留学経験のある在校生とのQ&Aの機会を充実させ、在学生のTOEIC得点の上昇をデータで示し、英語を活かして就職に成功した学生の例を紹介する。</p> <p>2. 国際社会専修</p> <p>(1) 専修のブログである「コクブロ」の内容を充実させ、閲覧数が増加するよう広く告知する。</p> <p>(2) オープンキャンパスの企画について定例会議で検討し、高校生へのアピールの仕方を工夫する。</p> <p>その他、夏季休暇中に実施する教員免許状更新講習に参加する英語および社会科の先生方に対して学類の教育内容について情報を提供する。</p>	<p>(2) A</p> <p>2.</p> <p>(1) B</p> <p>(2) A</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (A)</p>
<p>概ね目標が達成された。広報入試センターの協力のもとに大学ホームページに頻繁に記事を掲載し、海外留学について、学生視点での広報活動ができた。オープンキャンパスにおいては、地域・文化に関わる授業、ALC を用いた授業の紹介はできなかったが、English Day での英語の卒論発表を在学生の言葉でアピールすることができた。2-(2)については定例学類会議の代わりに学類長、専修主任、入試委員で検討を行った。次年度はブログ「コクブロ」の内容を充実させ、広報を強化する必要がある。</p>	
<p>2 入学者受け入れの方針と定員の確保</p>	
<p>2-3. 日本文学文化学類 日本文学専修 日本語表現専修 書道専修 文化芸術専修</p>	
<p>目標</p>	
<p>日本文学文化学類</p> <p>(1) 日本の文学・文化・芸術に関心を持ち、文学や言語表現、現代の文化・芸術と文化遺産、伝統芸術としての書道に関する基礎的な知識と能力を有し、その知識と能力を高めていくことへの意欲を持ち、自分の将来像に向けて努力する意志をもつ志願者を受け入れる。</p> <p>(2) オープンキャンパスなどを通じて受け入れの方針をよくアピールし、AO・推薦・一般入試などの入試方法の違いと特徴を明らかにして、受験者が最も適切な入試を選択できるようにする。</p> <p>(3) 推薦入試では指定校の見直しを継続的に行い、推薦枠の増減等を検討して意欲ある受験者の増加を図る。</p> <p>(4) C日程入試では一般入試であることを考慮した面接を行う。</p> <p>(5) AO入試と推薦入試で定員の70%程度を確保できるようにする。</p>	
<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度 (S, A, B, C)</p>

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>1. 日本文学文化学類</p> <p>(1) 学類・専修ホームページの更新回数を増やすことに努める。また、記載記事の内容を受験生のレベルにあわせて分かりやすくし、ことに修学前プログラムについて十分に案内する。</p> <p>(2) オープンキャンパスにおける研究室ツアーを活用し、設備などの修学環境を十分に紹介・説明する。</p> <p>(3) 出前授業の要請には積極的に応え、学類の紹介につなげる。</p> <p>(4) 学校説明会などを利用して、高校の進路指導教員との関係を深める。</p> <p>2. 日本文学専修・日本語表現専修</p> <p>(1) 推薦入試では専修の特殊性に関心と理解をもつ学生を選考する。</p> <p>(2) A0 入試では受験生の個性を見極めて選抜し、専修の体質との相性や他学生に良い影響をもたらしうると見られる個性を重視する。</p> <p>(3) 専修の知名度をあげるために以下の事を実施する。</p> <p>1) 教育方針、教育内容の広報に努め、幅広い文学作品を扱うことや、言語表現に関する充実した授業があることをアピールする。</p> <p>2) オープンキャンパスにおいて、体験授業の拡充を図り、掲示が高校生になじみやすい形となるように工夫する。</p> <p>3. 書道専修</p> <p>(1) 推薦入試では専修の特殊性に関心と理解をもつ学生を選考する。</p> <p>(2) A0 入試では受験生の個性を見極めて選抜し、専修の体質との相性や他学生に良い影響をもたらしうると見られる個性を重視する。</p> <p>(3) 専修の知名度をあげるために以下の事を実施する。</p> <p>1) 教育方針、教育内容の広報に努め、書道に関する専門的な知識と技能を有した教員（非常勤を含む）と教育設備の充実をアピールする。</p> <p>2) オープンキャンパスにおいて、体験授業の拡充を図り、掲示が高校生になじみやすい形となるように工夫する。</p> <p>3) 和洋女子大学競書大会の実施についてアピールする。</p> <p>4. 文化芸術専修</p> <p>(1) 推薦入試では専修の特殊性に関心と理解をもつ学生を選考する。</p> <p>(2) A0 入試では受験生の個性を見極めて選抜し、専修の体質との相性や他学生に良い影響をもたらしうると見られる個性を重視する。</p>	<p>1.</p> <p>(1) B</p> <p>(2) A</p> <p>(3) S</p> <p>(4) A</p> <p>2.</p> <p>(1) A</p> <p>(2) A</p> <p>(3)</p> <p>1) A</p> <p>2) A</p> <p>3.</p> <p>(1) A</p> <p>(2) A</p> <p>(3)</p> <p>1) A</p> <p>2) A</p> <p>3) A</p> <p>4.</p> <p>(1) A</p> <p>(2) A</p>
---	---

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>(3) 専修の知名度をあげるために以下の事を実施する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 教育方針、教育内容の広報に努め、学生相互の啓発による学習・創作活動が活発であることをアピールする。 2) オープンキャンパスにおいて、理論と実践の融合を示す体験授業を行い、掲示が高校生になじみやすい形となるように工夫する。 	<p>(3)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) A 2) A
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (A)</p>
<p>オープンキャンパスや出張講義などの機会を通じて、日本の文学や文化を学ぶ意義をアピールするなど、定員の確保をめざしてさまざまな活動をしており、その成果が現れつつあるものと感じている。オープンキャンパスでさらに新味を出す余地はあろうし、ホームページを活用し切れていない点も、今後の課題である。</p>	
<p>2 入学者受け入れの方針と定員の確保</p>	
<p>2-4. 心理学類 心理学専修</p>	
<p>目標</p>	
<p>心理学を多様な側面から学び、人とのかかわりやコミュニケーション、他者と自己の心の動きに気づく事のできる学生を求める。AO入試および推薦入試では、本学類を志望する動機を明確に表現し、社会で生起する様々な事象に関心を持ち、理論や実験・調査などによる人間の心理の科学的な解明に意欲を持つ受験生を受け入れる。高校時代に何を努力してきたかを明確に表明でき、人間関係に調和の取れる学生を選抜する。出席日数および学力も重視し、入学後の適切な自己管理能力を選抜項目に取り入れる。そのうえで教育の充実に資する適正な入学者数を確保する。</p>	
<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度 (S, A, B, C)</p>
<p>(1) 関係部署との連携を図り、効果的な広報活動をおこなう。心理学新入生セミナーをはじめとする心理学類のイベントや出張講義、オープンキャンパスや大学案内、授業体験、大学説明会などを、広報・入試センターとの連携を密にとりながら進める。心理学類のアドミッションポリシーの広報については、大学案内をはじめ、心理学類で独自に作成したパンフレット等を活用する。また、学類のホームページを活用し、学類のカリキュラムや授業の様子、学生生活、教員の研究や社会活動などをこまめに発信し、心理学類を社会に周知する。</p> <p>(2) 心理学類のカリキュラムの特色を踏まえ、以下の事をオープンキャンパスで実施し、参加者への満足度を高める。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 学年推移を踏まえたカリキュラムの提示 2) 体験授業の実施 3) 心理テストの体験 4) 箱庭などの臨床心理学的技法の見学 5) 卒業論文の展示 6) 卒業生の進路の展示 7) 卒業生・在学生からのメッセージ 	<p>(1) S</p> <p>(2) S</p>

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>8) オープンキャンパスに参加する在学生への指導を強化する。 (3) 併設高校ならびに併設中学校、さらに併設校以外の高大連携により、本学類の周知を図る。 (4) 2016年度ならびに2017年度の心理学類入試データや過去の入試データと照らし合わせながら、入試状況や志願者の動向をより深く分析・吟味し、指定校の絞り込みをはじめ入試種別ごとの定員の適正化をはかりつつ、教育効果を考慮した入学者定員の確保をめざす。</p>	<p>(3) A (4) S</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (S)</p>
<p>広報・入試課と連携し、ホームページその他の媒体を活用し、心理学新生セミナーをはじめとする心理学類の学びや学生に関する情報を積極的に広報した。出張講義の数も順調に増えている。オープンキャンパスについては、すべて目標を達成することが出来た。オープンキャンパスの参加者や2018年度入試の出願者総数が現時点で昨年度よりも増えていること、ならびに心理学類として初めての留学生が受験したことは、心理学類のアドミッションポリシーの積極的な広報活動の成果と考える。併設校については、出張講義を通して学類の情報提供を行った。指定校の絞り込みや入試種別ごとの定員数は、広報・入試課の収集している高校の情報を含め、今年度の最終入試結果および手続き状況を踏まえて行っているところである。入学者定員確保については、現時点(2/23)で定員確保が達成できそうな状況である。</p> <p>次年度課題</p> <p>次年度取り入れられる予定の新たなA0入試の実施方法について検討を重ね、アドミッションポリシーにかなう生徒の確保が課題となる。また、留学生を含め、社会人の受験も視野に入れての面接を含めた入試方法の検討が課題である。</p>	
<p>2 入学者受け入れの方針と定員の確保</p>	
<p>2-5. こども発達学類 こども発達学専修</p>	
<p>目標</p>	
<p>入学者受け入れに関する目標：</p> <p>保育・幼児教育に関する高度な専門性を備え、子育て中の保護者に寄り添いながら子どもの育ちに真摯に関わることができる保育者となるために、意欲と情熱を持って保育を学び、保育士・幼稚園教諭の資格・免許を取得して地域に貢献したいという意欲を持つ学生を受け入れる。</p> <p>適正入学者数確保に関する目標：</p> <p>定員充足を目指す。オープンキャンパスや情報提供などで定員増に関しても積極的な広報を行う。保育者養成という観点から、適性の高い受験者(学力、意欲、出席等を含む学びの持続力、生活力等)を各入試方法によって選抜する。</p>	
<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度 (S, A, B, C)</p>
<p>(1) 学類としてのアピールポイントや教育課程について、より積極的に広報・入試センターと情報を交換・共有し、協力して高校への広報活動につとめる。広報・入試センターとの連携を強化する。</p>	<p>(1) A</p>

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>(2) オープンキャンパスを通して、学生一人ひとりを大切にすると同時に、卒業後の進路や可能性を伝え、受験生が学生生活とその後の展望、学びの見通しがもてるように配慮する。</p> <p>1) 授業の様子を写真やスライド、教育振興支援費による活動報告書でわかりやすく提示する</p> <p>2) 簡単な手作り玩具の制作や体験授業を充実させる</p> <p>3) 具体的な実習・就職先の展示・紹介</p> <p>4) 在学生への相談や入試体験談ができる場を設定する</p> <p>(3) 併設校からの受験生を確保し、適性のある学生を受け入れるという観点からオープンキャンパス、説明会等を活用して併設国府台、九段高校の教員、生徒や保護者に学びの中味を周知徹底する。</p> <p>(4) 定員管理を徹底するために、各入試の合格者数の管理、補欠合格の利用などにより適正な入学者を確保する。</p> <p>(5) A0、推薦入試では本学類を志望する動機を明確に表現し、保育や子育てに関する社会的関心が高く、その実践の担い手としての適性の高い受験生を受け入れるためにオープンキャンパス等での説明を密にする。</p>	<p>(2) A</p> <p>(3) A</p> <p>(4) C</p> <p>(5) A</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (B)</p>
<p>昨年度に引き続いて定員を大幅に超過することになり、千葉県への説明等対応に追われることになった。その一方で 2018 年度入学生の入試に関しては、看板教授が抜け、学費まで上がったことで、2 年次から来校しているリピーターが減少傾向にあり、危機的な状況と認識している。オープンキャンパス等では、学科の学びに関して、教員・スタッフ学生とも活動報告書や学類で作成した説明ファイルを活用して丁寧な説明を行った。次年度は、A0 入試（新方式）の工夫に加えて、オープンキャンパスの内容の見直し、効果不明な広報活動の整理等、適性の高い学生を確保するための広報戦略を考えていきたい。</p>	
<p>2 入学者受け入れの方針と定員の確保</p>	
<p>2-6. 家政学群</p>	
<p>目標</p>	
<p>以下のアドミッションポリシーにより入学者選抜を行う。</p> <p>生活（衣・食・住・家庭・福祉・環境・健康）の科学に関心があり、好奇心と探究心が旺盛な人。</p> <p>実験・実習・演習などの課題に積極的に取り組み、知識や技術の修得に向けて計画性や継続性などの姿勢を持つ人。</p> <p>大学での学びを家庭内での活用に留まらず、人々の幸福な生活のために貢献する意欲のある人。</p> <p>家庭科教員、衣料管理士、栄養教諭、栄養士・管理栄養士、社会福祉士などの資格取得、就労を目指す人。</p> <p>2017 年度の入学者は 2016 年を下回り定員充足が危ぶまれる。2018 年度入試では定員確保を目指す。</p>	
<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度 (S, A, B, C)</p>

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>(1) 2018年度入試では家政学群の定員確保を目指す。</p> <p>(2) 高校の家庭科教員との意見交換を年1回実施し、高校生の進路指導における家政学群の課題を検討する。</p> <p>(3) オープンキャンパスにおいて学群として生活科学の学び、家政学群共通科目などを紹介する。</p> <p>(4) 学群PR紙を作成し、千葉県、および近郊の高校に配布する。</p> <p>(5) 2016年度卒業生は11名が家庭科教員の採用試験に合格した。2017年度は今年の実績の維持(10名以上合格)を目指す。 そのためにも、教職教育センターとの連携を密にする。</p>	<p>(1) S</p> <p>(2) B</p> <p>(3) S</p> <p>(4) S</p> <p>(5) B</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (A)</p>
<p>(1) 2018年入試はまだ終了していないが、2017年度に比べ、服飾造形・健康栄養で増え、280名の定員充足が期待できる。</p> <p>(2) 卒業生の家庭科教員との意見交換を予定していたが実現できなかったため、次年度の実施を目指したい。一方、併設校の教員との意見交換会が実施でき、家庭科では併設中学の3年生に対して、大学施設で大学教員による、中学校の授業を実施することができた。併設校の受け入れ拡大につなげていきたい。</p> <p>(3) 毎回のオープンキャンパスにおいて、家政学群コーナーを設置し、家政学部の学びの特徴、就職状況などを紹介することができた。</p> <p>(4) 学群インフォメーションを2000部作成し、入試広報の発送に乗せることによって、大学接触者および、家庭科教員、卒業生家庭科教員に配布することができた。</p> <p>(5) 既卒者も含めると8名の学生が教員採用試験の合格を果たしたが、4年生は内2名のみであり、現役学生の家庭科教員採用試験合格は1人に留まった。</p> <p>次年度課題</p> <p>高校教員との意見交換会の企画の実施を課題としたい。加えて教員を目指す学生に対する学生指導の充実および、教職教育支援センターの連携を深めていくことが課題となる。</p>	
<p>2 入学者受け入れの方針と定員の確保</p>	
<p>2-7. 服飾造形学類 服飾造形学専修</p>	
<p>目標</p>	
<p>(1) 定員の80名を目標として、この適正な確保に全力を注ぐ。広報・入試センターとの連携を強化し、学類インフォメーション等で、学類の学びの特徴や魅力をオープンキャンパス、体験授業等の学校常時に対応して、機動的に行うことを目標とする。入学者受け入れの方針としては、多角的な入試選抜視点で志願者の伸びる可能性を見出し、多面的な人材確保と、志願者数の確保を目指す。</p> <p>(2) 入学試験時の志願者の成績だけでなく、服飾分野に対する意欲や適性、また将来性の評価も含めた総合的選抜を行う。特に高校までで適性を発揮することができなかった者に対して、服飾という新しい分野での成長性を適切に評価することを目指す。</p> <p>(3) カリキュラム、学習指導・生活指導・進路指導等における学生の満足度を向上させる。</p>	
<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度 (S, A, B, C)</p>

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>(1) 教員が中心となり主体的にオープンキャンパスを実施する。その際、助手や学生等の若手を活用し、若い人の視点での企画の実施を行う。</p> <p>(2) 大学ホームページを活用し、地域や社会とのコラボレーション活動の内容や学生の様子を積極的に記事にして、高校生に学びの魅力を伝える。</p> <p>(3) 推薦入学者をより多く確保する為、高校への働きかけを強化する。</p> <p>(4) 実際に新生及び各学年の在校生や卒業生に対して入学前と後で、抱いていたイメージにどのようにギャップがあったかをヒヤリングし、より魅力的な学類のアピールへ繋げる。</p> <p>(5) 高校生自らが提供する方法での情報を収集し、服飾分野に関心のある生徒にダイレクトメール等を送付する。</p> <p>(6) 服飾業界への理解、職業意識の醸成、キャリア形成の支援に取り組む。</p> <p>(7) 引き続き職業から惹き付けるなど、入学案内の大幅な構成変更を強力に進める。 入学案内には、ファッション業界での活躍、衣料管理士、家庭科教員など将来の方向性を明確に示し、そのための 学びの過程を視覚化する。</p> <p>(8) A0、推薦入試での面接評価を重視し、意欲・適性・将来性の評価につながる評価を行う。</p> <p>(9) 系統的、体系的に学ぶ為に、教科間・教員間の連携をとり効果的な教育体制を整える。教員及びスタッフ全員が、それぞれの内容を共有し、学習指導・生活指導・進路指導に反映し学生の満足度を高める。</p> <p>(10) 新生、併設高校生へのアンケートを実施し、学生の指向を調査し、広報戦略にフィードバックする。</p>	<p>(1) S</p> <p>(2) S</p> <p>(3) A</p> <p>(4) A</p> <p>(5) B</p> <p>(6) A</p> <p>(7) S</p> <p>(8) S</p> <p>(9) A</p> <p>(10) B</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (A)</p>
<p>(1) 本年度のオープンキャンパスは、教員が中心となり主体的に実施できた。</p> <p>(2) ファッション業界での活躍、衣料管理士、家庭科教員など将来の方向性を明確に示し、学びの過程を視覚化する企画を立案した。広報・入試センターと連携し、ホームページの学類インフォメーションに、積極的に記事を投稿し、学類の魅力を発信した。学類紹介をはじめ、学類の取り組みやオープンキャンパス、授業の写真を多くとり入れて掲載するなど高校生に分かりやすい工夫した。その結果、参加した高校生や保護者から高い評価を得た。</p> <p>(3) 2017年度入試では昨年度よりも指定校推薦入試、A0入試での入学者が増えたが、定員を満たすことが出来なかった。併設校(推薦)からの入学者が、昨年度は7名であったが、本年度は1名と大きく減少し、学類としての方向性を見直す必要がある。</p> <p>(4) 遠方からの指定校申し出に、広報・入試センターと連携を取りながら、迅速に対応し、入学者確保につなげた。</p> <p>(5) 新生のヒヤリングを4月下旬に実施した結果、本学類の専門性と学びの広さを理解できていることが明らかとなった。さらに、OCで、将来の選択肢の広さを実感できるように、高校生に伝えていきたい。</p> <p>次年度課題</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

- (1) 受験生が、将来の方向性と学類での学びを明確に結びつけられないことに原因がある。学類の魅力的なアピールを更に検討する。
- (2) オープンキャンパスでの展示では、服飾業界への理解、衣料管理士、家庭科教員など将来の方向性を明確にし、1年次から4年次までの学類の学びと結びつけ視覚化する。同時に活躍する卒業生情報を掲示することを継続して検討する。引き続き学類紹介のため、県下の高校を中心にして訪問し、学類の広報活動を展開する。

2 入学者受け入れの方針と定員の確保

2-8. 健康栄養学類 健康栄養学専修

目標

食や健康に興味があり、人との関わりを大切にでき、専門的知識と資格を持って社会に貢献したいという希望を持ち、栄養士・管理栄養士に対する適性の高い入学生の確保を目指す。120名の定員の確保をすると同時に、入学数は、定員の1.1倍の132名を限度とする。

年度計画：活動内容

達成度 (S, A, B, C)

- (1) オープンキャンパスの充実：食や栄養、健康に興味のある高校生がわかりやすく参加しやすい内容にする。模擬授業やイベントなどに学生を積極的に参加させて、高校生が入学してからの様子をイメージできるようにする。
- (2) 指定校の見直し：入学後の学生の追跡調査（学業成績・栄養士就労状況・国家試験結果など）によって、質の高い学生が複数入学している高校を選出して、適性の高い入学生を安定的に確保するため、指定校を見直す。
- (3) 併設高校との連携：併設校のうち、場所的に近い和洋国府台女子高校と連携して、進路支援、家庭科教員等と交流して、健康栄養学類の学びの特徴について説明し、高校生に対しても説明会を開催し、入学者を確保する（受け入れ人数10名、併願3名）。九段校に対しては、機会があれば同様に説明して適性の高い入学者を確保する（受け入れ人数5名、併願2名）。
- (4) 一般入試科目の検討：A日程一般入試の科目は「国語」「英語」及び「面接」であるが、アドミッションポリシーに掲げたように入学後の専門科目の学習には、「化学」「生物」「数学」等の基礎学力が必要であるため、入学者選抜試験科目の検討を行う。特待生制度についても検討を行う。

(1) S

(2) S

(3) C

(4) A

実施結果と次年度課題

総合達成度 (A)

- 2017年度の入学者は131名。定員の1.1倍の132名に迫る入学者であった。2018年度も定員の1.1倍程度の入学者確保を目指す。
- (1) オープンキャンパス担当のスタッフを決め、オープンキャンパスの内容を検討した。
- (2) 指定校入学者の追跡調査を実施し、指定校186校で変更なし。指定校受験者は11名で前回より5名減。(2018年度入試結果)
- (3) 併設校保護者への説明会で併設校卒業生が説明を実施した。併設校受験者専願3名、併願1名(前年度同6名、3名)。(2018年度入試結果)
- (4) センター入試後の改革を見据えて、試験科目については理科・数学を加える方向で検討した。実施は全学的な方針に従う。一般入試において、面接を実施した。

和洋女子大学 2017年度目標と計画

次年度は、資格志向が強い高校生に対し、受入れの方針（アドミッションポリシー）をオープンキャンパス、併設校との懇談で明確に説明し、適性の高い入学生の確保を目指す。一方、教育の質を低下させないためにも定員の1.1倍を超えない入学者数を維持する。

2 入学者受け入れの方針と定員の確保

2-9. 家政福祉学類 家政福祉学専修

目標

衣・食・住などの家政と社会福祉の両方に興味・関心があり、両者について積極的に学びたい学生、他者とのコミュニケーションに関心を持ち協調できる学生、人が幸福だと思える社会づくりに貢献したいと考える学生などが入学するよう、さまざまな手段で広報し、入学定員を確保する。

年度計画：活動内容

達成度（S, A, B, C）

- | | |
|---|-------|
| (1) 指定校の検討：引き続き、本学類に入学実績のある高校や志願者の多い高校を優先する予定。入学後問題が明らかになった学生の出身校を指定校とするか、または、継続していこうとするかを検討する。 | (1) S |
| (2) 広報・入試センターと連携を図って、定員の充足に繋がる効果的な広報活動を行いたい。たとえば、本学類からは、学類で養成する専門職（社会福祉士、家庭科教員など）の特徴および学類における様々な活動内容を家政福祉学類インフォメーション等で知らせ、また、広報・入試センターの高校訪問担当者には、学類の情報を高校側に伝えてもらうための説明を十分行うとともに、高校からの意見をフィードバックしてもらう。 | (2) S |
| (3) 大学ホームページでは、学類の魅力が高校生に伝わるよう可能な限りわかりやすく説明する。学類での活動を記事にして公開するなど、学類での取り組みや学生の様子を伝える工夫をする。 | (3) S |
| (4) 2017年度入学生の出身高校に向けて、積極的な情報提供を行う。具体的には「家政福祉学類インフォメーション」などを、入学実績のある高校に送付する。 | (4) S |
| (5) 大学ホームページを活用し、在学生や卒業生の活躍を紹介するなど、学類の魅力が高校生に伝わるよう可能な限り分かりやすく説明する。 | (5) S |
| (6) オープンキャンパスで、本学類での学習や活動の内容および卒業生の活躍を紹介した展示物を充実させるだけでなく、妊婦の疑似体験や白内障の高齢者の疑似体験ができるコーナーも設け、学類の全教員と在学生が協力して来訪者に対応する。 | (6) S |
| (7) 授業公開や出前授業に積極的に協力し、参加した高校生と交流を図る | (7) S |

実施結果と次年度課題

総合達成度（ S ）

- | |
|---|
| (1) 指定校については例年通り指定・継続の判断を行った。遠方の高校も2名枠とする等実施した。 |
| (2) 相談援助実習報告会のHP掲載等行うとともに、高校訪問について和洋アンバサダーの派遣等行った。説明会で高校の進学担当教師に対し、また、教育実習訪問時に校長や家庭科教師に対し、本学類の情報提供を行った。 |

和洋女子大学 2017年度目標と計画

- (3) ホームページを活用し NPO 法人等とのコラボについて広報した。産官学連携の取り組みを HP で公開した。
- (4) 教育実習の巡回指導にも持参し説明した。
- (5) ホームページ等において在学生・卒業生の活動を紹介した。授業紹介のインフォメーションを掲載した。産官学連携の取り組みを HP で公開した。
- (6) オープンキャンパスで疑似体験コーナーを設けた。産官学連携の取り組みをパネルで紹介した。
- (7) 授業公開、出張講義について積極的に行った。公開授業に高校生が参加。肯定的な感想を得た。

次年度は保育士養成の申請も開始される見込みであるため、平成 31 年度の保育士を目指す学生の確保とともに、引き続き上記目標に取り組む。

2 入学者受け入れの方針と定員の確保

2-10. 大学院：人文科学研究科 英語文学専攻 日本文学専攻

目標

1. 英語文学専攻

専門分野の文献を英語で読み、学術的な思考力と表現力を身につけ、高度な専門性を必要とする職業につく意思を持った人を広く受け入れる。

2. 日本文学専攻

学類（学部）での学習に満足せず、より高度な専門性を体得し、自己の能力を社会に還元したいと考える学生を受け入れる。

年度計画：活動内容

達成度（S, A, B, C）

1. 英語文学専攻

- (1) 学類の卒業論文指導ゼミにおいて指導教員が大学院での高度な研究を解説すると共に、本専攻への進学説明会を行って大学院での勉学、研究の利点、過年度の修了生の進路を紹介する。
- (2) 実際の授業風景や学術講演会についての記事をホームページに掲載し、研究内容等の広報に務める。

- 1.
- (1) A
- (2) B

2. 日本文学専攻

- (1) 内部進学 of 学生が主であることから、2012 年度より始めた学類対象の進学説明会のより一層の充実をはかる（大学院の魅力。講義内容の周知等）とともに、オープンキャンパスにおいて説明コーナーを設けることにより、学生の確保につとめる。
- (2) 対外的には、卒業生や子育ての終わった世代を対象に、ステップアップをはかる場としての大学院での学びを訴える方法も検討したい。

- 2.
- (1) B
- (2) B

実施結果と次年度課題

総合
達成度 1. 英文専攻 (A)
2. 日文専攻 (B)

1. 英語文学専攻

- (1) それぞれのゼミで大学院への勧誘を行った。また、専攻への進学説明会を開催したが、参加者は 0 だった。新卒の在校生だけでなく、現役の中高教員や社会

和洋女子大学 2017年度目標と計画

人を対象としたカリキュラムへの改訂等、抜本的な改革が必要と思われる。

(2) 受験者を拡大するための広報は、大学だけでなく、教職関連や社会人の学び直し関連のHPを利用することも考えられる。

(3) 広報宣伝では、学術講演会の記事はHPに掲載したが、授業風景は企画したものの、実現できなかった。

2. 日本文学専攻

内部進学者対象の説明会が不調に終わった。方法の再考を早急に検討する必要がある。

2 入学者受け入れの方針と定員の確保

2-11. 大学院：総合生活研究科 総合生活専攻 博士前期課程 博士後期課程

目標

1. 博士前期課程

研究に意欲的な内部進学学生を求める。社会人については学び直し拠点としての大学院という方向性が見えるための組織改革に着手する。また、学会等で紹介用リーフレットを配布する。修士論文作成のための意欲と最低限の能力を持ったレベルの学生によって最終的に定員充足を目指す。

2. 博士後期課程

学会等で紹介用リーフレットを配布することによって、社会人の入学生を確保する。また、今年度から「過程を経ない博士論文」関連の運用を開始する。

年度計画：活動内容

達成度 (S, A, B, C)

(1) 博士前期・後期課程共に、学内よりの進学者促進のために、学部の授業内で大学院を学部3、4年授業で担当教員が広報する。

(1) S

(2) 日頃から学士課程の卒論生に担当教員を通じ大学院の魅力を説く。

(2) A

(3) 入学希望者の情報を、常に広報・入試センターと共有して適切な対策をとる。

(3) S

但し、全国的に就職状況が良好な時には大学院進学率が低下する傾向があるため、レベルを落とした大学院生のリクルートは行わず、指導教員が対応可能と判断するレベルの学生を求める。

実施結果と次年度課題

総合 達成度	前期 (S)
	後期 (S)

実施結果

I期試験において、博士後期課程1名、博士前期課程1名、II期試験において博士後期課程1名、博士前期課程2名の受験があった。また、組織改革の一環として、学部学科と直結する形で編成していた博士前期課程を生活科学に一本化した。

次年度課題

大学院協議会を起点とした広報入試との連携、主に健康栄養学類における講義での広報活動など、いくつかの手を打ったものの定員を100%充足することは出来なかった。学部生の場合、就職状況が比較的良く、大学院進学が第一選択となる状況への逆風はあるものの、引き続き大学院の魅力学部生や卒業生に発信して行きたい。

和洋女子大学 2017年度目標と計画

2 入学者受け入れの方針と定員の確保	
2-12. 広報・入試センター	
目標	
入学定員を充足させるとともに、本学のアドミッションポリシーを理解し、学習意欲の高い受験生を集める。	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
<p>学習意欲ある受験生を集めるために以下の活動を重点的に行う。</p> <p>(1) 本学に対して進学率の高い高校を中心に、高校訪問を行い高校教員に大学の情報を伝え、連携を強化して受験者を増やす。</p> <p>(2) 受験媒体などで、各学類の教育の特色、他大学との違い、資格、就職率を高校生、保護者、高校教員に伝える</p> <p>(3) オープンキャンパス、授業体験、出張講義で、高校生と教職員の直接接触の機会を増やし本学の認知度を高め出願につなげる。</p> <p>(4) 産学連携、学生の活動など本学の特色ある教育活動を、一般広告、ニュースリリース、公式ホームページ、ソーシャルメディアを活用して、幅広い世代に伝える活動を行い、本学の認知度を高める。</p>	<p>(1) S</p> <p>(2) A</p> <p>(3) S</p> <p>(4) S</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度 (S)
実施結果 <p>(1) 前年度データから高校訪問先を選定した。看護学科新設もあり、受験生は昨年よりプラス 446 名増。</p> <p>(2) 新設学部特集を中心に投稿した。</p> <p>(3) 授業体験など新たな企画を実施した。</p> <p>(4) メディアに対しての告知を行った。</p>	
次年度課題 <p>入学総数ではなく、各学科毎の定員充足を目指す。</p>	
3 学生定員（総収容定員）の確保	
3-1. 人文学群	
目標	
<p>退学の原因の原因を取り除くために次の諸点に注力することを目標とし、退学率を学群定員の2%以下に抑えたい。</p> <p>(1) 昨年度実施した学生生活アンケート調査および学生による授業評価アンケート調査の回答結果の分析に基づき学群・学類の課題を明らかにし共有する。</p> <p>(2) 各学類・専修における学びの目標について教員から十分な説明が行われるようにする。</p> <p>(3) 進路支援センターの方針のもと、各学類においても学生の進路に側面から支援を行う。</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

- (4) ラーニングステーションとの連携により、正課の授業以外の場においても学生の学修指導を行うことにより、脱落者をゼロにする。
- (5) 教員と学生間、学生同士のコミュニケーションを活性化し、学生の帰属意識を高める。
- (6) 学類会議を中心にして生活や健康面で困難を抱える学生の発見に務め、解決・改善に向け適切な助言と対応をする。

年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
(1) 担任やアドバイザーなど既存の相談窓口のあり方を再考し、学生にとってより相談しやすい環境を整える。	(1) B
(2) 学生一人一人の学修状況を全体的に把握できる仕組みを整え、個別指導に活用する。	(2) A
(3) 教務課との連携によって学類・専修において出席状況確認体制を整え、長期欠席者の早期発見に務める。	(3) A
(4) 学外研修（国際イベントへの参加、歌舞伎鑑賞等）、ゼミ合宿などを積極的に行う。	(4) A
(5) 留学、資格取得等の支援を積極的に進め、勉学意欲を高める。	(5) A
(6) 学年、学類を超えた学生同士の交流を積極的に進める。	(6) B
実施結果と次年度課題	総合達成度 (A)

年度計画に従って所定の活動が行われ、退学率も下記の通り 2%目標を達成した。年度当初（2017年4月3日時点）の人文学群学生数 1329 人から最新の学生数データ（2018年2月1日時点）で退学者 24 名、除籍者 2 名となり、在籍学生数に占める割合は 1.9%であった。ただ、退学者においては「修学意欲の低下」を理由とするものが目立つことから、次年度においても上記年度計画の（2）および（3）についてきめ細かな対応を継続し、退学者数をさらに減少させることが必要である。

3 学生定員（総収容定員）の確保

3-2. 国際学類 英語文化コミュニケーション専修 国際社会専修

目標

1. 国際学類

学類に所属するすべての教員が学類の教育目標を共有し、それに基づいて所属学生にきめ細かな指導や助言を行うように心がける。とくに、教員は新入生について実施する佐倉セミナーが教員や助手補に話しやすい、相談しやすいきっかけを生み出す重要な第1歩であるとの認識を共有して取り組む。1年生を対象とする保護者懇談会を開催し、学類のディプロマポリシーについて理解を深めてもらうとともに、学類と保護者との意見交換を通して緊密な関係の構築を目指す。また長期欠席者については必要に応じて保護者との面談を行い、具体的な対応を検討する。このような取り組みを通して退学者を在籍学生の 10 人以内に止めるように努める。

2. 英語文化コミュニケーション専修

担任と専修主任が中心となり、助手補の協力を得て、学生の勉学・生活上の相談に乗り、学習のモチベーションを高めて退学者を減らす。

3. 国際社会専修

各教員が日頃から学類および専修に所属する学生にきめ細かな指導や助言を行うとともに、専修主任は教員および助手補と協力して、学生が気軽に教員に話しか

和洋女子大学 2017年度目標と計画

けられる雰囲気醸成し、退学者を減らし定員の確保に努める。	
年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）
1. 国際学類 (1) 佐倉セミナーの授業で1年生の学生同士および教員とのコミュニケーションを促す場を提供し、本学および国際学類に愛着と誇りを持つ機会とする。 (2) クラス担任、基礎ゼミ担当教員は学生との緊密なコミュニケーションを維持する。 (3) 保護者懇談会を開催し、保護者との連絡を密にして学生の在学状況を把握する。 (4) 1年生に対しては2年次の専修選択などの疑問に担任を中心に対応する 2. 英語文化コミュニケーション専修 (1) 専修会議において欠席日数の多い学生を報告し、担任を中心に情報の早期取得と迅速な解決を目指す。 (2) オフィスアワーの周知を徹底させる。 (3) 学生が不安や不満を無記名で投稿できるようにオフィス前に質問箱を設置し、月一度チェックしてフォローを徹底する。 (4) 長短期海外留学や語学研修、TOEIC受験の広報に努め、学類における勉学の意欲を高める。 3. 国際社会専修 (1) 専修主任は教員および助手補の協力のもとに、欠席が多い学生を把握し、適宜指導する。 (2) 1年生が孤立するのを防ぐために、オフィスアワー制度の有効利用を計画的に進める。	1. (1) S (2) A (3) A (4) A 2. (1) B (2) A (3) A (4) A 3. (1) A (2) B
実施結果と次年度課題	総合達成度（ A ）
概ね目標が達成された。月1回の専修会議での情報共有よりも学内回覧による情報共有のほうが早期対応につながりやすいとの認識を持っている。質問箱への投書は今年度もなかった。次年度は担任の役割明確化、オフィスアワー有効利用企画等を図っていく必要がある。	
3 学生定員（総収容定員）の確保	
3-3. 日本文学文化学類 日本文学専修 日本語表現専修 書道専修 文化芸術専修	
目標	
日本文学文化学類	
(1) 大学案内やオープンキャンパス、AO入試や推薦入試の面談・面接などを通して、学類全体の方針と各専修の特質とをよく伝え、入学後のミスマッチによる休退学を回避するように努める。 (2) 学類オフィスや研究室をできるだけ開放的にして学生が訪れやすい環境を整え、1年次での休退学者が少なくなるように努める。	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>(3) 年次以降、専修の授業に興味をなくしたことによる退学者を出さないように、オフィスアワーや授業前後の時間を通じての学生とのコミュニケーションを密にする。</p> <p>(4) 前期・後期の適切な時期に出席状況の調査を行い、学生の動向を把握し、出席状況のよくない学生については保護者にも事情を聞くなどして対応を図る。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
<p>1. 日本文学専修・日本語表現専修 学生と教員との交流の場として学外研修（歌舞伎・能などの鑑賞）を実施する。また、参加した学生の感想などをもとに、学生と教員との相互交流を図る。日常的にも、学生と教員が会話できる機会をできるだけ多く設ける。</p> <p>2. 道専修 (1) 授業やその前後の指導を通じて、学生と教員との緊密な交流を図る。 (2) 卒業書道作品展「雁鴻会書展」を学生の各在住ないし出身市町村で開催し、また、競書大会を実施することで、和洋の書道の存在を広く知らしめる。</p> <p>3. 文化芸術専修 学生と教員が会話できる機会と場をできるだけ多く設け、文化的活動へ参加する意義や楽しさを学生に実感させて、就学に対する意欲の低下を防ぐ。</p>	<p>1. A</p> <p>2. (1) A (2) S</p> <p>3. A</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度 (A)
<p>休退学に関しては、2017年度入学者で休学した者は1/129で、退学した者は1/129。前年度がそれぞれ2/90と0/90、前々年度はそれぞれ2/106と1/106。少なくとも1年の段階では、休退学をする学生数は少なく、まずまずの成果が出ていると言えるだろう。学生と教員の交流も、おおむねうまくいっている。ただし、オフィスアワーが十分に活用されているとはいいがたく、その点が次の課題である。また、長期欠席の学生とどう向き合うかという点で、なお検討の余地が残っている。出席状況の調査に関しては、それをもとに学生や保護者と連絡をとるようにしており、一定の効果が出ていると考える。</p>	
3 学生定員（総収容定員）の確保	
3-4. 心理学類 心理学専修	
目標	
<p>心理学専修の学生たちの学習要求を適切にうけとめ、専門教育の徹底と充実を図るとともに、退学者の減少(目標は0人)に努め、総収容定員の確保を図る。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
<p>(1) クラス担任の役割を定期的に確認し、学生指導の問題点と改善の検討をふまえ、効果的な学生指導に活かす。同時に学生の学修をはじめとする学生の要求の把握と要求達成をめざし、教員・オフィスの情報共有を促進する。さらに、アドバイザー制度の稼働率の確認を行い、1年生・2年生への効果的な学生指導のあり方を検討する。</p>	<p>(1) S</p>

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>(2) 旧カリキュラムである心理発達コースの学生への教育については絶えず意識を払い、学生の学びの要求をうけとめ、主体的な学習への満足度を高めることで、退学率を抑える。具体的には会議や学内メールなどを通して、出席状況をはじめとする当該学生の状況確認を行い、必要に応じて直接的な学生指導を行う。</p> <p>(3) 新カリキュラムでは4年生への学年進行にともない実習・実験・演習などの専門領域に加え卒業論文や将来への進路決定に着手することから、学生の負担の増加や学力の差が懸念される。学生の意欲低下を防止し、学びへの動機付けを高めるために各教員やオフィスが1年生から4年生までの様子を把握し、必要に応じて履修指導や相談を行い、退学や休学を抑える。そのためにも学生の情報を教員・オフィススタッフ間で共有し、学生指導に活かす。</p> <p>(4) 特待生入試導入によりとりわけ1・2年生での学力の差が懸念されるため、学類でもこの問題を取り上げて検討する。具体的には、学力、勉学意欲、学生生活等、特待生と一般学生と取り巻く環境について、特待生制度導入前後での比較検討を行う。</p> <p>(5) 障害者差別解消法の施行に伴い、学類内での障害のある学生の教育・対応においては、障害による差別が生じないよう学類全体で注意喚起をしながら、差別のない教育を目指す。障害のある学生の教育においては、障害の特性に応じた合理的配慮についての内容や実施において、学生部や教務部と連携しながら対応を進める。</p> <p>(6) 上記を通して学生の修学への意欲や大学への満足度を高め、休学率・退学率の低下につなげる。</p>	<p>(2) S</p> <p>(3) S</p> <p>(4) A</p> <p>(5) S</p> <p>(6) A</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (S)</p>
<p>定期的に学類会議やサイボウズ等で全教員が個々の学生の出席や現在の情報を共有し、クラス担任の役割を確認しつつ、オフィスと情報共有を図りながら指導を行った。旧カリキュラムである心理発達コース学生は、年度計画に従って指導を行い、2016年度をもってほぼ卒業した。2017年度、新カリキュラムの入学者が4年生となったが、学力や意欲などにおいて多様な学生への個別的な指導が結実し、卒業予定者はおおよそ卒業見込みである(56名)。他学年においても、教員とオフィス・助手が連携し、相談や指導を行い、退学や休学は抑えられ、2017年の休学者は3名、退学者は2名であった(1-3年の学生160名中)。特待生については、他の学生との比較検討は特に行っていないが、在籍学生の勉学意欲は高く保たれている。障害のある学生については、学類全体で情報を共有し、適宜対応を行うことで差別のない教育を行った。結果として新学類と旧学類の学生に対し、学類で連携してきめ細かな履修指導をきちんと行い、退学者を減らすことを達成できた。</p> <p>次年度課題</p> <p>2017年度は心理学類としては総定員率を満たしておらず(77.9%)、総定員の確保は次年度も引き続き課題である。</p>	
<p>3 学生定員(総収容定員)の確保</p>	
<p>3-5. こども発達学類 こども発達学専修</p>	
<p>目標</p>	
<p>昨年度(2016年度)は新入生に関しては想定外の歩留まり率のため、定員の1.3倍の入学生であった。そのため、2017年度からの実習対応に、実習巡回指導が期間内に完遂できない等の深刻な影響が出る可能性がある。さらに近隣の養成校の増加に加え、大学の改組の様子が受験生に不安を与えることも懸念されるため、</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

引き続き、受験者増と新入生の定員の確保を下記の方策で徹底する。

- (1) 受け入れた学生への丁寧な指導
- (2) 学年を超えた学生同士の学び合い
- (3) 大学だけにとどまらない学びの広がり
- (4) 進路変更を希望する学生へのていねいな対応（場合により転学類、転コースを含む）などの教育の充実とそれを支える教職員間の連携を充実させることによって、大学の教育力を充実させると同時に、信頼感を高め、退学を未然に防ぐ。
- (5) 授業料延納や未納など、経済的に厳しい家庭と学生への奨学金の紹介等丁寧な指導と助言をおこなう。

年度計画：活動内容

達成度（S, A, B, C）

- (1) クラス担任、アドバイザー、基礎ゼミ担当者、実習担当者と学類長との間の情報交換をできるだけ密にして、きめ細かな指導体制がとれるようにする。
- (2) クラス担任からの情報や実習等に関する面接の結果を会議で定期的に共有し、教員相互（新任含む）で指導方法を確認する。
- (3) 実習や大学祭等の行事を通して、学年を超えた学生同士の学び合いの機会をつくる。
- (4) 学生による学外での活動等を充実し、地域社会のニーズの実践的理解を高める。また、学生による対外的な活動の充実を図る。
- (5) 進路変更を希望する学生に対してはていねいに話を聞き、転学類、転コースを含めて、学生の希望に添った学びができるようにし、できるだけ退学を防ぐようにする。

- (1) A
- (2) A
- (3) A
- (4) A
- (5) A

実施結果と次年度課題

総合達成度（ A ）

過去最大の収容数となった学生への対応は、教員間の連携を密にして行ってきた。一部支援が必要な学生に関しては、学生課・教務課・保健室等の学類外部署とも担任を中心に連携している。保育現場への進路が中心となる学類（学科）の性質上、1年生91名中2名が進路変更で退学し、2年生90名中1名が転籍したが、上級生数人は面談の結果、幼保の課程履修を変更するに留まった。実習報告会他、異学年間の交流の機会も積極的に設けており、本年度の目標は十分達成できていると考える。次年度は担任を含めて教員の半数近くが入れ替わるため、学生のフォローに努めていきたい。

3 学生定員（総収容定員）の確保

3-6. 家政学群

目標

2017年度中の退学者を学群全体で学群定員の5%以内とすることを目標とする。

- (1) 担任、アドバイザー、卒論・卒制担当教員による丁寧な学生指導により、退学者の減少を目指す。
- (2) 学習意欲の低下した学生には、早期に転学類（可能ならば学群内）を指導し、退学者の減少を目指す。

和洋女子大学 2017年度目標と計画

ただし、これらの対策は、各学類で実施しているため学群としての実践目標は特に定めない。	
年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）
(1) メンタル面での体調不良については、保健室、学生相談室と連携して学生へのサポートを行う。相談によっては迅速に学類・学群としての対応を行う。	(1) S
(2) 編入試験での学生の補充をはかるために、オープンキャンパスでの学群紹介に編入生試験の広報を加える。	(2) B
実施結果と次年度課題	総合達成度（ A ）
<p>(1) 2017年度の家政学群の退学者は15名であり、学生数1139名(4月時点)の1.3%に留まった。退学者は特定の学類に集中することではなく、1学類4-6名であった。かつて大勢の退学者が生じた服飾造形学類も、教員による手厚い指導によって退学者が激減した。来年も引き続き退学者を少人数に留めたい。メンタル面のサポートは学生相談室に協力を仰ぎ、実施することができた。</p> <p>(2) 2017年度は編入生補充のための広報を実施しなかった。これは、大学として2020年入試から編入生入試を止めることが決定したためである。</p>	
次年度課題	
今年度の学生対応を検証し、来年度も退学者を増やさない指導を実現する。	
3 学生定員（総収容定員）の確保	
3-7. 服飾造形学類 服飾造形学専修	
目標	
<p>経済的理由による退学に対応するために、奨学金制度の適切な利用、金銭使途の管理について指導を強化する。また、目的意識・勉学意欲に乏しく、学力が不十分な学生の入学が増えていることに対応するために、個々の学生に親身かつ頻繁に面談を行う。目的意識を醸成し就学意欲を持たせるとともに、問題の早期発見に努め、本学類での学習目的が見いだせない者には、他学類への転学の方角を示唆し助言する。退学者を5%以内に抑え、総収容定員を確保する。</p>	
年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）
(1) 学生の出席状態を把握し連続欠席の場合、すみやかに呼び出すなどの早期対応を行い、把握した学生の状況を確認後、教務課に報告を行い、退学者を減らす。学類長が退学を承認した場合は、早急に担任に報告する。	(1) S
(2) 保護者との連携体制を強化するために、問題のある場合は積極的に保護者との連絡を取る。	(2) S
(3) 全学年複数担任制できめ細かい指導を徹底する。	(3) S
(4) 学生に達成感を持たせるために、時間外指導など教員の努力により作品や作業を完成させることを徹底する。	(4) S
(5) 学生の自発的学習意欲を育てるために、個々の学生に応じて、褒めることと叱る事を適切に使い分けた指導を行う。	(5) S
実施結果と次年度課題	総合達成度（ S ）

和洋女子大学 2017年度目標と計画

(1) 目標達成に向けて、担任をはじめとするきめ細かな指導体制の下で、全教員が学生の相談支援を懸命に行った。進路の変更等による退学者や休学者の数は減少した。今年度の学年別の学生数・退学者数・休学者数は、1年次 61 名中退学 3 名 (5%)、2年次 61 名中退学 2 名 (3%)・休学 2 名 (3%)、3年次 63 名中退学 2 名 (3%)、4年次退学 2 名 (3%) で、退学者を 5%以下にすることができた。

定期的に学類会議やサイボウズ等で全教員が個々の学生の出席や現在の情報を共有し、早期対応を行ってきた。

次年度課題

教員間のコミュニケーションをはかり、教育の充実と学生の自発的学習意欲を育てる。

3 学生定員（総収容定員）の確保

3-8. 健康栄養学類 健康栄養学専修

目標

教員は学生への働きかけを積極的に行うなど、学びの目的意識を高める支援を実施し、退学者を学類総学生数の 1%以内に留め、総収容定員を確保する。

年度計画：活動内容

達成度（S, A, B, C）

(1) 担任、アドバイザー教員、卒論担当教員らが、学生に対し個別に面談等を実施して学生の修学および生活の実情を把握し、教員・助手が協力して学生サポートの充実を図る。

(1) A

(2) 学類独自に専門科目の欠席調査、単位習得状況調査を定期的に行い、問題となる学生を早期に発見し、学生の指導について教員間の連携を図る。修学上問題となる学生は 5%以内に留めたい。

(2) A

(3) 学生が困った時に相談しやすい体制（研究室において空き時間やオフィスアワーの表示等）を整える。

(3) A

実施結果と次年度課題

総合達成度（ A ）

教員は積極的に学生への働きかけを行い、総収容定員は確保・維持した。

(1) 全員の教員が学生のサポートにあたった。退学者 2 名で、学生数 (534 名) の 1%未満に止めた。

(2) 学類の欠席調査（前期・後期）で欠席の多い学生は、3%以内であった（1年生 4 名、2年生 11 名、3年生 7 名、4年生 0 名）。担任を中心に個別に対応し、学類で情報の共有をした。

(3) オフィスアワー以外の時も学生が気軽に相談できる体制を整えるように努めた。

次年度は、学生への働きかけを積極的に行い、学習の意欲を維持させるようにするとともに、問題となる学生については、欠席調査のみならず、修得単位等の実態を適切に把握できるようにする。

3 学生定員（総収容定員）の確保

和洋女子大学 2017年度目標と計画

3-9. 家政福祉学類 家政福祉学専修	
目標	
<p>退学者数の削減に努め、退学者を学類総学生数の2%以内に留め、総収容定員を確保する。そのためのきめ細やかな相談支援を行う。</p> <p>学生定員の確保と満足度の充実に向けて、2018年度開設の看護学系新設に伴う学内改組を鑑み、家政福祉学類の在り方の検討を行い、新たな資格等を検討し、より良い学生募集のための理念形成を図る。</p>	
年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）
(1) 担任や基礎ゼミ担当・卒論担当教員などによる早期の個人面談等で学生の実情を把握すると共に、オフィスアワー時間の周知徹底を行う。	(1) A
(2) 前期および後期の第4回から5回目の授業あたりまでに欠席調査を行い、その結果、専門科目に2回以上欠席していると判明した学生に対しては、科目担当教員と学年担任とが連携して早期に学生とコミュニケーションをとり、きめ細やかな指導を行う。	(2) S
(3) 学類の全教員が学類会議などで学生についての情報を共有し、各教員に可能な支援や措置を講じる。	(3) S
(4) 経済的に困窮している学生に対しては、各種奨学金の紹介や授業料延納の手続きを勧め、経済的要因での退学に繋がらないよう、情報提供による支援を行う。	(4) S
(5) 家政学類の新たな資格取得を検討し、改組に必要な事項を検討する。	(5) A
実施結果と次年度課題	総合達成度（ A ）
<p>目標達成に向けて、全教員が学生の相談支援を懸命に行った。しかし、精神的疾患などやむを得ない事情による退学があったため、在籍者345人のうち退学者数は4人となった（1.16%）。この比率は前年度の2016年度の1.35%より低くなっているが、次年度はさらに今年度の90%比となるようにしたい。</p> <p>今年度の目標を、次年度も継続するために、さまざまな分野で活躍している卒業生を在籍生に紹介し、学生の学ぶ目的意識と意欲を高めることで、定員の確保に繋がりたい。新たに申請中の保育士養成の特色を周知する。</p>	
3 学生定員（総収容定員）の確保	
3-10. 大学院：人文科学研究科 英語文学専攻 日本文学専攻	
目標	
<p>1. 英語文学専攻</p> <p>定員5名を目指しつつ、最低限3名の入学者を確保する。</p> <p>学類の学生の進路希望を調査すると共に、社会人や卒業生に向けた学内外での広報活動のあり方を更に検討する。</p>	
<p>2. 日本文学専攻</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

日本文学専攻の教育・研究活動を充実させて魅力あるものにするとともに、広報活動を充実させ、学内外に和洋女子大学大学院のPRを行い、定員を確保することにつとめる。

年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）
<p>1. 英語文学専攻</p> <p>(1) 教員一人一人が各人の研究成果を披露しながら、大学院での研究の意義を卒論ゼミで説明する。</p> <p>(2) 卒論指導の際に、各指導教員が、進路相談の一つの選択肢として、大学院での研究を促す。</p> <p>2. 日本文学専攻</p> <p>(1) 和洋女子大学内部からの進学者を増やすためには、学類における授業の質を高めることが先決であるが、そのためにも学生のニーズを細かく把握し、一つ一つ対応していく必要がある。</p> <p>(2) 進学希望者の増加につなげるために、修了生の将来の進路を確保すべく、可能なかぎり研究職、教育職に就くための援助をする。</p> <p>(3) また、学内外からの入学者を増やすために、大学院担当教員及び大学院学生の学会における活動、研究成果の発信等によって、和洋女子大学・同大学院の存在を知らしめ、PRする。</p>	<p>1.</p> <p>(1) B</p> <p>(2) A</p> <p>2.</p> <p>(1) B</p> <p>(2) A</p> <p>(3) A</p>

実施結果と次年度課題	総合達成度	1. 英文専攻 (B) 2. 日文専攻 (A)
------------	-------	----------------------------

<p>1. 英語文学専攻</p> <p>ゼミでの大学院への勧誘は毎年行っているが、経済的理由で就職希望が多いため定員確保が難しい。給付型奨学金や、特待生制度などの充実が課題である。定員確保のためには、受入対象者を現役の中高教員や社会人に対象を広げる必要がある。</p> <p>2. 日本文学専攻</p> <p>(1) 学内外での広報活動につとめたが、反応がうすかったことは否めない。</p> <p>(2) 次年度課題として、大学院担当教員及び大学院学生の学会における活動、研究成果の発信等によって、本専攻の存在を知らしめ、PRに引き続きつとめていきたい。</p>

3 学生定員（総収容定員）の確保

3-11. 大学院：総合生活研究科 総合生活専攻 博士前期課程 博士後期課程

目標

<p>1. 博士前期課程</p> <p>入学後に研究活動を健全に継続できるよう支援し、退学者がでないようにする。</p>

和洋女子大学 2017年度目標と計画

2. 博士後期課程 特に社会人大学生においては、就労と研究の両立が円滑に行えるよう支援し、3年間での学位取得を目指す。社会人に対しては長期履修制度の運用を促進する。	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
1. 博士前期課程 (1) 入学初年度においては、3～6ヶ月に一回の頻度で、研究課題の進捗状況と、学習環境の問題点の有無、経済状況等のヒアリングを行い、退学者がでない様、配慮する。 (2) 指導教員と研究科長が情報を共有して、研究活動の円滑な継続をめざす。 (3) 修了年度においては、中間発表時に、教員から研究をまとめる上での適確なアドバイスを与え、2年間で学位取得をめざす。 また、社会人に対しては、長期履修制度利用を促進する。	1. (1) S (2) A (3) A
2. 博士後期課程 (1) 1年に一回程度の頻度で、上記(1)-1のヒアリングを行う。 (2) 外部研究資金や、公募奨学金の情報を積極的に広報し、経済的な負担を軽減して、研究生活が円滑に継続できる様、配慮する。	2. (1) A (2) B
実施結果と次年度課題	総合達成度 前期 (A) 後期 (A)
実施結果 今年度の博士前期課程修了者(1名)は予定通りに修士論文を提出した。長期履修の博士前期課程1名は、研究テーマを精査した結果、当初の指導教員よりも専門性が合致した教員に指導教員変更を当該者達との協議を行った上で実施した。博士後期課程は、原著論文が準備できず満期修了となった。	
次年度課題 社会人の博士前期課程1名、博士後期課程1名を共に現職と論文作成との両立が困難であるという理由から、次年度から長期履修に変更した。 博士後期課程の原著論文については指導教員にかかる比重が大きく、マネージメントレベルで対応できる施策はほとんど無いが、教員間で情報を共有する中で今回の長期履修変更などのような施策によって、脱落者を極力少なくするよう尽力したい。	
3 学生定員(総収容定員)の確保	
3-12. 教務課	
目標 学生の学修意欲を把握し、進路変更による退学者を防ぐ支援を行う。	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
(1) 退学者の予備軍としての休学者対応に取り組む。早い時期での学修意欲の低下に対し支援するため、欠席者調査のフォローを学類と共同して行う。	(1) A

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>(2) 助手補の代替などにより修学計画に悩む学生のケアを行える支援体制の構築に向けた提言を行っていく。 また、学生課と教務課が共同・融合して学生の修学を促進する組織マネジメントが行えるようなシステムを検討、構想する。</p> <p>(3) ガイダンス欠席者など情報を学類と共有し、学生が連絡しやすいルートを構築する。</p>	<p>(2) A</p> <p>(3) A</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度 (A)
<p>2016年度退学者数62名、2017年度退学者数28名(2018/1/31現在)であり退学者数減を実現できる見込み。また学生情報については学生課、US室との連絡会を実施するなど共有を進めた。学類や教員との連携は学内メールを活用し担任や教務委員を中心に連携。今後もさらに学生への修学支援体制の強化を目指す。</p>	
3 学生定員(総収容定員)の確保	
3-13. 学生課	
目標	
<p>本学での学生生活が、学生個人にとり有意義で快適なものとなり、本学への帰属意識が高まるような活動を多方面から支援する。また休学者・退学者を減らすための方策を多角的、組織的に実施する。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
<p>(1) 学生会やサークル活動に自発的に参加する学生を増やすためのサポートをする。</p> <p>(2) 学内イベント・地域イベントの参加を促し、サークル活動・ボランティア活動等の活動の場が、広がるよう支援する。</p> <p>(3) 学生生活アンケートで要望が多かった給付型奨学金の、採用枠の増加をはかる。</p> <p>(4) 「ユニバーサルサポート推進室」の業務を学生・教職員に周知し利用しやすいよう改善する。</p> <p>(5) 学生寮の運営について、寮生自ら積極的に考え、より快適な共同生活を実施できるようサポートする。</p>	<p>(1) A</p> <p>(2) S</p> <p>(3) S</p> <p>(4) A</p> <p>(5) A</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度 (A)
<p>(1) 学生会・サークル活動の参加する学生を増やすため掲示物・ポータルサイト・学生課窓口において周知した。1サークルが新規に立ち上がった。反対に下級生の入部が少なく休部するサークルも出てきており今後の課題となっている。サークル活動参加者は、731名となった。(前年度755名、前々年度721名)</p> <p>(2) サークル活動・ボランティア活動等の活動の場が広がるよう学内・地域イベントを増加させることができた。東京マラソン48名参加予定・市川市環境カルタ作成・イオンタウン展示。</p> <p>(3) 学生生活アンケートで要望が多かった給付型奨学金の充実に対応し「ボランティア奨学金」を年間10名増枠することができた。今後は予算の関係もあり増額には課題が残る。</p> <p>(4) ユニバーサルサポート推進室の周知と利用を促すカードを作成し学生総会参加者全員に配布した。また教授会において「心身に障害のある学生への合理的配慮について(対応の指針)」を配布し周知をはかった。本年度2月までの学生・教員・保護者の面談回数は、185回と前年より13回増加した。</p> <p>(5) 寮長をはじめ寮生と対話の機会を多く持ち学生自ら寮生活を考えるよう指導した。八幡寮では今まで行っていなかった防災訓練を企画・実行することができ</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

た。	
4 組織の効果的運営	
4-1. 人文学群	
目標	
学群の実務的権限の強化により、人文学群においても、学類を超えた学群としてのさまざまな施策が強く求められるようになったが、それに合わせて学群内のオフィス、担任、委員等の連携を図るなどして学群の組織体制を強化すると同時に、教員がもっと主体的に学群の運営に関われる体制を整えていく。	
年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）
(1) 学系・学群編成から学部編成への名称変更が予定されていることから、教育・研究組織を分離した学系・学群体制のあり方について総括を行う。	(1) C
(2) 全学教授会から学群教授会・学部教授会へと教授会運営の中心が移行する展望を踏まえて、学群として大学教育のガバナンスに関わる基本的な情報（法令等）を収集して、学群長・学類長が共有するファイルとして整備する。	(2) A
(3) 学群協議会を従来の学類長会のような報告・連絡中心の会議体から、協議主体の会議体に機能強化していく。	(3) A
(4) 学群教授会を、より教員の主体性が確認される場となるように運営していく。	(4) A
(5) オフィス間の連携を強化することにより、経験や課題を共有し、効率化を図る。それを踏まえて助手補ポストの段階的廃止への対応について検討する。	(5) B
(6) 委員、担任等の業務範囲、権限等について現状を検討し、課題を明確にする。	(6) C
実施結果と次年度課題	総合達成度（ B ）
本年度は活動内容において達成度にばらつきが見られた。学群協議会との緊密な連携のもとに学群教授会の機能を強化する方向性を追求することはできたが、学群組織のインフラである学類オフィス間の連携（活動内容の（5））については対応が不足した。次年度もオフィスの効率的な運営のためにどのような対応や措置が必要であるかを継続して検討することが必要である。活動内容（6）については学部に準ずる組織として全学教育センターが発足することに合わせて引き続き課題とする。	
4 組織の効果的運営	
4-2. 国際学類 英語文化コミュニケーション専修 国際社会専修	
目標	
1. 国際学類	
国際学類は英語文化コミュニケーション専修と国際社会専修の2つの専修からなる組織であり、両専修が協力して国際学類として行う1年次学生教育と2・3・4年次の両専修の学生の教育とが混在することから生じる混乱をできるだけ回避するために、学類長と学類長補佐(専修主任)は教務委員の協力の下で効率的な組織運	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>営を心がける。学類会議で当面する学類の課題および完成年度後の学類の方向性について審議し、専修固有の問題についてはそれぞれ専修会議の場で審議する。</p>	
<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度 (S, A, B, C)</p>
<p>1. 国際学類 学類会議で学類固有の課題について協議する。併せて専修会議で専修固有の問題を検討する。完成年度後の学類のあり方、カリキュラム編成などについて部会を設置して検討を加える。</p> <p>2. 英語文化コミュニケーション専修 専修固有の課題について専修会議の場で審議する。また旧カリキュラム（英語・英文学類）の学生に関わる問題についても専修会議で審議する。</p> <p>3. 国際社会専修 専修固有の課題について専修会議で審議する。また旧カリキュラム（国際社会システム専修）の学生に関わる問題について専修会議で検討する。</p>	<p>1. A</p> <p>2. S</p> <p>3. A</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (A)</p>
<p>概ね目標が達成された。次年度は新しい学部の設定に向け関連チームを組織する必要がある。</p>	
<p>4 組織の効果的運営</p>	
<p>4-3. 日本文学文化学類 日本文学専修 日本語表現専修 書道専修 文化芸術専修</p>	
<p>目標</p>	
<p>日本文学文化学類 サイボウズやメールなどを積極的に使って、教員間の意思の疎通を図る。学類会議や専修会議を通して教員相互の連携をはかり、各課題にリアルタイムに対応できるようにする。また、各専修の課題は学類会議において専修相互に共有し、学類として速やかな対応を図る。</p>	
<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度 (S, A, B, C)</p>
<p>日本文学文化学類 学類長を中心に、サイボウズやメールで情報の発信に努め、各教員が共通した認識を持てるようにする。学類会議では、各教員が自分の意見をしっかりと発言できる雰囲気を作ることに努め、十分に審議を尽くして決まったことに対しては、全教員が一丸となって真剣に取り組むようにする。また、必要に応じて、専修会議を学類会議後や任意の機会に開催する。</p>	<p>A</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (A)</p>

和洋女子大学 2017年度目標と計画

会議では活発な話し合いがなされ、その上で、決まったことは全員が力を尽くして実行する、という体制ができている。とくに課題は見あたらない。	
4 組織の効果的運営	
4-4. 心理学類 心理学専修	
目標	
心理学類として4年目を迎え、初めての卒業生を送り出すことになる。心理発達コースでは2017年度も4年生を送り出す。心理発達コースの学生たちの要望をしっかりと受け止めて教育し、心理学類の教育をさらに充実させるため、学類としての合理的運営体制をめざし、オフィスと教員組織との効果的な連携体制を構築する。学生情報、各種委員会の情報ならびに資格関連の情報の共有、研究活動の意見交換、教員間の連携、学類FDの実現を図るために学類会議を定期的に開催し、必要に応じて臨時学類会議を開催する。	
年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）
(1) 各教員は、教育・委員会活動・研究等における各自の役割をしっかりと自覚し、主体的に役割遂行を行う。	(1) A
(2) 各教員は、個性や能力を活かして学内外の業務を遂行し、学生ならびに教員自身の満足感を高める。	(2) B
(3) 学類内での業務の時間的・量的バランスを相互に確認し、効果的な組織運営を行う。	(3) B
(4) 新任オフィススタッフを含めて当面する問題や旧課程学生への対応を含む学生指導ならびに運営について、迅速に対応できる連携・協力体制を構築する。	(4) A
(5) オフィススタッフとの協力関係を密にし、その業務の見直しも含めて新学類の組織的運営体制を構築する。	(5) A
実施結果と次年度課題	総合達成度（ A ）
(1) 各教員は、教育・委員会活動については自らの役割を自覚し主体的な役割遂行を行ったが、研究活動においては教員間でばらつきが見られた。	
(2) 各教員は、個性や能力を活かし学内外の業務を遂行したが、業務の量に応じて質や満足感は異なってくると考えられ、学生の満足感にもそのことが影響していると考えられる。	
(3) 業務の時間的・量的バランスについての相互的確認は十分とは言えず、効果的な組織運営に課題を残した。	
(4) オフィススタッフを含め、学生指導をはじめとする学類運営は迅速に対応できた。	
(5) オフィススタッフと密に協力し、業務の見直しも含めた学類の組織的運営体制を構築できつつある。	
次年度課題	
次年度は、各教員の研究活動の活性化、教員間の業務量・時間の相互確認と調整が課題である。	
4 組織の効果的運営	
4-5. こども発達学類 こども発達学専修	
目標	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>こども発達学類としての完成年度と同時に、3人の新任教員を迎えることになる。学生アンケートでも活用度が高かったオフィスを含め、学類としての連携の強化を目指す。特に本学類の中心である実習体制の見直し・改善を行い、教員数と実働教員数の乖離を改善する。なぜならば教特法の改正により、教員養成課程の教員達の資質向上及び人員増強が求められている。これを踏まえ、教職課程全体の再課程認定に向け、全学と連携しながら必要とされる人事を求めたい。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
<p>(1) こども発達学類としての組織運営体制の充実、そのための教員構成・カリキュラムについて検討し、教員を補充する。</p> <p>(2) 新任教員への引き継ぎを丁寧に行い、特に上級学年（ゼミ）への指導をスムーズに行えるようにする。</p> <p>(3) 実習体制の見直し・改善を行う。</p> <p>(4) オフィス体制の維持のため、必要な人事のための手続きをとる。</p>	<p>(1) S</p> <p>(2) A</p> <p>(3) S</p> <p>(4) S</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度 (S)
<p>新任教員3人の着任だけではなく、実習担当職員の休職、さらに年度途中の教授の退職と予定外のトラブルに見舞われたが、結果として体制の見直し・改善に繋げることができた。今後教育組織として、保育士カリキュラムの改正及び教職課程の再課程認定を受け、新体制を前提とした修正が必要になる。最終的に新任以外の教授が全員退職する事態（大学からの指示による異動を含む）となったため、引き続き教授の確保が課題であるが、次年度はまず新体制を整え、引き継ぎを丁寧に行っていきたい。</p>	
4 組織の効果的運営	
4-6. 家政学群	
目標	
<p>学群教授会での審議を活発化させ、家政学群の特色ある教育や研究体制の確立を目指す。</p> <p>学群協議会での学群長と3学類長での審議を充実させ、今後の家政学群の方向性を明確にし、学群をリードする。</p> <p>家政学群オフィスの運用を充実させて仕事の効率化を図り、教員の学生教育態勢を向上させる。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
<p>(1) 学群としての課題を明確にし、入学生数の安定化、学生の質の確保、基礎学力向上などについて学群協議会を中心に意見交換する。</p> <p>(2) 平成31年度改組の実現のため、2017年度はカリキュラム検討委員を設定し学類長との意見交換を密にしていく。</p> <p>(3) FDでの意見交換会を実施し、学群教員の考えを収集して学群運営に反映させる。</p> <p>(4) 2017年度より助手補の採用が停止となり、新しい体制の助手が採用される。そのため助手の勤務体制・研究体制を学群としても把握し、適切な業務ができるように努める。</p>	<p>(1) S</p> <p>(2) S</p> <p>(3) B</p> <p>(4) S</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度 (S)

和洋女子大学 2017年度目標と計画

- (1) 入学生数の安定化、学生の質の確保などについて学群協議会を中心に意見交換することができた。
- (2) 平成31年度改組の実現のため、カリキュラム検討委員を設定し3学類合同で検討会を延べ5回実施し、家政学部の教育方針を立案することができ、特に教員養成課程および、家政学部共通科目の検討ができた。
- (3) 学群FDでは、家政福祉学科に新設される保育士養成コースの説明会となり、意見交換会を実施することができなかった。
- (4) 今年度採用の助手に対して、教員も含めて勤務体制・研究体制の周知ができた。昨年のような採用後短期間での助手補の退職・休職は起きなかった。

次年度課題

学群協議会での意見交換を活発にすること、さらに学部教授会を報告会に留めず、十分な審議さらに意見交換ができる場になるようにする。また、平成31年改組に向けて、さらなる家政学部の学科連携を図る。

4 組織の効果的運営

4-7. 服飾造形学類 服飾造形学専修

目標

服飾造形学類の理念のもと、学生教育及び研究活動が円滑に進むように、合理的な運営を目指す。学生情報、各種委員会の情報、科目間での連携、研究活動等の教員間の情報を学類全体で共有を図り、効果的な連携体制を整備する。

指導する教員の疲弊にも留意する。

年度計画：活動内容

達成度 (S, A, B, C)

- (1) 学類会議の効率的な進行に各人が協力する。必要に応じて、サイボウズやメールを活用して、情報を共有し、迅速に対応できる連携・協力体制を構築する。 (1) A
- (2) 学生への修学支援、生活支援がスムーズにいくように、教員間で、学生の情報・カリキュラムの問題・資格関連の情報の共有を図り、連携を図る。 (2) S
- (3) 受験生獲得のため、広報・入試センターとの協力関係を密にし、入試・広報対策を検討する。 (3) S
- (4) 教員のメンタルヘルスを強化するために、学群オフィスによる事務処理の積極的な利用で教員疲弊の軽減を図るとともに、大学組織全体で早期に対処できるよう検討を進める。 (4) S
- (5) 海外研修支援プロジェクト、地域連携プロジェクト等の詳細な検討を図り、頻繁な経過報告により学類全体で情報の共有を図る。 (5) A

実施結果と次年度課題

総合達成度 (S)

- (1) 学群オフィスを利用することで、教員や助手等の業務負担を軽減することができた。
- (2) 学群連携の広報活動の中で、学類連携を密にし、服飾造形学類としての魅力をアピールし、本学類の特異性を充実させることができた。

次年度課題

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>(1) 志願者数の確保を目指す。そのためには、何が必要なのか、学生情報、各種委員会の情報、科目間での連携、共同の研究活動等を検討していかなければならない。</p>	
<p>4 組織の効果的運営</p>	
<p>4-8. 健康栄養学類 健康栄養学専修</p>	
<p>目標</p>	
<p>教員は教員間の連携を図り、研究・学生教育が円滑に運営できるようにする。必要に応じ、学類独自の委員会組織を結成し、効果的に運営する。</p>	
<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度 (S, A, B, C)</p>
<p>(1) 教育委員会（教育の合理化、国家試験対策等）、カリキュラム検討委員会、入試担当チーム、基礎ゼミチーム、食育活動チーム、教育振興支援プロジェクトチーム、国家試験対策運営チームなどを立ち上げ、詳細な検討を行い、学類全体で教員同士の情報を共有する。</p>	<p>(1) B</p>
<p>(2) 意見交換の機会拡充：サイボウズ（教員、助手）、manaba folio（教員、助手、学生）等を用い、必要に応じて意見交換の機会を増やし、意思疎通を図る。</p>	<p>(2) B</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (B)</p>
<p>学類内に目的に応じた委員会を設置し、教育研究が円滑に進むようにした。</p> <p>(1) 教育委員会、入試担当チーム、基礎ゼミチームを編成した。</p> <p>(2) 学類会議の他に、サイボウズ、manaba folio を活用した。</p> <p>次年度は、教育・研究を円滑に進めるための組織づくりを教員の過重負担にならないよう配慮しつつ、継続的に行う。課題に対し学類のFDを積極的に計画し、効果的に組織が運営できるようにする。</p>	
<p>4 組織の効果的運営</p>	
<p>4-9. 家政福祉学類 家政福祉学専修</p>	
<p>目標</p>	
<p>家政福祉学類の理念が学生に周知されるように、基礎ゼミ・佐倉セミナー等での説明を行う。</p> <p>教員は各種委員会の委員として、また、クラス担任として、学類の方針を踏まえて活動し、学類への報告と問題提起を通して教員間で連携を図り、学生への修学支援、生活支援がスムーズに行えるようにする。</p> <p>助手・助手補の業務について、偏りや教員との関係を把握・調整し、教員は責任を持って助手等の業務を把握・指導する。</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度 (S, A, B, C)</p>	
<p>(1) 学類会議の時間設定は原則2時間以内とし、会議の効率的な進行に各人が協力する。 会議以外においても必要に応じてサイボウズやメールを活用し、教員間で日常的に情報を共有できるようにする。</p> <p>(2) 新カリキュラムの完成年度に向けて、新カリキュラムについて精査・検討する。</p> <p>(3) 教員は助手等の業務を把握し、適切な関係をもって、円滑な業務遂行を実施する。</p>	<p>(1) A</p> <p>(2) A</p> <p>(3) A</p>	
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (A)</p>	
<p>学群会議の所要時間は平均2時間20分であったが、各人が協力し、効率的に会議を進行することができた。会議以外においてもサイボウズ等を活用し、必要に応じて情報共有や審議を行った。新カリキュラムについてはカリキュラム委員会を中心として精査・検討を行った。次年度は保育福祉コースカリキュラムの精査・検討を行い、申請作業を速やかに進めることが課題である。また、教員は助手等の業務管理を行い、適切な関係の中で円滑に業務を遂行することができた。</p>		
<p>4 組織の効果的運営</p>		
<p>4-10. 大学院：人文科学研究科 英語文学専攻 日本文学専攻</p>		
<p>目標</p>		
<p>1. 英語文学専攻 会議案件を事前にメールで配信して教員には検討のための時間の余裕を与え、平素から情報の交換を密にして授業その他に関する教員相互の共通理解を図る。</p> <p>2. 日本文学専攻 教員組織としては学類教員ほぼ共通であるため、研究室会議と連携しながら日本文学専攻会議でもはかり、大学院組織としての情報に遺漏がないようにしたい。</p>		
<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度 (S, A, B, C)</p>	
<p>1. 英語文学専攻</p> <p>(1) 会議での決定事項、要望や課題などの懸案事項は、できるだけメールもしくは書面で確認しあう。</p> <p>(2) 主指導教員は学生の日常の学習・研究状況を他の教員に報告して情報を共有する。</p> <p>(3) 修士論文指導に関しては、主指導教員と副指導教員の間で平素から論文作成の内容等の進捗状況を相互に確認しあう。</p> <p>2. 日本文学専攻</p> <p>(1) 論文指導において、指導教員間で齟齬がないよう相互に進捗状況、内容を確認し合う。</p> <p>(2) 大学院組織としてのFDの方向性を検討したい。</p>	<p>1.</p> <p>(1) S</p> <p>(2) A</p> <p>(3) A</p> <p>2.</p> <p>(1) B</p> <p>(2) B</p>	
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 1. 英文専攻 (A) 2. 日文専攻 (B)</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

1. 英語文学専攻

- ・ 月一度の人文科学研究科教授会で懸案事項を検討し、情報を共有できた。また、緊急を要する案件については、必要に応じてメールでの会議を開催した。
- ・ 学生の状況把握の共有については、在校生が1人だけと少なかったことと、大学院の研究室が学部オフィスの隣であるため、学生の状況を容易に把握できた。
- ・ 課題は特にない。

2. 日本文学専攻

これまで学群教授会後に設定されていることもあり、会議として十分な検討がなされずに終わったものもある。効率よく会議を運営するためには各専攻での十分な意見調整をはかっておく必要がある。

4 組織の効果的運営

4-11. 大学院：総合生活研究科 総合生活専攻 博士前期課程 博士後期課程

目標

事務系各部局との連携を強化し、円滑な運営をはかる。

年度計画：活動内容

- (1) 前年度に引き続き教務課との連携強化で規程を見直し、規程全体の整備を行う。
- (2) 研究活動の円滑な遂行と学位の確実な取得を学生に担保する。
- (3) 進路支援センターおよび広報入試センターとの連携強化で大学院修了者の就職の充実を図り、志願者の増加を目指す。
- (4) 学生課との連携強化により、奨学金等、修学支援の充実を目指す。

達成度 (S, A, B, C)

- (1) S
- (2) A
- (3) A
- (4) S

実施結果と次年度課題

総合 達成度	前期 (S)
	後期 (S)

実施結果

組織運営上の今期のトピックは「(管理栄養士) 鈴木和枝奨学金」の制定である。卒業生からの寄付金の使途について半年以上の議論を経て、使途の明確化、規程の制定、学内諸手続きを行い、当初の計画通りに平成 30 年度からの当該奨学金制度の運用が開始できる体制を整えることが出来た。規程の制定においては、事務部門との円滑で効率的な連携が鍵となったと認識している。

大学院協議会を通じて、事務部門との円滑な連携は取れたと考えている。また、昨年度博士前期課程修了者で成績優秀者については、奨学金の半額免除が認められた。進路支援センターとの連携で、現行の求人票が学部卒と大学院卒が同じ様式である企業が多いことを確認し、就職を希望する大学院生の就職の斡旋について大学院生用掲示板の設置を行った。

次年度課題

「(管理栄養士) 鈴木和枝奨学金」の運用を円滑に実施することで、入学者の増加だけではなく、研究・教育の充実をはかって行きたい。

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>次年度より大学全体の会議体に変更となる。人文科学研究科および事務部門との連携において重要な役割を果たしていた大学院協議会が正式な会議体として消失するため、新しい会議組織においても同様の活動が出来るルートを模索して行きたい。</p>	
<h3>4 組織の効果的運営</h3>	
<h4>4-12. 教務課</h4>	
<h5>目標</h5>	
<p>2017年度はカリキュラムが完成年度を迎える学類があり、カリキュラムの完成に関し、各作業を混乱なく進め、学生の履修を支援する。また、改組を準備する学類の支援を行っていく。</p>	
<h5>年度計画：活動内容</h5>	<h5>達成度（S, A, B, C）</h5>
<p>(1) 教員、事務との連絡を効率的に行い、事務手続き及び内規などの整理をすることで、誰もがわかるルール作りを行う。</p> <p>(2) 海外留学について、セメスター下での留学単位の互換について、学類・国際交流センターと連携し、方針を確認していく。</p> <p>(3) 学修状況と評価基準を連動させ、学位授与方針を充たしての卒業となるよう GPA の活用による進学・退学基準、およびルーブリック（学生の創造的な学びの評価）の導入などを検討していく。</p> <p>(4) 全学教育センターと連携し高大接続授業の推進をサポートする。午後から併設校の高校生が授業に参加できる時間割作りの可能性を検討する。</p> <p>(5) 配信型授業の検討。全学教育センター及び ICT サポートとも連携し、配信型授業が可能か検討していく。</p>	<p>(1) A</p> <p>(2) C</p> <p>(3) S</p> <p>(4) S</p> <p>(5) A</p>
<h5>実施結果と次年度課題</h5>	<h5>総合達成度（ A ）</h5>
<p>履修は混乱なく指導できた。GPA 活用は 2018 年 4 月より運用開始。ルーブリックも試行を開始する。引き続き改組、カリキュラム変更があるため事務局としてサポートしていく。</p>	
<h3>4 組織の効果的運営</h3>	
<h4>4-13. 全学教育センター</h4>	
<h5>目標</h5>	
<p>(1) 定例の全学教育センター会議で、全学的な授業等の企画・運営や、正課外の学生の学びの支援の活動方針を検討・決定し、そのために全学教育センター所員会議を適宜開催して実務運営の円滑化に努める。</p> <p>(2) 全学教育センター長が共通教育部門、外国語教育部門、資格教育部門と教職教育支援センターを統括し、特に外国語教育部門との連携を強化し外国語科目のより充実した運営を行うために、引き続き活動内容の再検討と組織の整備を行う。</p>	
<h5>年度計画：活動内容</h5>	<h5>達成度（S, A, B, C）</h5>

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>(1) 全学教育センター業務の企画・実施体となる全学教育センター所員会議に外国語教育部門所員も参加し、外国語教育に関する事項についても全学教育センター長のもとで実務を推進させる。</p> <p>(2) マナバレスポンスや動画配信機器の運用を再検討し、全学的な試行的運用を開始する。</p> <p>(3) 学生からのニーズに対応した「わよらカフェ」や「資格検定」を学内教員と協力しながら拡充させる。</p> <p>(4) 平成 29 年度教職教育支援センター会議を定例開催とし、平成 30 年度教職再課程認定の準備を進める。</p>	<p>(1) S</p> <p>(2) A</p> <p>(3) A</p> <p>(4) S</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (S)</p>
<p>(1) ～ (4) について、いずれも計画通り実施した。</p> <p>(1) 特に、外国語教育部門所員がセンター所員となり外国語部門との連携が進んだ。1 月には共通科目英語担当教員に平成 30 年度のシラバス執筆前に各教員が担当するクラスのレベル（プレイスメントテスト結果によるクラス分け）の通知を行い教育内容やレベルの適正化を図った。外国語部門の提案により平成 31 年度からの共通科目英語教育について、学科のニーズや専門に合わせた教科書等を用いた教育内容に変更することを提案する準備を進め、平成 30 年度初めに平成 31 年度の教育内容について各担当教員に依頼する予定となっている。</p> <p>(2) マナバレスポンス（出席管理システム）は、キャリアデザインの集中授業で使用し有効活用できることを確認した。また、卒論題目届についても教務課と学類教員が連携してマナバフォリオを使用し、マナバを全学的に活用することが進み、教員の使用促進へと準備が整ったが、年度末になり、次年度からマナバフォリオのシステムがマナバコースに変更予定となったため、各教員へのツールの使用推進については足踏み状態である。まずはシステムの移行について支障なく教育活動や学生支援が継続できるように進めたい。動画配信機器の使用については健康栄養学類のみの利用に留まっている。</p> <p>(3) ラーニングステーションで実施している「わよらカフェ」や「資格検定」について多くの教員の協力を得て予定通りのプログラムを実施できた。新たに担当となった TOIEC 試験には国際学類学生を中心に受験生が集まったが、カフェへの参加や「ことばトレーニング」などの一部のプログラムへの参加学生数は横ばい状態であった。次年度以降は、入学生のプレイスメントテスト終了後の結果返却時に基礎学力向上を目指した問題集を配布し、学生とラーニングステーションを繋ぐツールとし、カフェや資格試験受験に多くの学生を誘導したい。</p> <p>(4) 教職支援センター会議は平成 29 年度より定例開催となり、センターが中心となり再課程認定の準備を継続し、軌道に乗った組織運用が完成した。次年度からは教職教育支援センター長を全学教育センター長とは切り離し、教職担当教員が実務についても組織の上でも長となりマネジメントすることが可能となるため、さらに瞬発性のある組織の運用と学生支援が可能となる予定である。</p>	
<p>5 学士（修士 博士）課程教育</p>	
<p>5-1. 人文学群</p>	
<p>目標</p>	
<p>人文学群各学類のカリキュラム編成は、全学の教養教育科目と専門教育科目との有機的な連携を意識した専門科目群の配置により人文教養の基礎を身につけ、そしてそれぞれの学類で専門を学ぶための導入科目、基礎科目、専門科目と少人数による演習科目やゼミを配置して、高度な専門知識を主体的に修得することを</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

目的とする。	
年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）
<p>(1) 1～2年次：共通科目との組み合わせにより幅広い人文教養を身につけられるよう指導する。</p> <p>(2) 1～2年次：専門導入科目、基礎科目の履修を通して、専門の基礎を固める。</p> <p>(3) 1～4年次：少人数の演習科目を配置して、ディスカッション、プレゼンテーション等のスキルを磨く。</p> <p>(4) 4年次：卒業研究科目を配置して卒論を作成することにより、学びの集大成にとりかかれるようにする。</p> <p>(5) 学修成果についての評価基準は学類において評価基準を設ける（国際学類の TOEIC 等）ことを優先し、それを踏まえて、学群全体の客観的評価基準についても検討する。</p>	<p>(1) A</p> <p>(2) A</p> <p>(3) B</p> <p>(4) A</p> <p>(5) C</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度（ B ）
<p>活動内容の（1）から（4）までは、学類が設定した教育課程に従って、達成した。しかし、学類ごとに評価基準を設定するまでには至らなかった。学群全体としての客観的な評価基準について検討する機会を持てなかった。大学教育の内部質保証への対応が、課題として日本の大学に投げかけられてもいることから、次年度は学科長会議での意見交換を踏まえて、学科会議で協議することが必要である。</p>	
5 学士（修士 博士）課程教育	
5-2. 国際学類 英語文化コミュニケーション専修 国際社会専修	
目標	
<p>1. 国際学類</p> <p>1年次においては2年次以降両専修において学ぶ専門教育の基盤となる基礎ゼミや導入科目、学類共通科目を中心に学ぶ。学習成果を測定する基準については専修毎に検討する。</p>	
<p>2. 英語文化コミュニケーション専修</p> <p>基礎から段階を追って英語の運用能力とコミュニケーション力、英語圏の言語・文学・文化の専門知識が学べるような多彩で自由な学習を促進する。また、広い視野を持ち、国際社会と関わる積極性を育成するために、留学や国際協力のセミナー、講演会、国際交流会参加によって国際的な文化体験をする機会を設ける。少人数の授業による英語力強化プログラムを設置し、英語によるディスカッションなどを通して、発信能力を育成すると共に、グローバル社会に貢献する日本人としての自覚を促す授業を展開する。学習のモチベーションを高めるために、授業内の学習成果を発表する場（English Day などのイベント）を設ける。</p>	
<p>3. 国際社会専修</p> <p>本専修では社会科学各分野のアプローチを中心にすえて、現代の国際社会を総合的に理解することを学士課程教育の目標とする。低学年の前期と後期にそれぞれオムニバス形式の導入科目を配置して諸学問分野の有機的連携を基礎段階から目指し、演習（ゼミ）を中核にすることで社会科学的な思考力を徹底的に鍛え、英語・中国語・韓国語を重要な外国語として位置づけ、それらについては「使える外国語」を目標とし、実務的な科目を開設してキャリア教育に注力する。また、国際</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

社会をその多様性と関係性から捉えるべく国際社会システム科目群と国際比較社会論・地域研究の科目群とを設け、グローバルな視野を養う。	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
<p>1. 国際学類</p> <p>1年次に履修する基礎ゼミや導入科目において大学での学びの基本を指導する。また自ら学ぶことの楽しさと大切さを体得できるように追求する。</p> <p>2. 英語文化コミュニケーション専修</p> <p>(1) 4年間を通して実践的英語運用能力が向上することを目標に、各年次 TOEIC テストにより専修所属の学生の英語運用能力を測定する。</p> <p>(2) 英語の基礎をマスターし、実践的英語運用能力を高める。英語圏の言語・文学・文化、異文化コミュニケーション、国際社会の仕組みを理解して国際的な視野を広げる。授業内以外に ALC NetAcademy を自習するよう指導し、1年次終了時点のプレイスメントテスト (200 点満点) で、全受験者の平均点が入学時から 5% 上昇することを目標とする。</p> <p>(3) 佐倉セミナーで、マルチメディアを活用する身体性重視の実践的英語教育を行うなど、英語運用能力を高めると共に、海外語学留学、国際理解に関する講演会参加などによって異文化理解を深める。英語圏の言語・文学・文化、異文化コミュニケーション、英語教育の基本的な知識を習得する。</p> <p>(4) 3年次では、少人数制の英語科目を展開することで英語運用能力を強化すると共に、英語圏の言語・文学・文化、異文化コミュニケーション、英語教育の理論を習得し、異文化理解を深める。授業では発表形式を多く設けて、自主性の育成に努め、就職活動などスムーズな社会参加を促進する。</p> <p>(5) 英語運用能力を高めると共に、英語圏の言語・文学・文化、異文化コミュニケーション、英語教育などについて問題点を整理し、英語や日本語で自分の言葉でまとめて発表する。</p> <p>3. 国際社会専修</p> <p>(1) 1、2年次では、社会科学的なアプローチの特色である複眼的な思考や相対化することの意義を学ぶ。とくに専門ゼミ I は社会科学の複数の専門分野に対応する複数のゼミを履修するよう学生を指導する。</p> <p>(2) 演習 (ゼミ) 形式の授業で、学生は、テキストの読み方、レジュメの書き方、報告や議論の仕方などを学ぶ。学生には年間で数回の報告やレポート作成を課す。</p> <p>(3) 「国際フィールド・ワーク」 (2年次から履修可能) の履修や国際的観点から企画された専修主催行事への参加により、外国への関心や国際社会への意識を高める。</p> <p>(4) 3、4年次の演習形式の授業では、3年次から履修する国際地域 (東アジア、東南アジア、中東、アメリカ、ヨーロッパ) に</p>	<p>1. A</p> <p>2.</p> <p>(1) A</p> <p>(2) A</p> <p>(3) S</p> <p>(4) A</p> <p>(5) A</p> <p>3.</p> <p>(1) A</p> <p>(2) A</p> <p>(3) S</p> <p>(4) A</p>

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>関する講義等を通して得た国際地域文化や国際社会システムに関する知識について徹底的に討論を行い、激動する国際社会への洞察力を磨く。</p> <p>(5) 4年生の就職への意識を高め、就職内定率90%以上をめざす。</p> <p>(6) 1年次のオムニバス2科目の授業については、テキスト『国際社会の扉』を使用して、学士課程の教育の基礎を体系的に教授する。それをもとにして履修学生からの意見のフィードバック、および教員間での授業内容の検討を行い、より体系的なテキストの編集にむけて調整する。</p>	<p>(5) B</p> <p>(6) A</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (A)</p>
<p>概ね目標が達成された。英語文化コミュニケーション専修では各学年での TOEIC テスト受験者にばらつきがあり、4年次の受験者が少なかった。1年次における英語力向上の目標は未達であり、教育方法の改善を探る必要がある。来年度は事後テストの一時中断が決定されているため、これに代わる測定手段についても検討の要があろう。国際社会専修においては4年生への就職支援を強化する必要がある。</p>	
<p>5 学士(修士 博士) 課程教育</p>	
<p>5-3. 日本文学文化学類 日本文学専修 日本語表現専修 書道専修 文化芸術専修</p>	
<p>目標</p>	
<p>1. 日本文学文化学類</p> <p>(1) 1年次の基礎科目の学習を通して、学生が2年次に進む際の専修を確定できるよう指導する。専修決定で迷っている学生には、オフィスアワーなど個別相談の機会が設けられていることをアナウンスする。</p> <p>(2) 2年次以降の専門教育では、各専修がそれぞれの方針に従って教育を進めるとともに、「関連科目」などの枠を活かして専修間の連携を図り、学生の幅広い関心に応じる体制を構築する。</p> <p>2. 日本文学専修</p> <p>上代から近現代までの日本の文学作品を幅広く学ぶためのカリキュラムを構成し、文学作品の理解と各自の表現活動を連動して行うことのできる人材を育成する。</p> <p>3. 日本語表現専修</p> <p>「適切な日本語表現」「生きた日本語表現」を身につけるためのカリキュラムを構成し、広い視野と豊かな感性を持って、社会に対して自らを表現していくことのできる人材を育成する。</p> <p>4. 書道専修</p> <p>実技と理論のバランスのとれたカリキュラムを構成し、習熟した書の表現者および指導者を育成する。</p> <p>5. 文化芸術専修</p> <p>伝統文化と現代文化をリンクさせた創作・鑑賞系の実技科目と、芸術学や哲学・倫理学・考古学・博物館学などの理論系科目による総合的なカリキュラムを構成</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

し、個性的で独創的な表現力と主体的な発信力をもった人材を育成する。	
年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）
<p>1. 日本文学文化学類</p> <p>(1) 1次には、学類共通の基礎科目を中心に学習をし、日本の文学・文化に対する基本的な知識や技能の修得に努めさせる。</p> <p>(2) 4年間を通じて、各自が専攻分野における知見や技能を高めていくと同時に、日本の文学や文化に対する幅広い視野がもてるように指導する。</p> <p>2. 日本文学専修</p> <p>(1) 2年次には、専門性への視野が開けるように文学演習科目の学習に力を入れる。</p> <p>(2) 3年次には、専門分野の学習を進めるとともに、関連科目の学習にも力を入れるように指導し、卒業論文に対する自覚をもたせる。</p> <p>(3) 4年次には、卒業論文を完成させる。</p> <p>3. 日本語表現専修</p> <p>(1) 2年次には、専門性への視野が開けるように表現演習科目の学習に力を入れる。</p> <p>(2) 3年次には、専門分野の学習を進めるとともに、関連科目の学習にも力を入れるように指導し、卒業論文に対する自覚をもたせる。</p> <p>(3) 4年次には、卒業論文を完成させる。</p> <p>4. 書道専修</p> <p>(1) 2年次には、書写的実技能力を体得させ、書道史や文字学などの本格的な知識を身につけさせる。</p> <p>(2) 3年次には、専門的実技能力を体得させ、書論など書の学問的知識を深めさせる。</p> <p>(3) 4年次には、卒業論文を完成させに加えて、芸術作品を分析し、豊かに感じ取ることを育み、本格的表現をする。</p> <p>5. 文化芸術専修</p> <p>(1) 2～3年次には、抽象的・包括的な理論に慣れ、これを具体的事例に応用できる力を養う。創作においては自分の適正を見極めるとともに、他ジャンルへの活用方法も学ぶ。博物館課程では年間5館以上の博物館を観覧して見学ノートを作成する。</p> <p>(2) 3年次には、展示・企画の立案ができるようにする。</p> <p>(3) 4年次には、卒業論文・卒業制作を完成させる</p>	<p>1.</p> <p>(1) A</p> <p>(2) A</p> <p>2.</p> <p>(1) A</p> <p>(2) A</p> <p>(3) A</p> <p>3.</p> <p>(1) A</p> <p>(2) A</p> <p>(3) A</p> <p>4.</p> <p>(1) A</p> <p>(2) A</p> <p>(3) A</p> <p>5.</p> <p>(1) A</p> <p>(2) A</p> <p>(3) A</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度（ A ）
<p>学生への教育という点に関して、目標はほぼ達成できている。文学などはその学問の性質上、卒業論文以外に、学生自身が達成感を得ながら成長するという機会が少なく、それをどうするかに課題がある。</p>	
<p>5 学士（修士 博士）課程教育</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

5-4. 心理学類 心理学専修	
目標	
<p>心理学類が完成年度を迎える 2017 年度は、これまでの成果と課題を整理して 4 年間の総括をおこない、学士課程教育の改革と発展に注力する。心理学類は、理論、実習、研究法の三本柱を軸に、発達、教育、臨床分野を中心に教授し、特に“わかる”、“できる”を学生に体験してもらうことを目標にしている。在籍する心理発達コースの学生がカリキュラムに沿って学習を修められるように授業を保障し個別の履修指導を行う。2017 年度から新たに助手が就任することから、より緻密で丁寧な教育体制の構築につとめる。2017 年度も大学全体の支援を受けながら、教職員が力を合わせて 4 年間の課程教育を充実させ、資格取得を含めたキャリア発達を通じた学生の満足を獲得するよう努める。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
(1) 心理学類 1 年生には、早い段階から心理学の専門科目をより多く、より確実に教授する。	(1) S
(2) 心理学類 2 年生には、「心理学実験法」「調査体験実習」「心理学基礎演習」をはじめとした科目群を通じて、“わかる”、“できる”を体験させる。レポートや発表の成果を教員間で共有し、理解の度合いや問題点を洗い出す。また、「自己表現演習」においては、引き続き大学からの教育研究支援を受けながら、2016 年度の成果と課題を踏まえて、将来型の教育手法開発をさらに充実させる。	(2) A
(3) 心理学類 3 年生には、「心理学実験実習」「心理検査法実習」「臨床心理学基礎実習」等を通じた、実習と実験の本格的な教授により、心理学の知識や実践方法をさらに深く学ぶことのできる授業を展開する。その成果は、「心理学実験実習事後指導」による組織的なフィードバックをはじめ、学生のレポート提出や発表の状況を教員間で共有しながら吟味する。また、卒業に向けて確実に履修を進めるよう指導を重ねていく。	(3) A
(4) 心理学類 4 年生には、卒業論文等を通じて、自らの学びを生涯発達に位置づけるよう教授する。さらに、2017 年度から新たに開講する「臨床心理学実習」「臨床心理学実習事後指導」「心理学文献講読 b」を体系的に展開する。その成果は、単位取得や就職の状況との関連、および卒業論文のテーマや質によって検討する。	(4) S
(5) 学習成果測定基準の妥当性について学類内外で検討する。	(5) B
(6) 認定心理士の取得可能率を 90%以上とする。	(6) S
(7) ピアヘルパーの合格率を 90%以上とする。	(7) A
(8) 心理関連資格の国家資格可の動きも注視しながら、教育体制の改革を進める。	(8) S
実施結果と次年度課題	総合達成度 (A)
<p>(1) 心理学類 1 年生には、基礎科目を中心に、心理学の専門科目を体系的に教授することができた。高校から大学への移行を踏まえた上で、新入生の心理学への期待を活かした授業を展開することも有効であると考えられた。</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

- (2) 心理学類2年生には、研究法や演習の科目を中心に、“わかる”、“できる”を体験できる授業が実施できた。「自己表現演習」も、学生の主体的な活動と表現を促す授業が展開できた。教員間でレポートや発表の成果の情報共有をさらに進めることで、学生の学修状況の理解を深めることにつながる。
- (3) 心理学類3年生には、実習や実験をとおして心理学の知識や実践方法を深く学ぶことのできる授業が実施できた。学生への履修指導は、全体および個別の両方から十分におこなった。「心理学実験実習事後指導」については、実験種目ごとに負担が異なり、昨年度の課題の解消が十分でない点もあった。
- (4) 心理学類4年生は、現カリキュラムが完成年度を迎えたはじめての卒業年度の学生であり、これまでの学びの集大成として卒業研究をまとめることができた。「臨床心理学実習」「臨床心理学実習事後指導」「心理学文献講読b」も、担当教員および今年度から就任した助手を中心に体系的に展開することができた。就職活動においても、1月末の内定率は92.2%であり、2015年度の同時期(77.4%)、前年度の同時期(86.8%)と比べて高い割合であった。学生の取り組みと学類の教育が結実した結果であるといえる。
- (5) 学習成果測定基準の妥当性について情報共有を行ったが、学類内外でさらに具体的な検討が必要である。
- (6) 認定心理士の資格取得を希望している学生は、卒業予定者57名(含む9月卒業者)に対して51名であり、その51名(100.0%)が認定心理士の取得が可能であった。
- (7) ピアヘルパーの合格率は86.2%(65名のうち56名が合格)であり、目標である90%以上には達しなかったが全国平均の84.4%を上回った。受験生の人数が増加したことも合格率へ影響したと考えられる。
- (8) 2017年9月の公認心理師法の施行を受けて、心理発達コースならびに心理学類の学生における受験資格の特例に関する読替を整備し、2019年度改組のカリキュラムでは大学における必要な科目を整えた。さらに、ワーキンググループを組織し、心理関連の各種資格について検討を進めた。

次年度課題

第1に演習、実習、卒業研究などで教員間における負担の偏りを解消する必要があること、第2にレポートや発表の成果に関する情報共有をとおして学生の学修状況を理解すること、第3に学習成果測定基準の妥当性について具体的な検討を進めることが次年度の課題である。今年度は助手の就任によって安定した教育を実践できたことから、適切な人員による教育体制の構築が緻密で丁寧な教育につながると思う。2018年度は人文学部心理学科へと名称変更となり2019年度改組への移行の時期でもあることから、心理学類ならびに心理学科1年生の学生教育を引き続き充実させると同時に、改組による学士課程教育の準備を進めたい。

5 学士(修士 博士) 課程教育

5-5. こども発達学類 こども発達学専修

目標

ディプロマポリシーにしたがって高度な専門性を持った乳幼児教育の担い手を育成するために、以下に示す能力を身につけ、これらの学修によって身につけた知識や技能を、専門的な立場から社会に還元できるように幼稚園教諭免許や保育士資格を取得できるよう学生を指導する。学生につけさせたい力は以下のとおりである。

- (1) 人を育てる者としての基礎となる広く高い水準の教養を身につける

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>(2) 教育・保育の基礎理論とともに基礎的な技能を身につける</p> <p>(3) 基礎的な知識や技能をもとに、対象や課題に応じた展開力を養う</p> <p>(4) 教育・保育の現場での実習や体験を通して対象や保育についての理解を深め、実践力を高める</p> <p>(5) 幼稚園教諭・保育士となる者としての自覚を持ち、今日的な課題に目を向け、探求し、自ら主体的に関わる態度と力を身につける</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
<p>(1) 1年次から卒業時までゼミナール形式の演習による継続的な少人数教育の場を拠点として学び、manaba folio や実習・履修カルテ等を活用して学んだ内容を統合できるように指導する。</p> <p>(2) 1年次終了時点で保育系の専門科目(原理や音楽)を学び、子どもと保育の現状を把握する。</p> <p>(3) 2年次には童謡や簡単なエチュード5曲を暗譜し弾けるようにする。</p> <p>(4) 2年次には実習に向けて、保育の場で使われる絵本の読み聞かせやパネルシアターの技術を習得する。</p> <p>(5) 3年次には乳幼児の発達に即した教材を作成する力を身につける。</p> <p>(6) 4年次には実習での経験を踏まえ、指導案を作成し展開できる実践力を習得する。</p> <p>(7) 4年次には自分の将来に向けて進路を選択できる力を養い、自身の適性を踏まえて希望者全員が幼稚園免許および保育士資格を取得できることを目指す。</p>	<p>(1) A</p> <p>(2) A</p> <p>(3) A</p> <p>(4) A</p> <p>(5) A</p> <p>(6) A</p> <p>(7) A</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度 (A)
<p>50人から70人へ定員増をして完成年度を迎えた。定員増に加えてここ2年連続して定員を超過したため、学力や能力に幅のある学生が入学してきている。次年度は不足している教材等を増強しつつ、さらに学生の実態に応じた教育ができるよう工夫していく必要がある。</p>	
5 学士(修士 博士) 課程教育	
5-6. 家政学群	
目標	
<p>生活を総合的・科学的に分析・考察できる力を身につけ、人々の生活の質の向上のために知識と技術を習得する。</p> <p>地域連携型の学びを導入し、生活の中での課題や問題を発見し、その解決に取り組む意欲と力量をつける。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
<p>(1) カリキュラムのスリム化によって、1年生からのカリキュラムが新しくなり、学生の授業が期待通りのものになっているかを、授業評価を用いて、各教員に加え学群でも把握する。</p> <p>(2) 数年かけて学群学生の延べ50%が地域連携型の学びに参加するように、教員が積極的に働きかけるとともに、2017年の計画として、地域連携に参加した学生数を学群で集計し参加実態を把握する。</p>	<p>(1) S</p> <p>(2) A</p>

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>(3) 家庭科教員志望者、管理栄養士・社会福祉士の国家試験受験生への支援を充実させる。</p> <p>(4) 家政学群の3年計画の教育振興支援プロジェクト「家政学群学生の『和洋ショップ経営』プロジェクト」により、3学類の1～4年生を対象にした problem - based learning を展開し、実体験からの家政学の学びを進める。2年目の2017年度は、12月初旬の3日間のショップ開店を計画し3プロジェクトに分かれて、参加者募集、販売品の企画、試作、作成、ショップの運営等の一連の実務を試行・体験する。実体験からの学びを、学士教育にどう反映させていくかが課題である。</p>	<p>(3) S</p> <p>(4) S</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (S)</p>
<p>(1) 授業評価については、服飾造形と健康栄養の授業満足度が学科上位3位に入った。家政福祉はほぼ平均付近であった。</p> <p>(2) 1-6と重複するが、家政学群共通科目である、「地域創造演習」の履修者は主に1年生で110名で、家政学群1年の40%を示した。また、健康栄養学類では延べ118名が地域連携型の活動に参加することができた。</p> <p>(3) 管理栄養士・社会福祉士の合格人数がまだ不明である。</p> <p>(4) 和洋ショップは、2017年度は12月1-3日の3日間の開催となった。昨年の反省をもとに、学生主体の運営が進められた。次年度課題：家政学部単独の学生アンケート等の実施により、地域連携型の学びの状況把握と地域連携の教育的効果の検討を行いたい。また、課題3は引き続きの課題として、次年度は最終年でありより学生の主体性を高める運営を目指したい。</p>	
<p>5 学士(修士 博士) 課程教育</p>	
<p>5-7. 服飾造形学類 服飾造形学専修</p>	
<p>目標</p>	
<p>(1) 普通科からの進学者対応も含め、導入教育と基礎技術習得を徹底する。(1年次)</p> <p>(2) 目的に応じた適切な素材の選択力、素材のもつ可能性を最大限に引き出す能力を身につける。(2～3年次)</p> <p>(3) 洗練された色彩感覚やデザイン感覚とそれを表現する手法を体得する。(2～3年次)</p> <p>(4) 自由に発想したものを具体的な作品として創作できる構成技術を身につける。(3～4年次)</p> <p>(5) 環境への配慮、高齢者・障害者への視点、情報機器利用による自己表現、国内外市場の理解、消費動向や嗜好の分析ができる人材をめざす。(3～4年次)</p>	
<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度 (S, A, B, C)</p>
<p>(1) 1年次 学生が以下のことができるように指導する。 基礎縫い、縫製機器・用具の使用法の理解、基礎スタイル描画、基礎的な作図、繊維・素材・材料に関する科学的な考え方。学類の半数以上に色彩検定3級を受験させる。</p> <p>(2) 2年次 半数以上が繊維や被服材料の実験を履修、80%以上が、服装史、服飾デザインを履修、全員にアパレル業界で活躍する専門家の講義や卒業生の経験談を聴講させ、職業意識を醸成させる。基本的なアイテム別パターン理論を理解させる。2年次から学</p>	<p>(1) S</p> <p>(2) S</p>

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>力に対応したカリキュラム運用を図る。</p> <p>(3) 3年次 相応の技術や知識を習得させるため、衿長着製作、スーツ製作、ドレーピング技術および、被服科学系実験・演習を履修させる。アパレル企業実習を通じ、衣料管理士資格を活かせる職種を体験する。教員免許状取得希望者は、模擬授業を通して教員のあるべき姿勢や指導方法を理解させ、全員4年次の教育実習に備える。</p> <p>(4) 4年次 卒業制作・卒業論文をまとめる。</p> <p>1) 構成系分野を専攻する学生にとっては①感性豊かなイメージを具体的なデザインに展開し、②素材を吟味しその特徴を活かし、③習得した技術を駆使し④実際の卒業制作作品を完成させる。</p> <p>2) 科学系分野を専攻する学生にとっては、広範な衣に関する領域から①問題意識を持ち、かつ自由な発想で研究テーマを見つけ、②論理的な思考を行うことによって③問題を解決するまでの道筋を学び、④卒業論文を完成させる。</p> <p>(5) 全学年に渡り、教員間、科目間の連携を密にし、授業内で関連性を紹介する。</p>	<p>(3) S</p> <p>(4)</p> <p>1) S</p> <p>2) S</p> <p>(5) A</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (S)</p>
<p>(1) 学類のディプロマポリシーに基づいて、「家政学としての衣生活のあり方」を広い視点から身につけることができるようにカリキュラムを展開した。</p> <p>(2) 理論、実習、実験、演習を軸心に教授し、特に“わかる” “できる” ことを重点に専門の基礎を固め、コミュニケーション力の向上に力を注いでいる。</p> <p>さらに、家政学群の教育振興研究プロジェクトに学生が参加し、その成果が教育に反映されている。</p> <p>次年度課題</p> <p>(1) 学修成果の客観的評価基準の検討を行う。</p>	
<p>5 学士 (修士 博士) 課程教育</p>	
<p>5-8. 健康栄養学類 健康栄養学専修</p>	
<p>目標</p>	
<p>学生は4年間の教育を通して、栄養士・管理栄養士としての資質を高め、スキルアップに資する基礎知識を習得し、応用力、実践力の開発を図る。学生自身が自分で課題を発見し、それを解決する能力を身につけることを目標とする。資格取得後の活躍の場が保健・医療、地域、学校、職域等様々にあるため、それぞれに対応できる科目を選択して専門性を高める。</p>	
<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度 (S, A, B, C)</p>
<p>(1) 全学年を通して：人間としての資質向上と卒業生との交流。</p> <p>1) 栄養士・管理栄養士の使命や役割を理解して、それを目指す気持ちを育み、ヒューマニズムや倫理観を身につける。</p> <p>2) 卒業生栄養士・管理栄養士との交流の促進（講演会開催、manaba folio等を利用した情報交換等）。特にmanaba folioの利用者については、卒業時登録は70%を目指す。</p> <p>(2) 1年次：導入教育。</p>	<p>(1)</p> <p>1) B</p> <p>2) B</p> <p>(2)</p>

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>1) 学生は基礎ゼミ等を通じて、大学での勉強方法を学び、文章力、読解力、情報リテラシー、情報収集方法、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を身につける。</p> <p>2) 補習を通じて、高校教育から大学における専門教育への円滑な連続性と統一性の構築に必要な基礎科目を習得する。</p> <p>3) 食物の特性、栄養学の基礎、人体の構造など、基礎科目を習得する。</p> <p>(3) 2年次：専門基礎科目の習得。(3年次進級時に4科目以上未修得者10%以内を目指す。)</p> <p>1) 1年次までに学習してきた基礎科目に追加し、応用的な科目を履修し、知識、技術の幅を広げる。</p> <p>2) 栄養アセスメントや献立立案など、実習を履修し、理論を実践に結びつける技術を身につける。</p> <p>(4) 3年次：実践専門科目の習得。</p> <p>1) 管理栄養士の業務の中心となる実践的な科目を履修する。</p> <p>2) 医療、福祉、行政、企業、学校などで、栄養士・管理栄養士の職務を体験し、卒業後の進路について意識を持つ。</p> <p>3) 体験した栄養士・管理栄養士の職務について、社会的な役割および責任に関して報告書を作成する。</p> <p>4) 卒業論文の内容を選択し、卒業論文作成のための学習を始める。</p> <p>(5) 4年次：総合的な力量を高める。</p> <p>1) 卒業論文の作成を通して、自ら学び、考え、課題を発見し、解決していく能力を身につける。</p> <p>2) 栄養教諭免許取得のための教職課程の履修者は、教育実習を経験し、学校等への就職活動につなげる。教職履修者の30%は教職・公務員採用試験合格を目指す。</p> <p>3) 国家試験対策のための授業や模擬試験とその解説講義を通して、国家試験合格にむけて学習を続ける。国家試験受験資格取得者は休学者を除く4年時在籍者数の90%を目指す。</p> <p>4) 大学院進学を目指す学生は、本学の説明会に参加して進学の準備をする。大学院進学3%を目指す。</p> <p>5) 就職希望者の95%以上の卒業時就職決定を目指す。</p>	<p>1) B</p> <p>2) B</p> <p>3) B</p> <p>(3)</p> <p>1) B</p> <p>2) B</p> <p>(4)</p> <p>1) B</p> <p>2) B</p> <p>3) B</p> <p>4) B</p> <p>(5)</p> <p>1) B</p> <p>2) B</p> <p>3) B</p> <p>4) B</p> <p>5) A</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (B)</p>
<p>栄養士・管理栄養士に最低限必要な知識・技術の定着を図った。各学習内容の到達目標を達成できない学生もみられた。</p> <p>(1)</p> <p>1) 産学連携活動については、「教育振興支援助成：実践的管理栄養士養成のための産学官連携活動」を受けて、組織的に活動した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東武百貨店船橋店：メニュー提案等 参加学生 延42名 ・食育イベント：市川ラグビー祭、下総・江戸川ツーデーマーチ、子ども宇宙食体験、市民まつり、市川市立小学校PTAイベント等、参加学生 延57名 ・その他コラボ：ポーソー油脂株式会社弁当レシピ、山崎製パン社員食堂健康応援メニュー、タイヘイ醤油煎餅開発等、参加学生 延18名 <p>2) 卒業生 manaba folio 新卒生95名登録(75.4%前年比9.2ポイント増)、既卒者継続利用43名(前年比増減0)で利用。</p> <p>(2) (3) 1、2年次導入教育、基礎専門科目について、概ね単位取得ができ(未修得2科目未満)、学習が順調な学生80%(前年比9ポイント増)。</p> <p>(4) 3年次4科目以上未修得者1名(140名中：0.7%、前年比17.3ポイント減)。</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

(5) 卒業論文未提出者3名、国家試験申込者119名(133名中:89.5%、前年比4.5ポイント増)、栄養教諭免許取得予定者12名(前年9名):栄養教諭採用試験(茨城県)1名合格、家庭科教諭免許取得予定者0名(前年1名)、大学院進学予定者3名。卒業予定者130名。就職内定率1/31現在94.5%(前年比0.9ポイント増)。

次年度は、管理栄養士を目指したいという希望と、学力、適性が一致しない学生への指導、学習不足のまま国家試験を受験する学生への指導の徹底について検討し、学類教員で共有できるようにする。講義、実習等の規程の学修内容に、実践的な学外の活動や卒業生と交流を加えて、豊かな人間性を育むよう充実させていく。

5 学士(修士 博士)課程教育

5-9. 家政福祉学類 家政福祉学専修

目標

衣・食・住・家族関係・生命倫理等の家政学と社会福祉学がコラボレーションされた学びを通して、共生社会をつくるための知識と技術を習得し、社会の一員として自分らしく生きていくための専門性を涵養する。

学類のディプロマポリシーに基づいて、広い視点を身につけることができるように家政学と社会福祉学の両方の分野、また双方を横断的に学べるカリキュラムを展開する。

4年間を通して、生活と福祉を総合的、科学的、実践的に考察できる力量を身に付け、社会で活躍できる人材の育成を目標とする。学生自身は、家庭科教員や社会福祉士などの資格取得に向けて、資質の向上と基礎知識を習得することを目指す。

年度計画:活動内容

達成度(S, A, B, C)

学士課程においては、前掲の学類理念に沿って、次のような教育を展開する。

<1年次生>

(1) 主体的に学ぶ態度を養成し、必要な共通総合科目と基礎的な専門教育科目を40単位以上取得する学生が7割を超えるようにする。

(2) 基礎ゼミの一環として、将来設計と学習意欲を高めさせる。全学共通のテキストを用いながら、家政福祉学類の学びの基礎を基礎ゼミで修得させる。

(3) 基礎ゼミを通じて、基本的な受講マナーと文章作成等の基本スキルを習得させる。

(4) 各学生が学園生活に馴染むと共に自身の関心と将来の進路に沿った科目選択が行えるよう、担任は個人面談を実施する。

<2年次生>

(1) 年度末において全員が進級に必要な単位を取得できるよう、教員は年次必修の専門科目の授業時等を利用して支援する。

(2) 学生は大学祭において運営の主力として存分に活躍し、級友との親交を深めると共に達成感を得る。大学祭以後の修学意識の高揚に繋げる。

<1年次生>

(1) S

(2) A

(3) A

(4) S

<2年次生>

(1) A

(2) S

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p><3年次生></p> <p>(1) 専門科目の興味と関心を深め、卒論ゼミでの勉学意欲が高まるように、家政福祉専門演習の配属がマッチングするように配属し、卒業後の進路について関心を高める。</p> <p>(2) 実験・演習・実習を通して、より専門的な知識と技術を身に付け、専門領域への関心と理解を深める。</p> <p>(3) 後期開設の「家政福祉専門演習」では、少人数クラスによりさらに学習意欲を高め、卒論作成のための基礎知識を得る。</p> <p>(4) フードスペシャリスト試験の受験者の8割以上が合格する。また、料理技能検定の受験を促す。</p> <p><4次生></p> <p>(1) 休学者を除き、全員の卒業を目指す。</p> <p>(2) 卒業論文を作成し、発表会でその成果を存分に発揮できるよう、プレゼンテーション能力も身に付ける。</p> <p>(3) 進路支援センターと担任、学類が連携をとり、就職希望者の9割以上が就職できるよう努める。</p> <p>(4) 教員職に就くことを希望する者の9割以上が常勤・非常勤に関わらず、教職を得られるよう努める。</p> <p>(5) 社会福祉士国家試験の合格者を前年度よりも増やす。</p>	<p><3年次生></p> <p>(1) S</p> <p>(2) A</p> <p>(3) S</p> <p>(4) A</p> <p><4年次生></p> <p>(1) A</p> <p>(2) S</p> <p>(3) S</p> <p>(4) S</p> <p>(5) A</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (S)</p>
<p>各学年の学生との細やかなやりとりを通じて、3、4年生の学生には、特に卒業後の進路等を見据えた教育ができた。学ぶ力の基礎を修得すること、家政福祉専門演習を通じた専門領域への興味関心をより高め、深い理解ができるよう努めることができた。各種資格取得や受験の挑戦についても、教員が体制を整えて、学生の希望が出来る限りかなうよう、指導に尽力した。次年度も、引き続き質の高い学士課程教育ができるよう学科全体で取り組んでいく。</p>	
<p>5 学士（修士 博士）課程教育</p>	
<p>5-10. 大学院：人文科学研究科 英語文学専攻 日本文学専攻</p>	
<p>目標</p>	
<p>1. 英語文学専攻</p> <p>各授業では、新しい視点と多面的な視座、研究方法を身につけさせ、高度な専門性を養い、2年次には個別の研究指導により、自ら定めた研究テーマの資料を調べ、独自の研究成果を盛り込んだ修士論文を完成させる。</p> <p>2. 日本文学専攻</p> <p>課程教育を実りあるものとし、結果を出すためには、教育等の専門職に就く者の増員を図らなければならない。そのためには、修士論文テーマに直結する講義科目を受講するにとどまらない幅のある履修を心掛けさせる。</p>	
<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度 (S, A, B, C)</p>

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>1. 英語文学専攻 (1) 1年次には、学生に英語の学術論文や専門書を丁寧に読む訓練をし、英語力の増強を図ると共に、学生が一つのトピックを多面的に、また、深く洞察する思考力を身につけるよう指導する。 (2) 2年次の「論文作成法」では言うまでもなく、各授業においても、アカデミック・ライティングの基本事項、とりわけ、学術論文の内容構成と諸説の引用・言及の仕方、先行研究と研究課題の見出し方、立証と論述の進め方、などの指導を徹底する。</p> <p>2. 日本文学専攻 多様な探求心を保持させると同時に、2年または3年（長期履修者）で学会発表のできるレベルの修士論文を仕上げるよう指導するとともに、学会発表を可能ならしめるように指導する。</p>	<p>1. (1) S (2) S</p> <p>2. A</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	
<p>1. 英語文学専攻 修士論文完成へ向けて、原書の専門書等を利用しながら指導を徹底した。</p> <p>2. 日本文学専攻 (1) 「論文作成法」が2年生の必須科目となったことは院生にとって喜ばしいことではあるが、一方、担当指導教員にとっては過重な負担を強いる場合もある。 (2) 専任教員の確保が何よりもものぞまれるが、次年度はその第一段階として一名の確保が得られた。</p>	
<p>5 学士（修士 博士）課程教育</p>	
<p>5-11. 大学院：総合生活研究科 総合生活専攻 博士前期課程 博士後期課程</p>	
<p>目標</p>	
<p>1. 博士前期課程 指導教員と学生とが共に研究計画を立案し、その計画に基づき進捗管理を行いながら研究を遂行する能力を修得させる。前期課程修了までに学会発表を行う。</p> <p>2. 博士後期課程 社会的に価値のある問題提起と、その解決に向け主体的に研究を行うことが出来る能力を醸成する。複数の専門家と議論を重ねることで、学際的見地から研究の価値を高める事を学ぶ。英語による学会発表や論文投稿を経験させ、国際的視野を養う。</p>	
<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度 (S, A, B, C)</p>
<p>1. 博士前期課程 (1) 研究倫理教育を徹底し、指導教員も含め大学院レベルから研究不正を招かない教育を実施。研究倫理の e-learning は教員を含め 100%受講とする。</p>	<p>1. (1) A</p>

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>(2) Pub med やCinii、医学中央雑誌、Science direct などのデータベースを用いた文献検索を始めとする情報収集と指導教員との適切なディスカッションを行い研究計画の立案が出来るよう指導する。</p> <p>(3) アカデミックなプレゼンテーション技術を学び、学術的に質の高い中間発表、修論発表を実施する。</p> <p>(4) English Academic Presentation A, Bおよび、統計学特論を全員に受講させ、研究や学会発表、論文作成に直ちに活用させる。</p> <p>また、教員は学生間の学力差に配慮し、個々の目標達成を目指していく。</p> <p>2. 博士後期課程</p> <p>(1) 社会的な要求と学問的価値および新規性を考慮したテーマの立案が出来る。</p> <p>(2) 合理的、実現可能な研究計画を立案し、主体的に研究を遂行する。研究上発生する問題に対し自ら解決できる能力を修得させる。そのために、必要な専門家と直接議論を行うことで主体的に問題の解決が出来るようになる。</p> <p>(3) 学際的視野に立って、複数の専門分野から研究を位置付け、複眼的考察を行う事で研究の社会的価値を高めることが出来るようになる。</p> <p>(4) 学位取得までに国際会議での発表と英文での学術雑誌への投稿を行う。</p>	<p>(2) A</p> <p>(3) A</p> <p>(4) S</p> <p>2.</p> <p>(1) S</p> <p>(2) A</p> <p>(3) A</p> <p>(4) A</p>				
<p>実施結果と次年度課題</p>	<table border="1"> <tr> <td>総合達成度</td> <td>前期 (A)</td> </tr> <tr> <td></td> <td>後期 (A)</td> </tr> </table>	総合達成度	前期 (A)		後期 (A)
総合達成度	前期 (A)				
	後期 (A)				
<p>実施結果</p> <p>博士前期課程在学者は、予定通り学会発表を全員行った。研究倫理の e-learning は、年度末退職予定の指導教員下の研究生を除き全員が受講した。また、博士前期および博士後期課程初年度在学者は、研究倫理および研究に関わるコンプライアンス教育を受講した。また、年度末に画像処理における研究不正に関する講習会を実施する予定。研究科長が AMED 主催の RIO ネットワークキックオフシンポジウムに参加した。</p> <p>次年度課題</p> <p>研究倫理および研究に関わるコンプライアンス教育は、共通教育として大学院主催で行うことが出来る数少ない教育活動である。次年度は、大学院教員自身が自ら、AMED 等が主催する研究倫理に関する勉強会に積極的に参加し、大学院教育のハブになって行きたい。</p>					
<p>5 学士 (修士 博士) 課程教育</p>					
<p>5-12. 教務課</p>					
<p>目標</p>					
<p>(1) 学生の履修希望と主体性を重視したカリキュラム編成を支援、学生の学修時間を確保する時間割の作成に努める。教育的効果の高い授業環境を供与できる教室配置ができるよう、バランスのとれた時間割の作成に努める。</p>					

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>(2) 学士教育の質的転換を推進するため、大学のカリキュラム・ポリシーと授業科目の関連が学生にわかるようにシラバスにカリキュラム・ポリシーを明記し、また双方向型の授業を行っていることがわかるシラバスの作成に努める。</p> <p>(3) 作成したカリキュラム・マップを活用し、学生にとってよりよい履修環境を提供できるよう情報を提供していく。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
<p>(1) 学生に対し、カリキュラム・ポリシー、カリキュラム・マップの理解の上での授業計画の策定、かつ学修時間の確保について支援していく。</p> <p>(2) 免許・資格科目の関係の時間割上の支援を全学教育センターと共同して支援していく。</p> <p>(3) カリキュラム・マネジメントを効果的に行う全学的な教務の理解をはかる周知方法を検討する。</p>	<p>(1) A</p> <p>(2) A</p> <p>(3) C</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度 (B)
<p>カリキュラム・マップをシラバスと共に公開することを実現。また科目毎に対応する学位授与方針を明示することを実現した。時間割についても学類の要望も聞き取り全学教育センターと編成にあたった。効果的なカリキュラム・マネジメントについては引き続き検討を進める。</p>	
5 学士 (修士 博士) 課程教育	
5-13. 進路支援センター	
目標	
<p>前年度に引き続き、内定率・就職希望率の維持に努める。また、夏と同様に秋冬のインターンシップ説明会を学内で実施し、多数の企業を誘致して、参加学生をさらに増やし、不足しているインターンシップの対応を強化する。大手企業は採用手法としてインターンシップを重要視しており今後良い企業に入社するためには必須と考えられる。それに伴い、他大学との差別化を早期に図り、就職支援の向上に繋げ早期に内定確保に繋げる。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
<p>(1) 設定目標 (文科省報告時点最終) 昨年同様、就職希望率 88.6%、内定率 97.5% 高い目標を維持する。</p> <p>(2) 1.2年生対策</p> <p>1) 早期の職業観・女性の自立的成長支援として2年生対象に「就職活動準備講座」を開講し低学年対策の一環とする。</p> <p>2) 2年生でもインターンシップを希望する学生には、事前の説明会等対応できるよう準備を開始する。</p> <p>(3) 3年生対策</p> <p>1) 就職基本講座をメインとし (講義・演習・全10回+グループ模擬面接練習) 通年を通して実施する。</p> <p>2) 業界セミナーの充実を図る (航空業界・アパレル業界・IT業界・図書館)。</p> <p>3) 日経新聞の読み方講座 (スクラック講座)</p> <p>4) 3年生主体のインターンシップは長期型 (5日以上10日未満の就労体験期間) とし、夏期のみ対応だけでなく「秋冬のイ</p>	<p>(1) S</p> <p>(2) S</p> <p>(3) A</p>

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>ンターシップ」にも対応できるよう体制を整える。</p> <p>5) 他大学とのコラボ企画では、男性との就職活動でも物怖じしないために合同面接指導会を行い本番さながらの体験をする。</p> <p>6) 3年生全員にSPI試験を受験させテストの結果を踏まえ、学生のレベル・理解度に添った講座を展開。</p> <p>既に採用試験にSPI試験を導入する市町村もあり、一般企業と同様な試験対策が可能となった。</p> <p>(4) 4年生対策</p> <p>1) さらに企業開拓、求人開拓を行い、学内企業説明会・選考会を充実させる。</p> <p>2) 学内企業説明会は前期20回、後期20回、計40回を目標とする。</p>	<p>(4) A</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (S)</p>
<p>(1) 大学生の求人倍率は高水準を維持し、学生にとっては好環境が続いていることで内定率・就職希望率は昨年より向上した。</p> <p>(2) 1,2年生対策として早期の職業観・女性の自立的成長支援を外部講師により講座を行なった。早期から業界・企業の情報を得ることにより、働くことへの関心と意識の向上を図ることができた。また2年生のインターンシップでは、チャンスを有効に活用し他校との学生同士の交流により、コミュニケーション力が向上した。</p> <p>(3) 就職基本講座をメインとし様々な講座や講演を行なった。採用試験対策としては、全員にSPI試験を受験させ習熟度別に講座を展開した。今後は公務員もSPI試験を導入する市区町村が増えると思われるので、SPI試験対策を強化し次年度においても継続的に行なっていく。</p> <p>(4) 企業開拓・求人開拓の企業から内定を貰うことができた。学内企業説明会・選考会においても目標を達成すべく充実させる。</p>	
<p>5 学士(修士 博士) 課程教育</p>	
<p>5-14. 全学教育センター</p>	
<p>目標</p>	
<p>(1) 平成31年度以降教育組織の改編に向けて、共通総合科目のカリキュラムの策定を進める。</p> <p>(2) 共通「英語」科目の時間割編成における学類別クラス配置を進める。</p> <p>(3) 完成年度を迎える学類もある一方で、共通総合科目は新・旧2本のカリキュラムが並走など、全学的に複雑なカリキュラム構成となる。科目の開講保証を含めた運用の整備に努める。</p> <p>(4) 教員免許法改正に伴い、教職教育支援センター所属教員を中心に平成30年度教職課程再課程認定に向けた教職カリキュラムを策定する。</p> <p>(5) ラーニングステーションで行う学生の学びの支援を充実させる。</p>	
<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度 (S, A, B, C)</p>
<p>(1) 各学類(学科)で開設する共通総合科目を検討する。</p> <p>(2) 教職課程科目、資格課程科目、共通「英語」を含めた全学共通の科目の時間割編成を教務部(教務委員会/教務課)と連携して</p>	<p>(1) A</p> <p>(2) A</p>

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>進める。科目配置バランスとともに学習効果がある時間割編成をする。平成30年度新学部新学科開設に向けた運用を検討する。</p> <p>(3) 平成31年度以降教育組織の改編と併せて、開設する専門科目と教職新科目を連動させる。</p> <p>(4) 「わよらかフェ」を拡充するため学内教員への積極的参加を働きかける。</p>	<p>(3) S</p> <p>(4) S</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度 (A)
<p>(1) 看護学科とGC学科の共通総合科目を検討した結果、他学科と同様に全学共通の共通総合科目を提供することとした。GC学科は当初は九段キャンパスでの開設を目指していたが、国府台での立ち上げとなったことが大きな理由である。31年度以降の共通総合科目のカリキュラムについては全学統一としてほぼ完成した。</p> <p>(2) 次年度時間割についてはこれまでと同様に教務部と連携しながら科目配置バランスを確認して時間割編成を実施した。並走しているカリキュラムの運用については、教員配置(人事も含めて)も全学教育センターで実施できるようになり順調に進められるようになった。31年度の時間割作成については、いくつかの曜日時限に1年生は専門科目を入れないようにする共通総合科目の取得しやすい時間割についての検討をスタートしたい。</p> <p>(3) 教職の再課程認定に向けてカリキュラムの検討、それに伴う人事の進行など、準備が着実に進められた。学群長や学類長、学類の教科教育担当教員と連携した新科目等の設置の準備も進められた。</p> <p>(4) わよらかフェを新たに担当した教員が増えた。特に、国際学類教員のサポートを得ることができた。</p>	
6 研究の活性化と外部資金の導入	
6-1. 人文学群	
目標	
<p>学群教員が研究の重要性を認識し、積極的に取り組んで成果を出せるよう情報を提供する。また研究時間の確保に向け協力体制を整えていく。科学研究費をはじめとする外部資金獲得に向け環境整備を図り、学内研究奨励費による研究の活性化や、海外を含め学外との共同研究(学会、講演会、研究大会等への参加を含む)の活性化を積極的に図っていく。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
<p>(1) 科学研究費の申請10件、獲得4件を目指す。</p> <p>(2) 学内個人研究費・共同研究費の申請率40%以上を目指す。</p> <p>(3) 研究成果発表(紀要、学術誌への論文投稿、著書出版、学会口頭発表等)を積極的に進める。</p> <p>(4) 学内教育振興支援助成による教育研究3件以上を目指す。</p> <p>(5) 教員の研究活動を担保するために校務負担軽減を図っていく。</p> <p>(6) 科研費等外部資金による研究の実施を学群としてどのようにして支援できるかを検討する。</p>	<p>(1) A</p> <p>(2) B</p> <p>(3) A</p> <p>(4) A</p> <p>(5) C</p> <p>(6) C</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度 (A)

和洋女子大学 2017年度目標と計画

活動内容の(1)から(4)までは総じて学内外の研究活動に学群の多くの教員が関わってきたと総括できる。(1)では申請件数11、採択3件となった。(2)では17人の申請で32%であり、目標とした40%に達しなかった。(3)では紀要論文として採択された7篇のほか、学術誌に掲載された論文数が20篇以上であり、そのほか、招待講演や学会での口頭発表等による多数の研究成果を生み出した。(4)では新たに3件の申請を行い、1件が採択された。しかし、活動内容の(5)および(6)については学群のみで対応するにはかなり困難な課題であることが明らかになった。(5)については全学的な協議と連携が必要であり、(6)については引き続き研究支援課との連携の下での学群の対応が必要である。次年度においても学内外の研究費への申請および研究成果の発表を積極的に行うことを主たる活動内容とする。

6 研究の活性化と外部資金の導入

6-2. 国際学類 英語文化コミュニケーション専修 国際社会専修

目標

1. 英語文化コミュニケーション専修

- (1) 各教員が研究成果を外部研究会で発表し、紀要や学会誌等へ投稿するよう促進する。
- (2) 専門が異なる教員が共同して科学研究費、その他各種の外部資金へ申請を行う。
- (3) 研究環境に関わる課題について検討する。

2. 国際社会専修

- (1) 教員の個人研究の蓄積に裏打ちされた大学内外における共同研究の組織化を追求する。
- (2) 教員の研究環境をめぐる課題を検討・整理し、研究環境の改善への足掛かりを作る。

年度計画：活動内容

達成度 (S, A, B, C)

1. 英語文化コミュニケーション専修

専任教員の学会発表、学術書の出版、紀要や学術誌への投稿などによる研究成果の公表を促進する。少なくとも教員の半数が学会発表、学術書の出版、論文投稿などにより研究成果を公表する。

1. A

2. 国際社会専修

- (1) 研究支援課等の情報を活用して専修の教員が外部資金導入も含め大学の内外で行う研究活動の活性化を促す。
- (2) 専修の教員は論文を積極的に執筆し、少なくとも教員の半数が紀要や学術誌等に投稿する。
- (3) 専修の教員の研究活動の情報を専修内で共有する。

2.
(1) A
(2) A
(3) B

実施結果と次年度課題

総合達成度 (A)

概ね目標が達成された。研究支援課等の情報を活用し、教員の半数が研究成果を公表できた。また教員の研究活動の情報もある程度共有することができた。次年度は研究活動の情報の共有を一層促進する必要がある。

和洋女子大学 2017年度目標と計画

6 研究の活性化と外部資金の導入	
6-3. 日本文学文化学類 日本文学専修 日本語表現専修 書道専修 文化芸術専修	
目標	
<p>(1) 日本文学文化学会の研究会・講演会などを通じて、教員が相互に啓発し合い、研究への意欲を高める。</p> <p>(2) 日本文学文化学会の機関誌である『和洋国文研究』へ、各教員が積極的に投稿する。</p> <p>(3) 科学研究費など外部資金への申請を積極的に行う。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
<p>日本文学文化学類</p> <p>(1) 日本文学文化学会の主催で、学内外に開かれた研究会と講演会を、年に1回ずつ開催する。</p> <p>(2) 各教員が積極的に『和洋国文研究』への投稿を行い、充実した誌面となるようにする。</p> <p>(3) 科学研究費などの外部資金に多くの教員が申請をして、3件程度の獲得を目指す。</p>	<p>(1) S</p> <p>(2) A</p> <p>(3) A</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度 (A)
<p>日本文学文化学会の活動は順調に行われており、前期に研究会、後期に講演会を各一回実施した。とくに後者は、国文学科創設五十周年を記念しての講演会を企画し、卒業生にも幅広く参加を呼びかけた結果、150人を超える人々が参集して、成功裡に終わった。『和洋国文研究』には8本の論文が掲載され、充実した誌面とすることができた。科学研究費では複数の教員が研究代表者として研究を進めているほか、研究協力者になっている教員も多い。各教員の種々の学会等における活動も、活発に行われている。なお、外部資金獲得という点では、さらに件数を増やすべく、今後の努力と工夫の余地はある。</p>	
6 研究の活性化と外部資金の導入	
6-4. 心理学類 心理学専修	
目標	
<p>研究時間の確保に加え、心理学の実験・実践研究を十分に行うことができる設備環境を整える。心理学類の特色となる教育活動については、教育振興支援助成を受けた「自己表現演習」の効果的な授業運営を目指し、予算や授業の計画的な実施と教員間の連携を密に行う。1) 研究奨励費および科学研究費等の外部資金への申請、2) 学会発表や学術誌等への論文投稿、3) 研究者情報システムの更新や研究成果の公開を教員各自が行い、それらの情報を共有していくことで、研究活動の相互活性化を進める。4) 以上を効果的に進めるために、研究の活性化を実現するための方策を積極的に立案し、実施する。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
<p>(1) 教員間の学問的関心を共有し意見交換できる場を設け、組織的研究が実施できる基礎作りを行う。そのための具体的な立案を行う。</p>	<p>(1) A</p>

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>(2) 心理学類の特色となる教育活動について、教育振興支援助成を受けた「自己表現演習」を2015年度・2016年度の反省を活かし効果的に運営する。</p> <p>(3) 教員各自が、研究奨励費および科学研究費等の外部資金へ申請する。科学研究費等の外部資金は学類全体（研究分担者等を含む）で100万円以上とする。</p> <p>(4) 教員各自が、学会発表や学術誌等への年間各1件以上の発表もしくは論文投稿を行う。</p> <p>(5) 上記を効果的に進めるために、学類内で研究FDを設け、研究活性化のための組織的な研究推進の基盤をつくる。</p> <p>(6) 研究時間の確保を含めた教員の業務（時間・内容）の検討の要請を、大学に対して行う。</p>	<p>(2) S</p> <p>(3) B</p> <p>(4) B</p> <p>(5) B</p> <p>(6) B</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度（ B ）</p>
<p>(1) 学類会議で研究発表の紹介の場を設け、学会発表などの報告を行った。</p> <p>(2) 今年度も2015年度・2016年度の反省や成果をふまえ、自己表現演習の効果的な運営が行われた。2017年度は教育振興支援助成の最終年度であることから、3年間のとり組みの成果について、今後組織的に研究を進める予定である。</p> <p>(3) 全員の研究奨励費および科研費等の外部資金申請は実現しなかった。科学研究費等の外部資金は学類全体で100万円以上であった。</p> <p>(4) 全員の目標達成はかなわなかった。</p> <p>(5) 研究FDという形ではないが、学類FDにおいて自己表現演習の効果的な授業のとり組みや成果について検討を行った。また、次年度赴任予定の臨床分野の教授を招き、専門分野に関する講演を行った。</p> <p>(6) 研究時間の確保を含めた教員の業務（時間・内容）の検討の要請については、専任教員の確保や増強の要請の際に、教職員の業務の実情を伝え、研究時間の確保に向けての業務の軽減を大学側に要請した。</p>	
<p>次年度課題</p>	
<p>学類会議、学類FDなどを活用して、教員の研究活動の共有や「自己表現演習」の教授効果の検討などを行ったが、本格的な組織的研究に高めていくのは、これからの課題となる。そのためにも研究時間の確保は、引き続き次年度も粘り強く大学に要請していきたい。また、個々の教員の研究活動を活性化させるためにも、次年度は研究の活性化に向けての組織的基盤づくりの計画・立案が課題である。</p>	
<p>6 研究の活性化と外部資金の導入</p>	
<p>6-5. こども発達学類 こども発達学専修</p>	
<p>目標</p>	
<p>(1) 子どもを取り巻く課題や「子ども・子育て支援制度」に総合的に対応するため、乳幼児期の教育・保育について、教員はそれぞれ実践にかかわり、観察や調査研究を積み重ね、研究発表や論文、書籍執筆、講演等による社会貢献等の業績を積み重ねる努力をする。</p> <p>(2) 科学研究費、その他文部科学省、その他の外部資金調達を積極的に進める。</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>(3) 「次世代の学校—地域創生プラン」に則り、養成—採用—研修のあり方を模索する。学類の教員が多く参加している研究会を通し、養成課程と現職研修について学びあう。</p>	
<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度 (S, A, B, C)</p>
<p>(1) 現場の教員ならびに保育士の協力の下に保育現場での調査を行い、その成果を各自最低1件は保育学会や特殊教育学会等の関連学会で発表する。</p> <p>(2) 本年度中に教員各自が論文や著書を執筆し、それぞれが学術誌への投稿や著作物の作成を目指す。</p> <p>(3) 教員各自の研究活動について論文のみならず、その他の実践も含め(研究費申請も含む)学類内で共有を図る。</p> <p>(4) 教員自身の研究の活性化のみならず、学生のより良い学びのために、教育振興支援費助成を積極的に申請・活用する。</p> <p>(5) 学類として科研費等の外部資金獲得を積極的に進め、相互に情報交換や協力して応募して外部資金獲得を目指す(学類で3件以上の採択)。</p>	<p>(1) S</p> <p>(2) S</p> <p>(3) A</p> <p>(4) S</p> <p>(5) S</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (S)</p>
<p>実働教員に関しては、異動直後の新任を含めて十分達成できた。採択に至らなかったものもあるが、教職の再課程認定を見据えて、各自が例年以上に研究業績を積み重ねた。継続分に加えて、千葉県保育協議会保育部会調査研究委員会や市川市公立保育所との共同研究など、新プロジェクトも立ち上がっている。次年度課題は、多くの教員が入れ替わる中で、これらの研究体制及び学内の研究支援体制について十分に伝達していくことである。</p>	
<p>6 研究の活性化と外部資金の導入</p>	
<p>6-6. 家政学群</p>	
<p>目標</p>	
<p>(1) 教員(助手含む)による科学研究費等の外部資金への応募の増加を目指すため、教員の研究環境(研究時間の確保)改善を目指す。</p> <p>(2) 家政学群として行う教育振興支援のプロジェクト(教育研究活動)の適切な運営を目指す。</p>	
<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度 (S, A, B, C)</p>
<p>(1) 本年度の科研費申請数は9件であり、昨年の9件と昨年の申請数を維持することができた。また、昨年は2学類からのみの申請であったが、今年度は3学類の教員が申請することができた。</p> <p>(2) 外部資金の獲得件数は11件で、昨年の12件とほぼ同数の獲得ができた。また3学類それぞれから獲得がされていることは望ましい状況と言える。</p> <p>(3) 教育振興支援プロジェクトは、昨年終了した課題が紀要で報告され、本年度実施の2研究も学群の教育充実にむけた取組が実施された。</p>	<p>(1) S</p> <p>(2) S</p> <p>(3) S</p>
<p>次年度の課題</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>科研費を中心に申請者が学類教員において固定される傾向にあり、次年度は更なる教員・若手教員が申請する環境整備を課題としたい。</p>	
実施結果と次年度課題	総合達成度 (S)
<p>(1) 本年度の科研費申請数は9件であり、昨年の9件と昨年の申請数を維持することができた。また、昨年は2学類からのみの申請であったが、今年度は3学類の教員が申請することができた。</p> <p>(2) 外部資金の獲得件数は11件で、昨年の12件とほぼ同数の獲得ができた。また3学類それぞれから獲得がされていることは望ましい状況と言える。</p> <p>(3) 教育振興支援プロジェクトは、昨年終了した課題が紀要で報告され、本年度実施の2研究も学群の教育充実にむけた取組が実施された。</p>	
次年度の課題	
<p>科研費を中心に申請者が学類教員において固定される傾向にあり、次年度は更なる教員・若手教員が申請する環境整備を課題としたい。</p>	
6 研究の活性化と外部資金の導入	
6-7. 服飾造形学類 服飾造形学専修	
目標	
<p>(1) 教員および研究助手は可能性のある外部資金を獲得することを終始念頭において積極的に取り組み、研究体制の活性化と充実を図る。</p> <p>(2) 教員および研究助手は各自の研究および作品制作に意欲的に取り組み、その成果等を広く公開することによって、教育へのフィードバックおよび社会貢献に努める。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
<p>(1) 学類は、教員および研究助手が研究および制作に取り組める時間や環境を確保できるよう、教育および校務業務を相互にサポートする体制を強化し、研究成果および作品発表が促進されるようにする。</p> <p>(2) 本学類は科学からデザインまで教員の専門性が多岐に渡っている。そこで、研究助手を含む各自の研究テーマや成果を学類FDなどで発表し、それぞれの領域に対する相互理解を深め、共通課題の可能性と共同研究の方向性を探る。</p> <p>(3) 科研費や研究支援課が紹介する民間助成金等の外部資金に1人1件は申請し、そのうち1/5件の獲得を目指す。</p> <p>(4) 地域連携センターを介して市川市や千葉県と連携を図り、地域や企業との共同研究に積極的に参画していく。</p> <p>(5) 学会等への研究および作品発表、公募展への出品など、各自の取り組みや成果に関する公表を年度内に1人1件は行う。</p>	<p>(1) S</p> <p>(2) B</p> <p>(3) A</p> <p>(4) S</p> <p>(5) S</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度 (A)
<p>(1) 教育および校務業務を明確にし、相互にサポートする体制を強化すると共に、各自の分野におけるセミナーや講習会に積極的に参加を促した。各自が見識を深め、研究へのフィードバックが行えたことで、研究成果発表が促進できた。</p> <p>(2) 科学系と構成系領域に対する相互理解を深め、共通課題の可能性を探ることができた。</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

- (3) 研究支援課主催の科研費説明会にほぼ全員参加し、積極的に取り組み、継続も含め3分の1以上の教員が何らかの外部資金に応募した。
- (4) 地域連携センターを介して市川市をはじめ地域や企業と積極的に連携を図った。
- (5) それぞれの成果は研究発表、論文、紀要、作品発表で公表した。

次年度課題

- (1) 教員および研究助手が、研究および制作に取り組める時間や環境を確保できるよう、さらなる研究・制作体制の活性化と充実を図る。
- (2) 個人での研究だけではなく、共同研究、共同教育に取り組むことで、授業や研究に反映させていく。
- (3) 教員および研究助手は、研究奨励費（一般）のサポートによって業績を積むことで、外部資金獲得や公募展への入賞などをを目指す。

6 研究の活性化と外部資金の導入

6-8. 健康栄養学類 健康栄養学専修

目標

- (1) 教員及び助手は個人研究と共同研究を積極的に進め、学内の一般研究奨励費、個人研究費、共同研究費に応募する。
- (2) 科学研究費、その他文部科学省、厚生労働省助成等の外部資金調達を積極的に進める。

年度計画：活動内容

- (1) 研究の推進のため、教員及び助手が全員、学内の一般研究奨励費に応募する。個人研究費、共同研究費については、外部資金応募と含めて、全員がいずれかに応募する。
- (2) 外部資金の応募について積極的に申請し、学類内で最低5件の採択を目指す。
- (3) 研究成果公表のため、学会発表、学術雑誌論文投稿を積極的に行う。学会発表あるいは学術論文投稿を各自最低1件は行う。

達成度（S, A, B, C）

- (1) A
- (2) A
- (3) B

実施結果と次年度課題

総合達成度（ A ）

- 学内研究費、科学研究費、外部研究費に積極的に応募し、研究活動を活発に行うよう、学類会議等で共通理解した。
- (1) 研究活動についてのカンファレンスは開催できなかった。学内一般研究費には全員（教員17名、助手9名）が申請した。個人研究費は7名、共同研究3件が採択された。
 - (2) 外部資金5件以上採択された。
 - (3) 研究費取得以外の研究についても積極的に学会発表等を行う。

次年度課題は、研究活性化のために、研究発表会や研修会、FD等に積極的に参加できる環境づくりを行う。外部資金調達のための情報収集、情報の共有化を推進する。

6 研究の活性化と外部資金の導入

和洋女子大学 2017年度目標と計画

6-9. 家政福祉学類 家政福祉学専修	
目標	
<p>(1) 教員は学外からの資金調達を積極的に行い、研究基盤および研究環境の充実を図り、研究者としての資質の向上を目指す。</p> <p>(2) 企業や地域からのコラボ要請に学類として積極的に応じ、研究開発を進め社会や地域への貢献を果たす。</p> <p>(3) 助手の仕事の見直しを進めて、助手が研究できる環境をさらに一層整備し、学会発表や論文投稿をするようにエンカレッジする。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
<p>(1) 3分の2以上の教員が科研費、厚労科研費、民間助成金等の外部資金を申請し、3分の1以上の教員が科研費、厚労科研費、民間助成金等の外部資金を獲得する。</p> <p>(2) 助手による研究と発表が促進される物的・精神的な環境を整え、助手は研究発表を年間に1回以上する。</p> <p>(3) 学会その他の機関への研究成果の発表を、年度内に教員全員が1回以上行う。</p> <p>(4) 地域や企業からのコラボ研究や開発プログラムに1件以上関わる。</p>	<p>(1) S</p> <p>(2) C</p> <p>(3) S</p> <p>(4) S</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度 (A)
<p>(1) ほとんどの教員が新たな申請や継続をしており、科研費・厚労科研費・民間助成金等の外部資金の獲得は5名であり、2分の1の教員が獲得できた。</p> <p>(2) 助手の仕事を見直して、助手が研究できる環境に整備を進めつつも、研究や学会発表にまでは結果が結びつかなかった。</p> <p>(3) 学会発表や論文投稿を含めると全教員が1回以上、成果を発表できた。</p> <p>(4) 地域や企業からのコラボ研究や開発プログラムには「寺田製作所・三井農林と低カフェイン茶の試験開発研究」、「ニチレイフーズとの共同研究」、「ちば農工商連携事業支援基金助成事業の共同開発」「NPO 法人千楽 chi-raku とのお弁当レシピ開発」など多くの実施をした。</p> <p>次年度の課題は、以下のとおりである。</p> <p>(1) 教員は学部資金の獲得を積極的に行い、研究基盤および研究環境の充実を図り、研究者としての資質の向上を目指す。</p> <p>(2) 企業や地域からのコラボ要請に学科として積極的に応じ、研究開発を進め社会や地域への貢献を果たす。</p> <p>(3) 助手の仕事の見直しを進めて、助手が研究できる環境をさらに一層整備し、学会発表や論文投稿をするようにエンカレッジする。</p>	
6 研究の活性化と外部資金の導入	
6-10. 大学院：人文科学研究科 英語文学専攻 日本文学専攻	
目標	
1. 英語文学専攻	
<p>教員は各人に関連する専門学術雑誌により国内外の研究者の最新の研究動向を把握して自らの研究に生かすと共に、科学研究費をはじめ学内および学外の研究補助金の獲得に向けた申請努力を継続する。</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>2. 日本文学専攻</p> <p>(1) 研究の場として、各担当教員が学術雑誌の投稿や研究会（全国大学国語国文学会誌『文学・語学』並びに各種の「研究発表会」）を活発に活用し、専攻内においては担当教員同士が相互に研究活動に関する情報を共有しあうようにつとめる。</p> <p>(2) 科学研究費助成金（日本学術振興会）や学術研究振興資金（日本私立学校振興・共済事業団）等への申請をする。</p>		
<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度（S, A, B, C）</p>	
<p>1. 英語文学専攻</p> <p>(1) 外部研究補助金の獲得者数を増やす方を検討する。</p> <p>(2) 昨年度同様に国内外の学会や研究会に積極的に参加して、口頭発表・学会誌投稿・研究上の情報収集をする。</p>	<p>1.</p> <p>(1) C</p> <p>(2) A</p>	
<p>2. 日本文学専攻</p> <p>(1) 教員各人は学会誌論文の投稿及び国内外の研究会への参加・発表を積極的に行う。</p> <p>(2) 教員各人は外部資金調達を積極的に行う。</p>	<p>2.</p> <p>(1) A</p> <p>(2) A</p>	
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度</p>	<p>1. 英文専攻 (B)</p> <p>2. 日文専攻 (A)</p>
<p>1. 英語文学専攻</p> <p>個々の教員の研究活動は活発であった。外部資金導入には新しい分野等の共同研究が有効であるが、英語文学専攻担当の教員は英語学、英文学、英語圏文化など、それぞれに専門分野が細か分かれていて、共同研究にまとめることができないのが不利である。今後、和洋女子大学大学院英語文学専攻の研究内容を絞って明確にし、共同研究等で外部資金導入ができるよう検討していきたい。</p> <p>次年度課題</p> <p>(1) 学問分野が異なってもできる共同研究のテーマがないか検討していく。</p> <p>(2) 個々の教員が研究活動の中で共同研究の可能性を意識していく。</p>		
<p>2. 日本文学専攻</p> <p>(1) 人文科学研究科として2017年12月8日に千葉大学名誉教授 三浦佑之先生を講師にお迎えして講演会を開催した。テーマは『古事記』の魅力 ～滅びゆく者への眼差し～。また、教員各人は日本文学文化学会の研究雑誌「和洋國文研究」、本学「大学研究紀要」への投稿をおこなったが、次年度も引き続き実現につとめていきたい。</p> <p>(2) 次年度課題としても引き続き外部資金調達を目指していきたい。</p>		
<p>6 研究の活性化と外部資金の導入</p>		

和洋女子大学 2017年度目標と計画

6-11. 大学院：総合生活研究科 総合生活専攻 博士前期課程 博士後期課程	
目標	
<p>(1) 教員は、外部研究費（文部科学省並びに厚生労働省の科研費等）への申請を毎年1件以上行なう。</p> <p>(2) 教員は学会誌等への論文投稿を積極的に行う。</p> <p>(3) 大学院組織全体として、学際領域での予算の申請、獲得が可能となるような組織改革に着手する。</p>	
年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）
<p>(1) 潤沢な研究環境維持を構築するため、教員は、科研費や民間を含めた研究費補助事業に関しても応募する事で、採択率増加を目指す。</p> <p>(2) キャリアデザインにつき、修了生とも連携をとりながら、教員間で情報を共有し、学生に適切な助言を与える。</p>	<p>(1) S</p> <p>(2) A</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度 前期（ A ） 後期（ A ）
<p>実施結果</p> <p>外部資金の導入状況は前年度と大きくは変わっていない。</p> <p>次年度課題</p> <p>次年度も、積極的に外部資金の獲得に取り組んで行く。外部資金獲得においては、研究倫理教育や研究に関わるコンプライアンス教育が必須となるので、引き続き両面の教育体制を維持、発展させて行く。</p>	
6 研究の活性化と外部資金の導入	
6-12. 研究支援課	
目標	
文部科学省のガイドライン等に従い、教育・研究に対する信頼と評価を高め、外部資金獲得の増加に繋げる。	
年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）
<p>(1) 動物実験の外部検証を受けるため、委員会及び各実験責任者からの書類の取りまとめや、事務局で準備する書類を整える。</p> <p>(2) 公的研究費（学内研究費、科研費及びその他外部資金）の予算執行に伴うルールを周知すること。関連書類の様式データを整え、サイボウズファイル管理のフォルダを見やすくするなど書類作成が容易になるよう工夫し、教員の事務負担を軽減して研究に注力できるようにする。</p> <p>(3) 「公的研究費取扱ハンドブック」を更新する。教員と事務の双方が分かり易く、使い易い資料となるよう他大学の資料を参考</p>	<p>(1) S</p> <p>(2) A</p> <p>(3) A</p>

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>に改訂する。</p> <p>(4) 産学官連携ポリシー、受託・共同研究、奨学寄付、知的財産等について取扱規程の見直しを行い、運用手順を整備する。</p> <p>(5) 総合研究機構の組織体制の見直しを行う、研究成果についてホームページを通じて公表する。</p> <p>(6) 大学紀要の発行スケジュールおよび編集方法の見直しを行う。</p>	<p>(4) B</p> <p>(5) B</p> <p>(6) A</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度 (A)
<p>(1) 動物実験の外部検証では委員長と連携し書類を作成、検証結果として小規模ながら意識が高いとの評価をもらった。次年度は指摘された事項を改善する。</p> <p>(2) 研究費の申請や予算執行の際に使用する書類の様式について、サイボウズ学内メールとリンクを貼るなどの工夫をした。</p> <p>(3) 「公的研究費ハンドブック」に購入に注意を要するものを一覧として掲載、領収書の適切な例として雛形を掲載するなど他大学を参考に改訂を行った。</p> <p>(4) 受託・共同研究、奨学寄付、知的財産等の取扱規程については、問題点をまとめ次年度に見直し運用手順を整備する。</p> <p>(5) 総合研究機構の組織体制の見直しは、引き続き次年度の検討課題とする。</p> <p>(6) 紀要の編集方法について、今年度の問題点について改訂していく。</p> <p>年度計画には記載していないが、遺伝子組換え実験の様式が整いサイボウズファイル管理に掲載した。</p> <p>次年度課題は、審査の事務業務が円滑に行えるよう体制を整える。</p>	
6 研究の活性化と外部資金の導入	
6-13. 全学教育センター	
目標	
<p>(1) ラーニングステーションで企画運営する学習プログラムに参加する学生を対象に収集しているアンケート結果やプレイスメントテスト結果などについて評価を行い、引き続きリメディアル教育の方向性について教育研究活動として実施する。</p> <p>(2) 共通総合科目及び資格科目担当者は、それぞれの専門分野における最近の動向や学生の実態を踏まえた観察や調査研究を積み重ねて、研究発表や論文執筆を積み重ねる努力をする</p> <p>(3) 「わよらカフェ」の拡充等、学生によりよい学びの支援ができる環境を提供できるようにする。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
<p>(1) 最終年度の教育振興支援助成により、「基礎学力向上のためのリメディアル教育システムの開発と展開」に取り組む。</p> <p>(2) WALACA カードポイント還元によるプログラム導入を検討する。</p>	<p>(1) S</p> <p>(2) S</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度 (S)

和洋女子大学 2017年度目標と計画

(1) 教育振興支援助成を受けて平成 27～29 年度に実施してきた「基礎学力向上のためのリメディアル教育システムの開発と展開」に取り組み、和洋女子大学としてのリメディアル教育の基本的な方向性を確立した。授業以外のプログラムとしてのカフェ教育だけでなく、平成 31 年度スタートの共通総合科目の新カリキュラムに「ベーシックラーニング」を科目として追加し、大学の学びの基礎を展開することを決定した。この科目では単に高校までの復習としての内容ではなく、復習の内容を含めて大学での学びの力の養成を目指す。入学前学習プログラムについても 1 日の大学集合型学習プログラムと通信教育型の学科別プログラムを導入し、継続したプログラムを構築することができた。

(2) WALACA ポイントカード還元によるプログラムを導入して、英検等の資格試験、費用のかかる外部へのお出かけカフェ講座などへの参加を促し、学生からの好評を得た。

次年度から、教育振興支援助成を受けて実施してきたリメディアル教育に関する教育研究について、新組織としての全学教育センター教授会として継続する。入学前学習プログラムでは、大学集合型学習プログラムを継続するが、その内容を改めて検討し、学科とも連携してより充実させる。通信教育型の学科別プログラムは現在受益者負担で実施しているが、費用負担ができずに申し込まない生徒もいるため大学負担で実施する方向で再検討する。入学後のリメディアル教育についてもその内容と方法を改めて検討し、効果的な教育内容の構築を目指す。

7 社会人教育体制の構築

7-1. 人文学群

目標

社会人を対象とした教育がますます重要となっており、人文学群としても社会人入学者、科目等履修生、聴講生等の獲得に向け、社会人にとって魅力的なカリキュラムの検討を進める。また、大学の公開講座、市川市の市民アカデミーに積極的にに関わり、そして教員免許更新講座にも積極的に参加する。

年度計画：活動内容

- (1) 科目等履修生やリカレント教育受講者受け入れをめぐる課題について、学類会議等で話し合い、社会人教育体制のあり方について再考する。
- (2) 学類の検討を踏まえて、学群として魅力的なプログラムの構想について検討する。
- (3) 公開講座、市民アカデミーには全学類が参加する。
- (4) 教員免許更新講座には全関連学類が積極的に参加する。

達成度 (S, A, B, C)

- (1) A
- (2) C
- (3) S
(公開講座 7 講座、
市民アカデミー 6 講座)
- (4) S
(全学類で 17 名の教員が
参加した)

和洋女子大学 2017年度目標と計画

(5) 公開講座、市民アカデミー、卒業生等を通してリカレント教育等について啓発活動を行う。	(5) A
実施結果と次年度課題	総合達成度 (A)
<p>総じてすべての学類が積極的に対応したが、社会人教育については、各学類が既存のプログラムを前提して実施するのを活動の中心とし、学群として新たなプログラムを構想するまでには学類間の連携を行う余裕がなかった。次年度は(1)について改めて検討する必要がある。</p>	
7 社会人教育体制の構築	
7-2. 国際学類 英語文化コミュニケーション専修 国際社会専修	
目標	
1. 英語文化コミュニケーション専修	
<p>大学主催の公開講座や市川市主催の市民講座などに積極的に出講する。社会人聴講生を積極的に受け入れる。</p>	
2. 国際社会専修	
<p>各種の地域貢献事業や教員免許更新講習事業などに、積極的に協力する。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
1. 英語文化コミュニケーション専修	1.
(1) 大学主催の公開講座や市川市主催の市民講座の講師として活動する。	(1) A
(2) 英語文化コミュニケーション専修主催の「English Day」や「英文学会講演会」についての情報を大学HPで広く学外に公開し、参加を呼びかける。	(2) A
2. 国際社会専修	2.
(1) 公開講座およびいちかわ市民アカデミー講座に講師を派遣し、現代の世界情勢や経済問題等に関して講演する。	(1) A
(2) 公開講座等の機会を利用して社会人の科目等履修や聴講への参加を促し、リカレント教育に積極的に関わる。	(2) B
(3) 教員免許更新講習に積極的に対応する。	(3) A
実施結果と次年度課題	総合達成度 (A)
<p>概ね目標が達成された。公開講座および市民講座の講師として例年通りの活躍ができた。「英文学会講演会」には外部からの参加があった。次年度はリカレント教育に注力する必要がある。</p>	
7 社会人教育体制の構築	
7-3. 日本文学文化学類 日本文学専修 日本語表現専修 書道専修 文化芸術専修	
目標	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

日本文学文化学類 社会人を受け入れるための体制を整え、社会人教育にも応じたカリキュラムを検討する。また、公開講座などに積極的に関与し、リカレント教育プログラムの履修生を確保する。	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
日本文学文化学類 (1) 日本の文学や文化がもつ普遍的な価値を広報することに努め、社会人を受け入れるための体制やカリキュラムを整備する。 (2) 座などの講師を積極的に務め、受講生に科目等履修生やリカレント教育、社会人入試の案内を提供する。 (3) 専修・文化芸術専修ではリカレント教育履修生を幅広く受け入れる。	(1) A (2) A (3) S
実施結果と次年度課題	総合達成度 (A)
社会人に対する再教育機関としての大学の役割ということが、各教員の中で認識されつつある。広報という点では、何が有効なのか、まだつかめきれておらず、この点が課題である。	
7 社会人教育体制の構築	
7-4. 心理学類 心理学専修	
目標	
社会人に対する教育を念頭に、公開講座、市川市民アカデミー、社会人学び直しプログラム等に積極的に取り組む。同時に、改組に絡んで社会人受け入れ体制の構築とその教育内容について検討する。	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
(1) 大学の公開講座もしくは市川市民アカデミーに協力して講座を開催する。 (2) 今後とも社会人からのニーズが高まることが予想される。このようなニーズの高まりにどのように応えることができるのかについて議論と受け入れ体制作り（教育内容および教育方法ならびに連絡・指導体制）を行なう。	(1) S (2) S
実施結果と次年度課題	総合達成度 (S)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 公開講座「ボディタッチの心理学（高梨一彦教授）」を開催した。 ・ 公開講座「感謝の心理学～日常生活の当たり前を問い直す～（池田幸恭准教授）」を開催した。 ・ いちかわ市民アカデミー講座「日本人のこころ～「恥」の文化の功罪（寺島瞳准教授）」を開催した。 ・ 鎌ヶ谷市市民講座「ほめる～コミュニケーションの心理学（小沢哲史准教授）」を開催した。 ・ 社会人学び直し講座の学生を受け入れた（1名）。 以上の通り、多忙の中、例年と比較してもかつてない大きな成果のあがった年と言える。現代社会における様々な人間関係のこじれやストレスに絡んで、心理学	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

へのニーズは今後も高いまま継続すると考えられる。これを各教員の個人的な負担によってまかなうのではなく、学類、学群、全学的に考えていく必要があるという認識が得られた。

次年度課題

次年度も依頼に対して、できるだけ応えることとし、同等の成果が得られるように務めること、また心理学科の各教員の持つコンテンツの魅力と可能性について、大学内外に共通理解を高めていくよう議論と体制作り（教育内容および教育方法ならびに連絡・指導体制）を進めることが課題である。

7 社会人教育体制の構築

7-5. こども発達学類 こども発達学専修

目標

「次世代の学校—地域創生プラン」に則り、社会に開かれた学校であるために、社会人に対する公開講座、市川市民アカデミーのほか、幼稚園免許更新講習、自治体・幼稚園・保育所での研修等を通じて、幼児教育や保育に関する最近の時流や発達支援研究の成果等を学べる機会を提供する。

年度計画：活動内容

達成度（S, A, B, C）

- (1) 地域貢献としての公開講座や市川市民アカデミーなどに積極的に協力して講座を開催し、社会人のアクセスの機会を提供する。
- (2) 幼稚園教諭免許に特化した更新講習を開講し、地域を中心とした幼稚園教諭の学び直しに貢献する。
- (3) 自治体・幼稚園・保育所等での研修会の講師や共同研究を通じて、現場の保育者と学び合う機会を設ける。

- (1) S
- (2) S
- (3) S

実施結果と次年度課題

総合達成度（ S ）

公開講座、教員免許更新講習などの大学主催のものに加えて、千葉県保育士のキャリアアップ研修、千葉県・東京都の園内研講師、保育者として働く卒業生との連携（研究含む）など、様々な局面で社会人（保育者）教育に関わった。各方面で保育者の教育がさらに求められているため、各自の専門に応じて注力できるように体制を整えたい。

7 社会人教育体制の構築

7-6. 家政学群

目標

学群として社会人入学生に加え、市川健康都市、市川アカデミーのような、地域の人たちの講習会を学群単位でも検討する。

年度計画：活動内容

達成度（S, A, B, C）

- (1) 社会人や非正規生の受け入れ体制を確認して広報していく価値があるか検討する。
- (2) 土曜に開講する地域対象講習会を年間数回実施する。

- (1) C
- (2) A

和洋女子大学 2017年度目標と計画

実施結果と次年度課題	総合達成度 (B)
<p>(1) 社会人の受け入れ態勢の検討はできなかった。地域連携と同時に社会人の学びの場としての大学の意義を次年度以降検討したい。</p> <p>(2) 市川市と共同して実施している、健康都市推進講座を家政学群教員が4回担当することが出来た。</p>	
<p>次年度課題</p> <p>(1) の課題について、学科長会を中心に検討をする。</p>	
<p>7 社会人教育体制の構築</p>	
<p>7-7. 服飾造形学類 服飾造形学専修</p>	
<p>目標</p>	
<p>本学の基本方針に沿って適切に受け入れ体制を整備する。学類独自の魅力を打ち出せるように公開講座やリカレント等社会人向けプログラムの広報を強化し、積極的に協力・参加する。</p>	
<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度 (S, A, B, C)</p>
<p>(1) 服飾造形学類のリカレント教育プログラムを積極的に広報し、受講生を受け入れる。</p> <p>(2) 聴講生・科目等履修生等についても、積極的に受け入れる。</p> <p>(3) 大学の公開講座、市川市民アカデミーに協力して講座を開催するとともに、学生の参加を促し、地域と積極的に関わる。</p>	
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (S)</p>
<p>(1) 服飾造形学類のリカレント教育プログラムを積極的に広報し、受講生を受け入れた。</p> <p>(2) 公開講座、市川市民アカデミー、社会人学び直しプログラム等に引き続き積極的に取り組む。</p>	
<p>次年度課題</p> <p>社会人受け入れ体制の構築とその教育内容について、検討を進める。</p>	
<p>7 社会人教育体制の構築</p>	
<p>7-8. 健康栄養学類 健康栄養学専修</p>	
<p>目標</p>	
<p>社会人教育の一環として、公開講座の講演の担当や、地域住民のための講演活動を積極的に実施する。学内においては、科目等履修生等の応募者を受け入れる。</p>	
<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度 (S, A, B, C)</p>
<p>(1) 教員は公開講座や講演活動などに積極的に参加して、その活動内容を学類内で報告する。</p> <p>(2) 卒業生への国家試験対策について検討する。</p>	
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (A)</p>

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>公開講座等の講師は積極的に担当した。科目等履修生も積極的に受け入れた。</p> <p>(1) 公開講座、講演活動に積極的に参加した。健康栄養学類担当の市川市健康都市推進講座では3名が講座を担当した。</p> <p>(2) 国家試験不合格の卒業生へは相談があった場合に対策講座（補習）があることを伝えた。</p> <p>次年度は、社会人教育を積極的に推進していく。卒業生の国家試験対策については、manaba folio や卒業生通信を利用する等、検討をしていく。</p>	
7 社会人教育体制の構築	
7-9. 家政福祉学類 家政福祉学専修	
目標	
<p>社会人受け入れのプログラムに関しては、入試制度による受け入れやリカレント教育プログラム、公開講座、教職教員の教員免許状更新講習など、大学の方針と連動してこれに積極的に協力・参加する。</p>	
年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）
<p>(1) リカレント教育履修生を受け入れ、学生と社会人との交流による学びの場をつくる。</p> <p>(2) 科目等履修生としての就学希望者がいれば、これを受け入れる。</p> <p>(3) 社福士取得を希望する卒業生に対して、受験対策講座の受講および全国模試の受験などを勧め、必要な情報を提供する。</p> <p>(4) 市川市民アカデミーや公開講座、あるいはその他の社会人教育において、学類教員は進んで講師役を務め、地域貢献を果たす。</p>	<p>(1) 該当なし</p> <p>(2) 該当なし</p> <p>(3) A</p> <p>(4) A</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度（ A ）
<p>リカレント教育履修生、科目等履修生の希望者はいなかった。卒業生に対して、全国模試の情報提供を行い、1名が全国模試を受験した。また、本卒業生が国家試験対策講座に参加した。次年度も積極的に卒業生の国家試験受験の支援と情報提供に努める。教員の7割が公開講座・社会人教育の講師を務め、地域貢献を果たした。次年度も引き続き7割以上の教員が公開講座・社会人教育の講師等を務める。</p>	
7 社会人教育体制の構築	
7-10. 大学院：人文科学研究科 英語文学専攻 日本文学専攻	
目標	
<p>1. 英語文学専攻</p> <p>社会人入学者のための授業内容の工夫や授業運営と、入学試験の可能性の検討をする。</p> <p>2. 日本文学専攻</p> <p>社会人を受け入れるためには現行の入試制度について、現状に即したものが否かを冷静に検討する必要がある。</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)	
<p>1. 英語文学専攻 (1) 入試制度の多様化(例えば、課題レポートによる代替科目)を含めた社会人受け入れの方策を継続的に検討する。 (2) 社会人の経験を生かした知識探求の授業内容の工夫、時間帯の弾力的な運用、‘集中講義’形式の活用等の対応策を検討する。</p> <p>2. 日本文学専攻 現行の筆記試験以外に、出願時に社会人としてのこれまでのキャリアや経験を具体的に示す成果資料等を提出してもらい、成績だけではわからない資質や研究意欲等を重視する。</p>	<p>1. (1) B (2) B</p> <p>2. B</p>	
実施結果と次年度課題	総合 達成度	1. 英文専攻 (B) 2. 日文専攻 (B)
<p>1. 英語文学専攻 社会人教育体制の構築は、定員確保と関連していて、専攻で個別に対策を練るには限界があることがわかった。大学院人文科学研究科の抜本的改革と同時に検討することになると思われる。</p> <p>2. 日本文学専攻 (1) 社会人の志願者がなかったことから、検討にいたっていない。 (2) 本方針を継承する。</p>		
7 社会人教育体制の構築		
7-11. 大学院：総合生活研究科 総合生活専攻 博士前期課程 博士後期課程		
目標		
<p>1. 博士前期課程 内部進学者に加え、1名以上の社会人入学者確保に努める。</p> <p>2. 博士後期課程 1名以上の社会人入学者確保に努める。</p>		
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)	
<p>(1) 博士前期課程における社会人（特に、本大学の実験助手等）入学者の積極的確保を行う。このため、実験助手として任用されながら、大学院に在籍できる事のメリットを広報していく。</p> <p>(2) 社会人入学生の確保をめざし、地域、また関連職域への広報活動を進める。</p>	<p>(1) S</p> <p>(2) S</p>	
実施結果と次年度課題	総合 達成度	前期 (S) 後期 (S)

和洋女子大学 2017年度目標と計画

実施結果	
博士前期課程1名、後期課程2名の社会人の受験者があった（Ⅱ期の試験結果が未定のため受験者としている）。	
次年度課題	
引き続き、社会人入学者のリクルートにも力を入れる。基本的には、各先生方の研究を通したつながりによって入学希望者を獲得して行く取り組みを継続し、入学者を確実に研究者として独り立ちさせて行く研究活動を行って行くこととする。	
7 社会人教育体制の構築	
7-12. 教務課	
目標	
地域・社会貢献を目的とする社会人教育の一環として、現在のリカレント教育プログラム・科目等履修生・聴講生の制度を適切に運営すると同時に、社会人教育体制の在り方そのものを検討する。	
年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）
(1) リカレント教育プログラムについて、本学にとってどのようなプログラムが必要なのか全学的な理解がはかれるよう、地域交流センターと共同してルートを構築していく。	(1) S
(2) リカレント教育プログラムの見直しにともない、提供可能、かつニーズのある場所、時間などの提言を行っていく。	(2) S
実施結果と次年度課題	総合達成度（ S ）
コースや提供科目の見直しを進めることについて関係部署と連携した。これを受けて設 2019 年度のカリキュラムから対応できるよう、コース構想を教務委員会にて提示し今後、検討することになった。次年度も引き続き取り組みを進める。	
7 社会人教育体制の構築	
7-13. 地域連携センター	
目標	
公開講座等の内容充実を図り、市川市の社会人講座の開催協力を行う。また、リカレント教育の募集窓口として、ポスターおよびパンフレットの早期作成及び効果的な広報を行う。	
年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）
(1) 本学主催の公開講座の開催と運営。3会場での開催を円滑に行うと同時に、次年度に向けて文化・地域交流委員会で、魅力ある講座の企画を行う。卒業生、在学生及び保護者や若い年代層、幅広い地域の参加者増を目指す。	(1) S
(2) いちかわ市民アカデミー講座への協力、委員会で興味深いテーマ、内容を提供できるよう企画する。健康都市推進講座についても、滞りなく開催出来るよう市川市への協力を行う。	(2) S
(3) 教務課と連携し、リカレント教育（履修証明プログラム）のポスター・パンフレットの早期作成、受講者増に繋がるよう効果	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

的な広報を行う。	(3) A
実施結果と次年度課題	総合達成度 (S)
<p>(1) 講座は3会場とも滞りなく開催できた。今年度は「私立大学等改革総合支援事業」タイプ2の来年度補助金獲得を狙い、急遽、特別公開講座と称して国府台キャンパスおよび木内ギャラリーで計8講座を12月と2月に開催。遠方或いは若い年代など幅広い層の参加があった。次年度に向けても文化・地域交流委員会で魅力ある講座の企画を行った。</p> <p>(2) いちかわ市民アカデミー講座の定員が今年度より70名から80名に増員されたが、定員以上の受講申込みがあった。健康都市推進講座は掲示物の作成等で市川市への協力を行った。</p> <p>(3) リカレント教育(履修証明プログラム)のポスター・パンフレットは教務課の協力があり、早期作成することができた。また、受講に関する問合せも例年に比べ多かった。</p>	
次年度課題	
<p>いちかわ市民アカデミー講座の受講者の中に、公開講座やシニア・フォーラムの存在を知らない方もいたので、広報の仕方等を再考する。公開講座は昨年度と比較して申込者の減少が見られたので、減少の原因を探り、参加者増を目指す。</p>	
8 国際交流の推進	
8-1. 人文学群	
目標	
<p>グローバル化においてはすべての学類に国際交流の推進が求められるという認識を学群で共有し、学術研究、学生教育の面で積極的に国際交流に取り組んでいく。とりわけ外国人留学生の受け入れ、国際学類の国際交流などが大きな課題であり、そのあり方について具体的に検討する。また、教員の海外研究活動も積極的に支援する。海外研究者・学生が参加する研究会の開催を積極的に企画する。さらに、海外の大学や研究機関との提携を積極的に進めていく。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
(1) 国際学類を中心に海外留学支援を継続する。	(1) S
(2) 国際学類、日本文学文化学類を中心に海外研修(国際フィールドワーク、書道研修等)を進める。	(2) S
(3) 日本文学文化学会が企画する国際シンポジウムを開催する。	(3) C
(4) こども発達学類学生による外国籍児童とのふれ合い活動を支援する。	(4) B
(5) 留学生受け入れについてノウハウを有する専門機関から助言と情報を収集して新たな方策を検討する。	(5) A
実施結果と次年度課題	総合達成度 (A)
<p>(3)の国際シンポジウムの開催を除くと、各学類では国際交流の重要性を認識して、所属学生の海外学習活動への支援あるいは啓発指導を積極的に行った。教員の研究面での国際交流も総じて積極的になされた。次年度も引き続き留学生の受け入れ策について国際学科を中心に検討を進めるのが課題である。</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

8 国際交流の推進	
8-2. 国際学類 英語文化コミュニケーション専修 国際社会専修	
目標	
<p>1. 英語文化コミュニケーション専修</p> <p>(1) 英語文化コミュニケーション専修の学生が、短期・長期の海外語学研修や語学留学を希望し、実際の研修や留学に向けて準備をするよう推進する。</p> <p>(2) 教員の国際学会における発表や海外研究など、活発に学術的な国際交流を行う。</p> <p>2. 国際社会専修</p> <p>海外留学は国際社会を理解する上で極めて意義のある経験であるため、本専修では、協定大学を始め海外の大学に留学したい学生には、積極的に対応・指導するとともに、協定大学からの交換留学生の受け入れも歓迎する。また教員の国際的な研究交流も活性化したい。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
<p>1. 英語文化コミュニケーション専修</p> <p>(1) 年に3度(4月・9月・1月)、海外研修や語学留学の説明会を行い、協定校や奨学金などの情報を発信し、1年次学生の異文化理解や英語技能のレベルアップのモチベーションを上げ、2年次以降の実際の海外研修や留学実現を促進する。</p> <p>(2) 海外研修や語学留学を希望する2年次以降の学生のために、単位認定システムを整備する。</p> <p>(3) 市川市国際交流課・国際交流協会と連携して、市川市内在住の外国人との交流を図る。</p> <p>2. 国際社会専修</p> <p>(1) 2年次から開講する科目「国際フィールド・ワーク」の履修者のために各種の海外研修プログラム情報を収集・整備し、履修希望者には適宜情報提供できる体制を整える。</p> <p>(2) 8月に専修主催「国際フィールド・ワーク」(ベトナム・カンボジアスタディーツアープログラム)を企画・実施する。</p> <p>(3) 海外留学希望者の把握につとめ、国際交流センターと連携して、希望を実現できるように助言・指導する。</p> <p>(4) 海外からの留学生受け入れで障害となっている課題への対応を検討する。</p>	<p>1.</p> <p>(1) S</p> <p>(2) A</p> <p>(3) C</p> <p>2.</p> <p>(1) S</p> <p>(2) S</p> <p>(3) A</p> <p>(4) C</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度 (A)
<p>概ね目標が達成された。とりわけ国際社会専修では引率企画の修正を重ねることにより効果的に国際フィールド・ワークを実施することができた。英語文化コミュニケーション専修では海外留学についての説明会は3回以上行い、学生への情報発信は十分にできた。単位認定のシステムは厳密に行われている。市川市国際交流課・国際交流協会との交流を活性化する必要がある。また、海外からの留学生受け入れの面では、依然として日本語学校在学生への有効なPR実施という課題が残されており、次年度注力する必要がある。</p>	
8 国際交流の推進	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

8-3. 日本文学文化学類 日本文学専修 日本語表現専修 書道専修 文化芸術専修	
目標	
<p>日本文学文化学類</p> <p>(1) アジア圏の大学を中心に築いてきた友好関係を維持・発展させる。</p> <p>(2) ヨーロッパ圏の大学との国際交流の可能性を開発する。</p> <p>(3) 学生の短期・長期の留学を積極的に支援する。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
<p>日本文学文化学類</p> <p>(1) 日本文学文化学会を基盤にして、何年かに一度の国際シンポジウムを計画する。</p> <p>(2) 中国文化大学との交流を促進し、日本語教育学国際学術研究会での発表などを行う。</p> <p>(3) 「海外文化研修」などを通じて協定校である蘇州大学との交流を活発にし、留学生の入学を促す。</p> <p>(4) 各教員が研究する分野の交際学会などに積極的に参加する。</p> <p>(5) 書道専修では、3年次に中国で2泊3日の研修を実施する。</p>	<p>(1) B</p> <p>(2) A</p> <p>(3) B</p> <p>(4) B</p> <p>(5) S</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度 (B)
<p>国際交流ということが、各教員の中でも意識されていることは、たしかなことである。それが実際の活動にまで結びついておらず、今後に課題を大きく残している。</p>	
8 国際交流の推進	
8-4. 心理学類 心理学専修	
目標	
<p>留学生の受け入れと、在学生の留学や海外研修について積極的な対応を行なう。専任教員の研究課題について、国際的な視野に立って積極的に取り組む。学生や教員の国際交流の成果を学類内で共有し、学生の国際交流への関心を高める。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
<p>(1) 留学生の受け入れについては、日本語能力が十分である場合には積極的に受け入れていく。</p> <p>(2) 留学や海外研修の希望がある学生に対しては、復学後の履修も視野に入れて柔軟な指導支援を行なう。</p> <p>(3) 専任教員の国際的な研究や発表の機会を積極的に取り入れていく。</p> <p>(4) 学生・専任教員の海外研修（研究）や国際会議での発表を学類内外で発信し、学生の国際交流への関心を高める。</p>	<p>(1) C</p> <p>(2) A</p> <p>(3) B</p> <p>(4) B</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度 (B)
<p>(1) ノルウェーからの受験者にたいし、面接を行った。日本語能力も高く、積極的に受け入れ全面的に支援していく予定である。</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

- (2) 本年度は、3年生の韓国への留学希望の学生にたいし、履修指導をはじめとして様々な支援を行った。次年度は、留学生が入学する見込みであることから、
 (3) 今年度は専任教員が国際的な発表の機会を持つことができなかった。
 (4) 現在韓国に留学中への学生の留学情報の発信はできず、学生の国際交流への関心を高めることはできなかった。

次年度課題

留学している学生のタイムリーな情報発信や、教員の研究・教育を通じた国際交流の促進、次年度受け入れ予定の留学生へのサポートが課題である。

8 国際交流の推進

8-5. こども発達学類 こども発達学専修

目標

本学の基本方針に従い、協定校との協力関係の維持に努める。教員および学生の国際感覚の養成に努める。

年度計画：活動内容

達成度 (S, A, B, C)

- (1) 授業内での国際理解と共に、国際教育を通して人権や文化を学ぶ姿勢ができるよう指導する。
 (2) 海外への留学（語学研修含む）や就職を希望する学生のニーズの把握と、その実現のための指導と助言を行う。
 (3) 国内の保育現場での外国籍児への対応や理解を促し、実習等を通して理解を深められるようにする。

(1) B
 (2) B
 (3) B

実施結果と次年度課題

総合達成度 (B)

各授業内の該当部分での指導・助言は行っている。今年度は、長期休業期間（含む実習）中の韓国語学留学の相談があった。次年度は、6月に教員が世界会議に参加・情報収集する OMEP（世界幼児教育・保育機構）での取り組みの紹介など、学生がアクセスできる情報をさらに広げたい。

8 国際交流の推進

8-6. 家政学群

目標

交換留学生の相互の交流を行い、学生同士が交流できる機会や場を学群全体に広げる。
 学術的国際交流を促進する。

年度計画：活動内容

達成度 (S, A, B, C)

- (1) 6月にカナダブレシア大学から栄養学を学ぶ交換研修生を受け入れ、健康栄養学類の授業だけでなく、料理、茶道、華道、和服着付けなど、家政学群学生との交流を促す。
 (2) 2016年より、ブレシア大学への留学が単位化され、多くの学生が安全に有意義に参加できるような、体制作りをする。
 (3) 服飾造形学類のフランスパリスンディカ校への短期留学プログラムが2年目となり、2016年の改善点を検討し、2017年も実施可能となる参加学生を集める。

(1) A
 (2) A
 (3) A

和洋女子大学 2017年度目標と計画

(4) 海外学会への参加の資金面での援助を大学として検討する。	(4) A
実施結果と次年度課題	総合達成度 (A)
<p>(1) ブレシアからの交換研修のプログラムが本年度から変更となり、6月実施から2月実施となった。そのため、授業参加による家政学群の学生交流が実施できなくなった。ただし、2月に和洋で実施された歓迎会では、昨年交換研修に行った学生・3月より研修に行く学生と交流することができた。2月実施のプログラムの中で、学生交流の場を広げていくことが次年度の課題となる。</p> <p>(2) 今年度は6名が研修に参加する。単位化されたことで定期的教育が可能となった。現段階ではまだ研修が実施されてなく（期間：2018年3月17日～3月30日）、その成果の評価はできない。</p> <p>(3) フランスパリサンディカ校への短期留学プログラムが実施され、8月に2・3年生12名が参加し、学類内での参加学生による報告会が実施された。</p> <p>(4) 海外学会への参加費用を、大学研究費として十分に補填することが出来なかったが、大学として検討し2018年度からの改善措置ができた。</p>	
次年度課題	
3学科それぞれの国際交流の推進を勧めていきたい。また、海外学会の参加を促す研究費の改革をさらに進める。	
8 国際交流の推進	
8-7. 服飾造形学類 服飾造形学専修	
目標	
<p>本学の基本方針に従い、協定校との協力関係の維持に努める。教員および学生の国際感覚の養成に努める。</p> <p>斎藤統客員教授の講義をはじめとして、世界のファッション情報の収集や分析を通して、国際感覚を養う。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
(1) 交換留学生については、これまで通り希望があれば積極的に受け入れていく。	(1) S
(2) 本学が進める英語版ホームページの作成に協力する。	(2) B
(3) 教員は国際学会、海外研修等に積極的に参加する。	(3) A
(4) 海外研修後の報告会を参画し、学生が積極的に参加する場を作っていく。	(4) A
実施結果と次年度課題	総合達成度 (A)
<p>(1) 学校間協定が交わされパリのオートクチュール協会 服飾専門学校 Ecole de la Chambre Syndicale de la Couture Parisienne (サンディカ校) に、昨年に引き続き、2回目の開催となる「パリ・サンディカ海外研修」を8月に実施した。2・3年生12名が参加。実施に際し事前指導を徹底し、事後参加学生による報告会を行った。</p>	
次年度課題	
(1) 協定校（サンディカ校）との交流を積極的に推進し、プログラム等を検討して支援体制を整える。	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

(2) 教員の海外研修、学会発表、調査研究などは積極的に支援する。また、その成果を海外研修FDとして学類のFDなどで、教員に発表する機会を設ける。	
8 国際交流の推進	
8-8. 健康栄養学類 健康栄養学専修	
目標	
協定校との交流を積極的に推進する。留学希望の学生については、プログラム等を検討して支援体制を整える。その他海外との交流について可能性を探る。	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
(1) カナダブレシア女子大学の研修生受け入れ (2018年2月)。	(1) A
(2) カナダブレシア女子大学へ短期留学生派遣 (2018年3月)。派遣に関しては事前、事後指導を徹底する。	(2) A
実施結果と次年度課題	総合達成度 (A)
<p>協定校への派遣、受入を実施し、評価した。</p> <p>(1) カナダブレシア大学研修生9名受け入れ (2018年2月16日～2月25日)。引率の教員2名来日。</p> <p>(2) カナダブレシア大学短期留学生6名派遣予定 (2018年3月17日～3月30日)。</p> <p>1) 学生派遣については、3年生対象の10月は希望者が6名あり、GPA等を考慮し6名を決定した。引率は行き帰りの送迎を分担して2名。</p> <p>2) 事前指導を複数回にわたって実施し個別にも対応した。研修後課題提出及び報告会を開催予定。</p> <p>次年度は、研修生受け入れ、派遣体制を更に整え、研修プログラムの充実を目指す。その他の国際交流の機会を考えていく。</p>	
8 国際交流の推進	
8-9. 家政福祉学類 家政福祉学専修	
目標	
グローバル化が進む今日、学生の国際的な視野を広げるために必要な支援を行い、併せて教員の国際交流や国際学会での発表、調査研究等の活性化をはかる。	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
(1) 学生の短期・長期留学や研修について情報提供し、支援を行う。	(1) C
(2) 大学のプログラム等による交換留学生の受け入れなどを行い、外国人学生との交流の機会を増やす。	(2) C
(3) 学類の教員が、海外研修や海外調査を行うと共に、国際学会や国際シンポジウムにも参加して、国際交流に努める。	(3) A
実施結果と次年度課題	総合達成度 (B)
<p>(1) 該当する学生はいなかった。留学や研修のための支援態勢はできているので、次年度に希望者がいれば積極的に対応をしていく。</p> <p>(2) 該当する学生はいなかった。留学生の受け入れの態勢は常にできているので、次年度に希望者がいれば積極的に対応をしていく。</p> <p>(3) 2名の教員が海外での調査研究を行い、1名が海外での講演、セミナーを開催し、研究を通して積極的に海外の大学教員と交流した。次年度も引き続き教</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

員の調査研究、学会発表、海外研修などは積極的に支援していく。	
8 国際交流の推進	
8-10. 大学院：人文科学研究科 英語文学専攻 日本文学専攻	
目標	
1. 英語文学専攻 教員各人が国内外の研究者との共同研究の可能性を探ると同時に、大学院生が国内外の大学との単位互換、ないしは、短期または長期留学に意欲的に取り組めるような環境を整える。	
2. 日本文学専攻 アジアを中心とした国際シンポジウムを開催し、国際交流をはかる。	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
1. 英語文学専攻 (1) 国内外の研究者を招いて学術講演会を開催し、各人の専門分野および隣接分野の学術的動向の把握と情報交換を行う。 (2) 本学大学院生が聴講可能な国内外（海外は協定校）の短期・長期プログラムや、参加する際の単位互換等について検討する。	1. (1) A (2) B
2. 日本文学専攻 2013 年度に和洋女子大学において、和洋女子大学と台湾淡江大学とが共同開催した国際シンポジウムに引き続き、研究者交流の一環として大学院生を交えての国際シンポジウムを開催する環境作りにつとめる。	2. C
実施結果と次年度課題	総合達成度 1. 英文専攻 (A) 2. 日文専攻 (C)
1. 英語文学専攻 (1) 今年度は学術講演会を日本文学専攻と共同開催した。国際的に活躍するには、日本についての造詣を深める必要がある。今後も同様の機会を持つよう努力したい。また、海外の研究者を招聘するには、学内予算縮小が続くため経済的に難しい。外部資金の獲得に力を入れていく必要がある。 (2) 学部には海外大学の協定校はあるので、大学院生の参加も推進可能である。しかし、今までの在校生は国内外の留学に消極的である。主な原因は、経済的なものと英語力と思われるが、更なる原因究明と対策が今後の課題である。	
2. 日本文学専攻 (1) 本年度は成果が得られなかった。なお台湾淡江大学との協定は本年度をもって取りやめることになった。 (2) 和洋女子大学開催の国際シンポジウムにつとめる。	
8 国際交流の推進	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

8-11. 大学院：総合生活研究科 総合生活専攻 博士前期課程 博士後期課程		
目標		
教員及び大学院生の国際学会発表、教員レベルでの海外の研究機関や研究者との交流を行い、そのための基礎作りを行う。		
年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）	
<p>(1) 大学院生が国際学会で発表できる力量をつけるための English Academic Presentation 講義を充実させる。</p> <p>(2) 国際交流実績が可能となる、研究科内の研究組織改革に着手し、システムを検討する。</p> <p>但し、今年度は海外研究科都度に対する学内予算が削減されていることもあり、基本的には各教員が獲得した研究資金を使った活動が基本とならざるを得ない状況である。研究科としては、教員個人による国際交流を教授会やFDを通じて共有化して行くことで、緊縮予算から通常予算に復帰した場合の基盤作りに重点を置く。</p>	<p>(1) S</p> <p>(2) S</p>	
実施結果と次年度課題	総合達成度	前期（ S ） 後期（ S ）
<p>実施結果</p> <p>実施結果</p> <p>モンゴル国籍の留学生が母国に戻り大学院に進学後、日本で短期間の研究活動を行いたいとのオファーがあり、国際交流センター、教務課とも連携し、学内諸規程を整備した上で、先方の希望である次年度4月からの受け入れ態勢を整えることが出来た。研究活動を通じた海外との連携の出発点になることが期待される。</p> <p>次年度課題</p> <p>今回の大学院留学生の受け入れが成功裏に行われるよう、大学院全体としてのサポート体制を敷く。</p>		
8 国際交流の推進		
8-12. 国際交流センター		
目標		
<p>グローバル時代にあわせた人材育成のため、学生の国際交流をより活性化させ、語学だけでなく国際感覚をも身につけさせることを最大の目標とする。その目標のため次の具体的目標を定める。</p> <p>(1) 学生に海外留学や海外研修への参加の機会を十分に提供する。</p> <p>(2) 海外留学・研修に備えた学内での語学プログラムを実施する。</p> <p>(3) 国際交流のための外部資金の獲得および学生に外部資金獲得のための情報提供を行う。</p> <p>(4) 海外への派遣だけでなく短期も含めた受け入れのプログラムづくりを行う。</p> <p>(5) 地域の組織や団体とも協力して地域の国際交流のプログラムに関与する。</p>		

和洋女子大学 2017年度目標と計画

年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）
<p>(1) 夏期および春期休業期間に海外への短期研修プログラム（1～4週間程度）を実施する。また同時に認定留学や交換留学を含む長期留学（半年～1年程度）への参加を促す。</p> <p>(2) 「English Conversation Café（英会話カフェ）」を学期中、定期的・継続的に行い、学生に英会話学習の機会を提供する。また、海外派遣プログラムに参加予定の学生には、このカフェに極力参加して、事前に準備しておくように促す。</p> <p>(3) 日本学生支援機構や文部科学省などが募集する国際交流のための外部資金の獲得を目指す。また学生が個人で応募する各種奨学金などの情報提供と獲得支援を行う。</p> <p>(4) 長期での外来留学生受け入れが低迷しているため、短期プログラムでの受け入れも含めて、今後、実施可能なプログラムの策定を行う。</p> <p>(5) 市川市国際交流協会の賛助会員資格を継続し、同協会が行う各種プログラムへの本学および本学学生の協力を促進する。</p>	<p>(1) S</p> <p>(2) A</p> <p>(3) A</p> <p>(4) B</p> <p>(5) S</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度（ A ）
<p>(1) 夏期および春期休業期間に海外への短期研修プログラム（1～4週間程度）については海外語学研修として夏期休業中にアメリカ、オーストラリアに派遣し無事に終了した。春季休業中のニュージーランドは、現在研修中であり現在のところ問題なく進んでいる。認定留学も5名（前年比1名増）派遣し交換留学も継続派遣した。</p> <p>(2) 海外文化研修として韓国研修を新規プログラムとして今年度より追加し、8月に実施した。このプログラムには14名の本学学生が参加した（ただし「海外文化研修」として履修登録した学生以外も含まれる）。</p> <p>(3) 今年度、横浜国立大学、フェリス女学院大学とのコンソーシアムとして、日本学生支援機構の補助金（協定校派遣）プログラムとして採用されたフィリピン研修（マニラおよびタクロバン、協定受け入れ校はサントトマス大学）は、本学から2名の参加者を得て2月21日から3月3日の日程で行われた。このうち1名が日本学生支援機構の補助金を受けての参加となった。</p> <p>(4) 英会話カフェは、前期に合計16回開催され、のべ81名、後期には合計21回実施し、のべ66名の学生が参加した。海外研修プログラムに参加予定の学生を中心に参加者があった。次年度は、本プログラムをより活性化するため全学教育センターの所管としラーニングステーションで開催している「わよらカフェ」の中で運営することになった。</p> <p>(5) 日本学生支援機構の平成30年海外留学支援制度を活用すべく、国際学類から「海外セミナー」を申請するも採択されなかった。他方、横浜国立大学・フェリス女子学院大学とのコンソーシアムでのフィリピン研修は来年度も採択され、2月に実施する予定である。</p> <p>(6) 海外留学生受け入れにおいては、短期プログラムとして昨年度に続きブレスシア大学の学生が来校した。今年度のプログラムは、栄養学専攻の学生のみならず、社会科学系の学生も参加可能となり、昨年度より多くの学生が参加した。内容も、本学健康栄養学類の授業を中心としたものから、日本の伝統文化や現代文化を体験するプログラムが豊富に追加された。なお、安価で質の保障ができる宿泊先の確保が課題であったが適切な宿泊先を見つけることができた。これらプログラ</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>ムの内容もアコモデーションの問題も、ホスト役となった健康栄養学類のスタッフの助力を得て適切に解決され、結果、ブレンシア大学の教員・学生に好評を得ることができた。</p> <p>(7) 市川市国際交流協会の賛助会員資格は本年度も継続し協力関係を確認した。また、今年度より、地域連携センターの助力を得て、国際交流協会の実施している日本語教室に学生をボランティアとして派遣した。また、国際学類の学生による学園祭の展示企画では、イスラム文化の説明のアドバイスや展示物の提供を受けるなどの協会の協力を受けて、共同企画が実施された。</p>	
9 社会・地域連携の推進	
9-1. 人文学群	
目標	
<p>教員の個人的活動の面では、中央政府・地方自治体の各種審議会に積極的にに関わり、市民向けの各種講座を積極的に担当し、そして地域との各種奉仕型の連携、企業・自治体等との研究型の連携活動等に積極的に参加する。一方、学生指導の面では、地域関連プロジェクト・イベント等に学生を積極的に参加させ、学生にクラブ活動、ボランティア活動等を通して地域と積極的に関わるよう指導する。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
(1) 国際交流センターとの連携によって近隣自治体・地域国際交流団体の活動に参加し、当該地域居住の外国人との交流を行う。	(1) B
(2) 「子育て支援制度」関連で地域行政と連携を強化する。	(2) S
(3) 市民向け各種講座に積極的に協力する。	(3) S
(4) 心理学関連学生ボランティア活動を進める。	(4) A
(5) 学内学会の講演会を市民に開放する。	(5) C
(6) 競書大会・競書講習への市民参加を呼びかける。	(6) S
(7) 自治体の審議会や行政活動等に、必要に応じて教員・学生が参加・支援する。	(7) S
実施結果と次年度課題	総合達成度 (A)
<p>総じて年度計画にそって十分な活動を行った。次年度も本年度と同様の活動内容を計画するのが適当だと思われる。</p>	
9 社会・地域連携の推進	
9-2. 国際学類 英語文化コミュニケーション専修 国際社会専修	
目標	
<p>近隣自治体の国際交流部署や地域の国際交流団体の主催するイベントに積極的にに関わり、当該地域在住の外国人との交流を図り、同時に、国際学類で主催する講演会などのイベントへの市民参加を促し、地域のグローバル化推進を図る。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)

和洋女子大学 2017年度目標と計画

(1) 近隣自治体の国際交流部署との連携の在り方について検討する。	(1) B
(2) 近隣地域の国際交流関連団体、各種 NPO と連携して、当該地域在住外国人との交流を深める。	(2) C
(3) 学類・専修主催講演会等のイベントへの地域住民参加を促す。	(3) C
実施結果と次年度課題	総合達成度 (C)
目標を十分に達成することができなかった。次年度は地方自治体のみならず地域の企業との連携も図っていく必要がある。	
9 社会・地域連携の推進	
9-3. 日本文学文化学類 日本文学専修 日本語表現専修 書道専修 文化芸術専修	
目標	
日本文学文化学類	
(1) 日本文学文化学会の活動を広報することに努めると同時に、教員は公開講座や市川市民アカデミーなどに積極的に関与する。書道の競書大会や夏季書道講習に関しても、より広範な広報を行う。	
(2) 地域の催しへの学生の積極的な参加を促す。市川市のイベントポスター作成や書に関するイベントなどにも取り組ませる。	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
日本文学文化学類	
(1) 日本文学文化学会が主催する研究会や講演会を公開のものとし、その宣伝・普及活動を積極的に行う。	(1) S
(2) 公開講座や市川市民アカデミーなどにおいて、複数の教員が講師を務める。	(2) S
(3) 書道の競書大会や夏季書道講習を充実させ、多くの参加者が集まるよう広報に努める。	(3) S
(4) 市川市・成田市などでの書のデモンストレーション、市川市のイベントにおけるポスターの作成など、学生にも地域のイベントへ積極的に参加するように促す。	(4) S
実施結果と次年度課題	総合達成度 (S)
社会や地域とともにある大学ということが、学類の中にも浸透してきている。学生にもその意識をもたせるところまでは至っておらず、そこに課題がある。	
9 社会・地域連携の推進	
9-4. 心理学類 心理学専修	
目標	
心理学類・心理学専修が有する人的・物的資源を活用することで、市川市をはじめとした地域社会との連携を推進し、人材育成や地域の活性化に貢献することを目標とする。具体的には、地域への学習機会の提供および学生による地域貢献を主な目標とする。	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)

和洋女子大学 2017年度目標と計画

(1) 大学の公開講座およびいちかわ市民アカデミー講座に協力して講座を開催する。	(1) S
(2) ユーカリが丘イオンにて、心理学類の出張オープンキャンパスを実施する。	(2) S
(3) 複数の高校にて出張講義を行うことで高大連携を進める。	(3) A
(4) 新入生サポーター、心理学新入生セミナーでのサポーター、オープンキャンパス、心理チャリティバザー、学生広報スタッフなど心理学類内での学生ボランティア活動を促進する。	(4) S
(5) 心理学の専門性が生かせる地域の保育園、小中学校、福祉施設等におけるボランティア活動に関する情報を収集し、希望する学生をボランティアとして派遣することで、学生による地域貢献を推進する。	(5) A
(6) 教員自身が、地域連携の意識を高め、自己の研究的・社会的リソースをいかし、社会・地域連携に貢献する。	(6) S
(7) 大学内外の教員免許更新講習に協力する。	(7) S
実施結果と次年度課題	総合達成度 (S)
<p>「(7) 社会人教育体制の構築」にも記載のとおり、公開講座(4件)を行った。また、ユーカリが丘イオンでの出張オープンキャンパスを実施、免許状更新講習への協力等、地域連携を推進した。教員自身のリソースを活かして、社会・地域連携に貢献することは十分に達成できたといえる。学類内での学生によるボランティア活動は積極的に推進した一方で、学類外で地域と連携してのボランティア活動の働きかけを行ったものの、積極的な参加は少数にとどまった。ひきつづき近隣のボランティア活動情報を提供し、学生による地域貢献を推進することが次年度の課題である。しかし、心理学類では地域連携への意識は総じて高く、総合達成度はSとした。</p> <p>次年度課題</p> <p>引き続き近隣のボランティア活動情報を提供し、教員のみならず学生による地域貢献を推進することが次年度の課題である。</p>	
9 社会・地域連携の推進	
9-5. こども発達学類 こども発達学専修	
目標	
「次世代の学校—地域創生プラン」に則り、地域の行政等とも連携し、研修や審議会、委員会等にもかかわり、地域のニーズの把握や子育て支援への貢献を考える。	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
(1) 公開講座、市民アカデミーに講座を持ち講師を務める。	(1) S
(2) 市川市との連携により、幼小接続や学校インターンシップなど新しい施策に応じた社会・地域連携の検討を始める。	(2) S
(3) 文部科学省、厚生労働省、千葉県、近隣市区町村と連携し、審議会委員や研修講師を務める。	(3) S
実施結果と次年度課題	総合達成度 (S)
各講座の講師、園内研の研修講師の他、市川市公立保育所の研究保育の支援などの連携を開始した。実習時などに大学の窓口として依頼を受けることも多く、次	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

年度は、学類（学科）内だけではなく、学内での効率的な情報共有や連携が課題である。	
9 社会・地域連携の推進	
9-6. 家政学群	
目標	
<p>社会・地域連携のプログラムを推進し、参加学生の増員を目指すことで学生の実践力を高め、教育の質的効果を上げる。</p> <p>家政学群共通科目「地域生活創造演習」における地域活動・地域貢献を充実させる。</p> <p>教育振興支援プロジェクト「家政学群学生の『和洋ショップ経営』プロジェクト」を実現させる。</p>	
年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）
<p>(1) 下記の地域貢献プログラムへの学生の参加を喚起し、地域と連携した学生の自主的な学びを促す。 東武デパートのレストランのメニュー開発、その他食物関連活動。やわたマルシェへの布小物の出品、防災減災女性リーダーの養成、家政学群共通科目「地域生活創造演習」による、市川特産品を用いた料開発。</p> <p>(2) 市民祭り、ラグビーフェスティバル、ツーデーマーチイベント、調理教室などの市内イベントでの食育活動。</p> <p>(3) 教育振興支援プロジェクトで実施する和洋ショップ経営（学生企画の製品の製作販売）。</p> <p>(4) 地域連携の成果を学群単位でまとめることに加え、学生への教育効果の検証を行う。</p>	<p>(1) A</p> <p>(2) A</p> <p>(3) S</p> <p>(4) C</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度（ A ）
<p>(1) 計画課題はすべて実施することができた。3学類の報告に詳細が明記されている。</p> <p>(2) 食育活動は、健康栄養学類を中心に実践栄養関連教員を中心に勢力的に進めることができた。</p> <p>(3) 2年目にあたる和洋ショップでは、昨年運営・学生教育の反省に基づき実施することができた。</p> <p>(4) 成果のまとめを実施および、学生への教育効果の検証を実施することはできなかった。</p>	
次年度の課題	
社会・地域連携の推進は充分に行われているが、大学教育としての効果の検証を学部として実施していく。	
9 社会・地域連携の推進	
9-7. 服飾造形学類 服飾造形学専修	
目標	
地域社会との連携の重要性を教育の一環と捉え、様々な地域連携事業を学生とともに推進する。	
年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>(1) 1年生前期の授業「地域生活創造演習」とリンクした形態で、いちかわ手づくり市実行委員会や作家の方々と学生がふれあいやコミュニケーションしながら、地域の課題を考えるとともに地域の方々と協働する。</p> <p>(2) 市川市をはじめ栄レース(株)企画コンテストや「マタニティサッシュベルト」デザインコンテスト等への学生指導、作品化に向けての共同事業に、学生を巻き込みながら継続発展させる。</p> <p>(3) 企業との共同研究を推進すると同時に学生を参画させ、学生に大学の社会的貢献を学ばせる。</p>	<p>(1) S</p> <p>(2) S</p> <p>(3) S</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (S)</p>
<p>(1) 授業とリンクした形態で、地域の方々と学生がコミュニケーションしながら、地域の課題を考えるとともに地域の方々と協働し、地域との連携を深めることが出来た。</p> <p>(2) 今年で9回目を迎えた栄レース(株)企画コンテストのデザインコンテスト応募に際しての学生指導、株式会社あーす企画との第2回「マタニティサッシュベルト」デザインコンテスト応募及び2次審査作品の作品作りへの学生指導を行い、学生を巻き込みながら共同事業を発展させることができた。</p> <p>(3) 地域や企業からのコラボ研究や開発プログラムに、教員のみならず学生参加も含めて積極的にに関わり、学生に大学の社会的貢献を学ぶ場の具体的な構築をしていく。</p> <p>(4) ユーカリが丘イオンタウンにおける学類紹介、市川シャポーにおける和洋ショップの企画・制作・販売等、学生の参加を促しながら教員も積極的に関わった。</p>	
<p>9 社会・地域連携の推進</p>	
<p>9-8. 健康栄養学類 健康栄養学専修</p>	
<p>目標</p>	
<p>社会貢献・地域連携のプログラムを健康栄養学類の特色に合わせて企画・推進し、学生の実践的活動の場としても展開する。</p>	
<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度 (S, A, B, C)</p>
<p>(1) 市川市健康都市推進講座の企画、講師選定を行い、市民の人材育成に寄与する。</p> <p>(2) 学生参加の産学官連携活動として、地域と連携した健康づくり活動や産学連携のレシピ開発など、学外における授業以外の実践活動を通して、栄養士・管理栄養士としての職務を理解する(連携先：関東農政局、千葉県安全農業推進課、市川市経済部、市川市保健部、市川市文化スポーツ部、八千代市、東武百貨店、山崎製パン、ボーソー油脂、タイヘイ、ホリカフーズ、キッコーマン、ヤクルト販売等)。企画数、参加者数は昨年度と同程度を維持する。</p>	<p>(1) S</p> <p>(2) S</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (S)</p>
<p>社会貢献・地域連携の活動を学生を交えて実践・展開した。</p> <p>(1) 市川市健康都市推進講座の企画、実施をした。2017年8月26日～10月28日の期間で7回講座を展開した。</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

(2) 産学官連携活動として、地域や企業等と連携した健康づくり活動やレシピ開発などに学生が積極的に参加し活動した。

次年度課題

地域連携センター、研究支援課、広報・入試センター（広報）との連携を図り、事務部門、教員、学生の役割を明確にし、教育効果（実践参加によるメリット）が得られるプログラムを選択できるようにする。

9 社会・地域連携の推進

9-9. 家政福祉学類 家政福祉学専修

目標

教員は教育・研究力量を向上させると共に、社会や地域への貢献を果たす。専門性を活かし、市川市やその他の地域の企業やNPO ボランティア団体および社会福祉施設のボランティア募集の積極的な受け入れを行い、学生への周知と参加を促し、地域社会とのつながりを深める。

年度計画：活動内容

達成度（S, A, B, C）

(1) 市川市や千葉県および県下の自治体との連携を図り、審議会等の委員、研究調査委員や講座等の講師として3分の1以上の教員が行政サービスへの支援・参加を行う。

(1) A

(2) 地域や企業からのコラボ研究や開発プログラムに、教員のみならず学生参加も含めて積極的に関わり、学類として1つ以上具体的な成果を得る。

(2) A

(3) 地域社会の人々、組織・団体、施設等とのさまざまな交流をし、地域社会とのつながりをつくる。

(3) A

実施結果と次年度課題

総合達成度（ A ）

市川市を中心とする審議会等の委員や行政サービスの支援、学会の役員等に教員の半数近くが携わった。地域や企業とのコラボ企画においては、ユーカリが丘イオンタウンにおける学類紹介およびお茶の淹れ方講座、いちかわ産フェスタにおける学生参加、浦安市役所におけるお弁当販売のレシピ開発、市川シャポーにおける和洋ショップの企画、制作、販売等、学生の参加を促しながら教員も積極的に関わった。

9 社会・地域連携の推進

9-10. 大学院：人文科学研究科 英語文学専攻 日本文学専攻

目標

1. 英語文学専攻

地域連携センターと連携し、外部からの要請に積極的に協力する。学外の一般市民の参加者を対象とする市川市民講座、和洋女子大学公開講座に積極的に協力する。

2. 日本文学専攻

(1) 市川市文学プラザの主催する事業活動として、2007年より市川市に在住した近現代作家の地域と文学とのかかわりをテーマにした冊子作りの計画が立ち上が

和洋女子大学 2017年度目標と計画

り、日本文学研究室に調査協力の要請があった。その際、日本文学専攻の大学院生及び修了生の多くが参加協力した結果、2012年に「市川市の文学 詩歌編」を上梓することができたが、でき得れば今後もこのような事業に参加協力していきたい。	
(2) 地域連携センターと連携し、地域での活動に協力する。	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
1. 英語文学専攻 (1) 市川市民講座、和洋女子大学公開講座の講師を引き受ける。 (2) 英語学と英文学の分野で、講座・講演会講師以外にどのような社会貢献が可能かを検討する。 2. 日本文学専攻 地域連携センターと連携し、地域での活動に協力する。	1. (1) S (2) B 2. C
実施結果と次年度課題	総合達成度 1. 英文専攻 (B) 2. 日文専攻 (C)
1. 英語文学専攻 市川市との連携は今後の大きな課題の1つである。 1. 日本文学専攻 (1) 本年度は十分な成果が得られなかった。 (2) 市川市「文学ミュージアム」事業にかかわる市川市文化振興課との連携協力を継続していく。	
9 社会・地域連携の推進	
9-11. 大学院：総合生活研究科 総合生活専攻 博士前期課程 博士後期課程	
目標	
社会人の学び直し、生涯学習の拠点としての大学院の位置づけを地域社会に発信する。管理栄養士、家庭科教員といった資格系社会人の学び直し拠点を目指し研究科内の組織改革に着手する。	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
(1) 社会人入学生の増加を図る。 (2) 地域講演会等での所属を研究科であることを明示し、地域住民に生涯学習の場であることをアピールする。 (3) 大学院 OB, OG のネットワーク (情報共有) システムの樹立を目指す。	(1) S (2) A (3) S
実施結果と次年度課題	総合達成度 前期 (S) 後期 (S)
実施結果	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

受験者ベースであるが、博士前期課程1名、博士後期課程2名を社会人学生として確保した。

次年度課題

博士後期課程については、「(管理栄養士)鈴木和枝奨学期」の導入を定員増につなげる活動を行って行く。

9 社会・地域連携の推進

9-12. 地域連携センター

目標

産官学、市川市及び諸団体、併設校、むら竹会と連携し、和洋女子大学の知的資産を地域・社会に還元する。また、学生の地域・社会貢献としての活動の場、学びの機会を提供し、キャリア形成を行う。

年度計画：活動内容

達成度 (S, A, B, C)

- | | |
|--|-------|
| (1) 地域・社会からの要請に応え、和洋女子大学の広報と学生の学びの場づくりに寄与できるよう体制を強化する。 | (1) S |
| (2) 包括協定に基づく市川市との連携、協力を行う。 | (2) S |
| (3) イオンタウンユーカリが丘とのコラボ事業を通し、和洋女子大学（和洋国府台女子中学高等学校を含む）が持っている様々な知的・技術的財産を地域貢献・社会貢献として提供し、学生の人材育成、受験生獲得のための広報の場とする。 | (3) A |
| (4) 国府台地域の和洋国府台女子中学校高等学校との事業連携を積極的に実施する。 | (4) A |
| (5) 国府台の千葉商科大学、その他の諸学校や機関と連携し、地域の諸課題と活性化に対応する（市川市・国府台地域の防災、専菜池の貴重な自然環境の保全等）。 | (5) A |
| (6) 市川市以外の自治体との連携、地域の諸団体—NPO法人、市川市国際交流協会、市川青年会議所、及び企業等との連携を図り、様々な場面で学生が活躍できる場を提供する。 | (6) S |
| (7) むら竹会和洋女子大学同窓会と連携し、卒業生が社会・地域貢献に参画することにより、和洋女子大学の認知度アップ、学生の人材育成、入学者の確保を目指す。 | (7) A |

実施結果と次年度課題

総合達成度 (A)

実施結果

- (1) 1名職員を増員し、木内ギャラリー展示、イオンタウンユーカリが丘とのコラボ、地域のイベント等の事前準備、当日運営に対応した。
- (2) 今年度は新規事業が数件あり、市川市と密に連携を取り実施できるよう協力した。
- (3) イオンタウンユーカリが丘とのコラボ事業では、展示、ワークショップ、和洋国府台女子中学高等学校は理科教室を2箇所で開催するなど様々な知的・技術的財産を提供、学生サークル3団体が参加して地域貢献・社会貢献を行った。他に受験生獲得のために、大学、中高で入試説明会を開催。
- (4) 8月に和洋国府台女子中学校・高等学校の生徒を対象に、夏期講座全9講座を大学の施設を使って開催し、延べ58名の学生が参加した。

和洋女子大学 2017年度目標と計画

- (5) 和洋国府台女子中学・高等学校、千葉商科大学、同付属高等学校、市川市、蓴菜池にジュンサイを残そう市民の会をメンバーとする「じゅん菜池プロジェクト会議」を隔月、本学で開催し、じゅん菜池の生物と自然環境の保全について検討を行っている。また、12月には国府台コンソーシアムが設立され、国府台地域の防災については今後検討される予定である。
- (6) NPO法人市川ユネスコ協会、千葉県立船橋県民の森のイベントに学生が参加した。他に市と市川市国際交流協会が協定を結んで実施している「市川市日本語ボランティア教室」のアシスタントとして協力を行った。
- (7) 公開講座の講師として卒業生が協力。イオンタウンユーカーが丘とのコラボ事業ではむら竹会同窓会が展示を行い、和洋女子大学の認知度アップに協力。

次年度課題

- (1) イオンタウンユーカーが丘とのコラボ事業では、相手が商業施設ということもあって様々な行き違いもあったが、今年度の問題点を踏まえイオンタウンの担当者と密に連携を取り、必要な情報提供を行う。和洋女子大学の認知度をさらに上げ、入学者確保のために効果的な広報が必要である。
- (2) 9月に地域連携協議会が設置され、補助金獲得のために今年度中に協議会を開催する必要がある、2月に開催した。次年度は、有意義な会議となるよう日程調整、内容の検討、事前準備を十分に行う。

10 教員自身の資質の向上

10-1. 人文学群

目標

人文学群では教育活動の面では、社会環境の急激な変化及び学生の多様化などによる教授法の不断の改善の必要性について教員の間で認識を共有するとともに、関連FDへの積極的な参加を図っていく。また、研究活動の面では、国内外の研究活動に積極的に参加し、その成果を教育に反映させるべく最大限努力していく。

年度計画：活動内容

- (1) 学類でのFDを通して教育指導面での課題を共有し、その解決に向けて協力して取り組む。
- (2) オムニバス科目や特定の科目等を通して、学類のFD等において教授法について課題を共有する。
- (3) 高大接続に向け中等教育の現状について学群教員間で情報を共有する。
- (4) 学外FD参加者による情報提供を学群教授会などにおいて積極的に行う。
- (5) 社会的評価を高めるべく各種活動（主立った書法展への出展または出品等）に積極的に参加する。

達成度（S, A, B, C）

- (1) A
(2) A
(3) C
(4) C
(5) S

実施結果と次年度課題

総じて活動内容について実施したが、(3) および (4) は、十分ではなかったので次年度の主たる課題となる。

総合達成度（ A ）

10 教員自身の資質の向上

10-2. 国際学類 英語文化コミュニケーション専修 国際社会専修

目標

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>1. 英語文化コミュニケーション専修</p> <p>教育の質の変化を各教員は自覚し、それぞれの情報を共有し、知恵を出し合いながら今後の教育について検討する。グローバル社会における英語教育と国際教養教育について大学では何が求められているかを十分に討論し、新たな教育内容と方法について検討する。研究面では、各自の分野で積極的に研究活動を行い、学術論文として成果を発表する。</p> <p>2. 国際社会専修</p> <p>複数の学問分野からなる専修カリキュラムの実質的な体系化を目指して、各教員は日頃授業の内容、技法などについて情報交換を行い、教育効果を高めていくなかで、複合専修に適した教育の方法を模索し、経験を蓄積していく。また、研究の面では、積極的に国内外の研究活動に参加し、学術論文を執筆するなどして、研究レベルを高めていく。</p>	
<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度 (S, A, B, C)</p>
<p>1. 英語文化コミュニケーション専修</p> <p>(1) 学内外の各種FDへの参加を推進し、急速に変化しつつある初等・中等教育における英語教育と国際教養教育の現状と今後について情報共有する。</p> <p>(2) 学会発表、学術書の出版、紀要や英文学会誌、その他の学術誌への投稿などによる研究成果の公表を促進する。</p> <p>2. 国際社会専修</p> <p>(1) 教育活動に関しては、特に専修の全教員で担当するオムニバス形式の専門科目や佐倉セミナーでの講演等を利用し、教員相互に教育内容・技法の検討を行い、その向上をめざす。</p> <p>(2) 研究活動に関しては、各教員が各々の研究を進めるとともに、論文の執筆・投稿や学会報告等を通し、研究成果の発表を行うことをめざす。また各々の教員が学内外での研究活動にも取り組めるよう、教員間で協力し、可能な限り、担当する校務の質・量のバランスを図る。</p>	<p>1.</p> <p>(1) B</p> <p>(2) A</p> <p>2.</p> <p>(1) A</p> <p>(2) A</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (A)</p>
<p>学内FDへの参加は概ねなされ、研究成果の公表も例年と同程度行われ、概ね目標が達成された。英語文化コミュニケーション専修では初等・中等教育における英語教育と国際教養教育の現状および今後について、個別の教員による情報収集はなされたが、専修全体での共有はできなかった。次年度は新しい学部設立に向け共同研究を進めるかたちで資質の向上を図っていきたい。</p>	
<p>10 教員自身の資質の向上</p>	
<p>10-3. 日本文学文化学類 日本文学専修 日本語表現専修 書道専修 文化芸術専修</p>	
<p>目標</p>	
<p>日本文学文化学類</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>(1) 学類FDを中心に、教員が教育や研究に関して自由に話し合える機会を設定し、学生の教育・指導や研究に関して各教員が抱える課題の共有化を図る。</p> <p>(2) 各専門分野はもちろんのこと、周辺領域にも目を向けつつ幅広い知識や技能を常に吸収すると同時に、それを具体的かつわかりやすい形で学生に提供できるよう、研鑽に努める。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
<p>日本文学文化学類</p> <p>(1) 学類FDやそれに準じる話し合いを1年に何度か開催し、教育・研究に関する課題の共有化を図る。</p> <p>(2) 学内外の学会や学会誌などで研究成果を発表するように努め、書道や美術では展覧会などへの出品に努める。</p> <p>(3) 授業の内容や方法について自由に話し合える雰囲気や学類内に作り、授業を展開する力の向上のために智恵を集める。</p> <p>(4) 教員相互に関心事を話し合う場を設定し、そのようにして共有された知識や技能などを、研究会などを使ってそれを学生にも伝達する。</p>	<p>(1) A</p> <p>(2) A</p> <p>(3) B</p> <p>(4) A</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度 (A)
<p>各教員は教育と研究の質を高めるべく、よく努力している。教員相互が啓発し合うという点も、FDや研究会を通じて、達成されつつある。今後は、授業の公開を含め、教育に関してオープンに話し合う必要があり、その点ではまだ至らない部分がある。来年度以降、まずは授業の工夫について話し合う場を設定することから始めることにしたい。</p>	
10 教員自身の資質の向上	
10-4. 心理学類 心理学専修	
目標	
<p>多様化する学生状況への対応ならびに社会からの要請に応えるために、知識や技能の教授を行う教員自身も不断に学び続ける努力が必要である。教員自身の専門性と指導能力を高めるため、学類FDの企画・運営や学内FDおよび学外研修への積極的な参加により教育実践を吟味し、教育力の向上に努める。パワーハラスメント・セクシャルハラスメント等の防止と迅速な対応を徹底する。そのために、学生と教員の人格と人権を守り、豊かな教育活動が展開されるよう方策を構築し、実践する。個々の教職員の研鑽に加え、相互の研鑽が求められる。2017年度は新学類発足後4年目となり、完成年度を迎え、学年進行に伴い新規の校務とその複雑化が予想されるため、各教員が担当する校務負担のバランスと情報の透明化を図る。</p>	
年度計画：活動内容	達成度 (S, A, B, C)
<p>(1) 学内FDに加え、各教員が所属する学会・研究会・研修会等に積極的に参加し、教育力の向上を目指す。そのために、学類FDや学類会議などを通して、各教員の学会・研究会等の参加や研究に関する情報交換の場を設定する。</p> <p>(2) 学類FDを積極的に開催・運営し、学類の教育の活性化と吟味を通して、各教員の教育力の向上を目指す。</p> <p>(3) 各教員による授業内容の共有と学生による授業評価を実施し、教育実践の吟味と改善に活用する。</p>	<p>(1) B</p> <p>(2) A</p> <p>(3) A</p>

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>(4) 学生からの相談事には積極的に耳を傾け、関係部署と連携しながら対応する。</p> <p>(5) ハラスメントの防止を目指し、学類内での「倫理綱領 (ガイドライン)」を検討する。</p>	<p>(4) A</p> <p>(5) B</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (B)</p>
<p>(1) 学類 FD への教員の参加により、授業や教育の共有は行われたが、各教員の研究に関する情報共有の場は十分とは言えなかった。</p> <p>(2) 学類 FD を 2 回行い、心理学類のカリキュラムや授業内容について検討を行い、教育の活性化と吟味を通して、各教員の教育力が向上した。</p> <p>(3) 学類会議や FD をとおして授業内容を共有し、大学主催の授業評価などとおして、教育実践の吟味と向上に活用した。</p> <p>(4) 授業内容や卒業研究、進路などの学生の悩み事に対しては、オフィスや担任が中心となって、US 室や教務課などの関係部署と連携し対応を行った。</p> <p>(5) 学類一丸となってハラスメントの防止を目指したが、学生と教員との齟齬が見られるケースもあった。学類内での「倫理綱領 (ガイドライン)」については、着手はしたものの立案にまで至らなかった。</p>	
<p>次年度課題</p> <p>学類会議や学類 FD への参加はもとより、学外での学会・研究会などとおした研修による各教員の教育力の向上ならびに研鑽が次年度の課題である。そのためにも、各教員の意識的・自覚的な研鑽ならびに組織的な研鑽が必要である。後者に関わって学類内での「倫理綱領 (ガイドライン)」の策定が急務である。</p>	
<p>10 教員自身の資質の向上</p>	
<p>10-5. こども発達学類 こども発達学専修</p>	
<p>目標</p>	
<p>多様化する学生への対応、社会からの要請に応えるためにも知識や技能の教授を行う教員自身が不断に学び続ける努力が必要である。学類会議を中心に、学生の状況を共有しながら、教育内容や方法について協議し、各教員が協力して授業や課外活動を進めていく。教員間の授業公開、学びやすさに応じた時間割上の工夫も検討する。学生との関わりにおいては、学生の人権や人格を尊重し、学ぶ主体としての学生を育てるための教育のあり方を協働で探っていく。</p>	
<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度 (S, A, B, C)</p>
<p>(1) 学生との日常的なコミュニケーションを大切に、学生の相談に随時応じられるようにする。</p> <p>(2) 学類 FD をおこない、専門領域を活かしつつ各教員が学生と関わる授業内容の充実と連携を図る。</p> <p>(3) 1 年次からの演習や実習などで互いに協力して授業を行い、各自が振り返りをして授業力の向上を図る。</p> <p>(4) 他大学と研究上の連携を模索しながら、研究会等で最新の知見を得て、自身の教育・研究に活かす。</p> <p>(5) 各教員の学生への対応を共有し、ハラスメントの防止はもちろん、学生が学びやすい教育環境を構築する。</p>	<p>(1) A</p> <p>(2) S</p> <p>(3) S</p> <p>(4) S</p> <p>(5) S</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (S)</p>
<p>実習や就職に対し、真摯に学生からの相談に応じ対応してきた。学類 FD や複数教員が関わる実習関連授業を中心に、教員間も学び合うことができるよう意見交換をして、より各自の専門性・授業力を高めようとしている。学内だけではなく、各専門領域にかかわる研究会等でも、共同研究等を通じて各自研究を進めている。</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

次年度は、全教員が関わる年間6種類の学外（幼稚園・保育所・施設）実習中、定員超過学年（2・3年生）が4実習を行う。そのため、通常でのべ350人分の実習訪問が、のべ430人分に急増する。これまでの実習や学生の経緯を知らない新任教員が半数を占める中、今年度の質の維持・向上が課題である。

10 教員自身の資質の向上

10-6. 家政学群

目標

- (1) 学群FDの実施と大学FDの教員参加率の向上を目指す。
- (2) 教員の教員実践点検シートの記入により自らの教育、研究、校務について振り返り今後の活動計画を考える。
- (3) 2017年度に実施する学生授業評価の結果を総括し、自身の授業や学生指導に活かす。

年度計画：活動内容

達成度（S, A, B, C）

- (1) 家政学群教員が、大学FDに最低1回は参加するように学群で対応する。
- (2) 2016年より教員実践点検シートが、教育活動の振り返りを重点としたものになったため、年度ごとの研究業績や社会活動を振り返るための点検シートを検討し、教員が教育・研究活動双方の振り返り、計画ができるように努める。
- (3) 学生授業評価結果は、2016年より毎年の実施となった。しかし、20人以下の授業は授業評価から外され、授業評価を受けない教員も出てきたことは問題が残り、授業評価の方法の検討を行う。
- (4) 学生授業評価の結果から、シラバス、授業の方法や学生とのコミュニケーションなどについて自己点検する。

(1) B

(2) B

(3) S

(4) A

実施結果と次年度課題

総合達成度（ A ）

- (1) FD参加教員を100%にすることはできなかった。特に特任教員、次年度退職する教員の参加状況が悪かった。ただし90%の教員はFDに参加することが出来た。
- (2) 点検シートの検討において、研究活動の振り返りを織り込むことができなかった。
- (3) 学生授業評価の対象クラスサイズを20名以上から10名以上に変更することができた。
- (4) 学生授業評価の結果については、各教員が自己点検をし報告書をまとめることができた。

次年度の課題

FDのビデオ撮影等の検討によって、教員参加を促す方法を検討する。また、研究活動の振り返りの方法を大学でも検討する。

10 教員自身の資質の向上

10-7. 服飾造形学類 服飾造形学専修

目標

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>大学教員としての見識、品格を備えるとともに、教育者として最も重要である「教育する能力」の維持・向上に努める。我々学類の教員の教育力および能力が適切かどうか互いに評価するシステムを構築する。さらに、研究の実施と業績の確立を目指し、業績に具体的目標値を設定する。</p>	
年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）
<p>(1) 多様化する学生状況に対応したカリキュラムや新たに展開できる資格取得、服飾造形学類のあり方等の検討について、学類FDを企画・実施し、教員間での意見交換を行い、その過程および成果を記録する。</p> <p>(2) 外部の研修会、学会、研究会などに積極的に参加し、各教員が問題意識を持ち、その研究成果の発表を年度内に、教員全員が1回以上行い、研鑽に取り組む。</p> <p>(3) 各教員が外部から得た情報や刺激を、教育に活かすことを実践する。</p>	<p>(1) B</p> <p>(2) S</p> <p>(3) S</p>
実施結果と次年度課題	総合達成度（ A ）
<p>(1) 教育活動の面では、学類会議において、学生の動向と関連した教員各自の教育面での課題が出され、学生の理解度の把握や学生の主体的で積極的な参加を図り、授業に反映させるよう努めているが、教員の個人差が大きく、学類としての実践にはつながっていない。新たに展開できる資格取得、服飾造形学類のあり方等についても教員間での意見交換を行い、新カリキュラムにつなげるよう検討した。</p> <p>(2) 学内FD、各教員が所属する学会・研修会・研修会などに参加・発表し、研鑽に取り組んだ。</p> <p>(3) 教員は、授業評価結果を受けとめ、より良い授業の実施に努めた。</p>	
次年度の課題	
<p>(1) 社会環境の急激な変化及び学生の多様化などによる学生の関心や理解度に合わせた授業の改善の必要性について、具体的例を挙げながら、学類の全教員が共有し、研鑽する必要がある。</p> <p>(2) 教員の関連FDへの積極的な参加を図っていく。</p> <p>(3) 研究活動の面では、国内外の研究に積極的に参加し、その成果を教育に反映させるべく最大限努力していく。</p>	
10 教員自身の資質の向上	
10-8. 健康栄養学類 健康栄養学専修	
目標	
<p>研究活動の活性化、学生教育の充実を図るために、教員間の情報交換を活発に実施し、資質の向上を目指す。</p>	
年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>(1) 定例学類会議において、学生教育の充実を図るために教員間の情報交換を活発に行う。また、年間1回以上、研究・教育に関する内容のFDを企画、開催する。</p> <p>(2) 外部主催の研修会等に積極的に参加するとともに、随時伝達講習等を開催し、情報の共有を図るとともに、個人の資質の向上を目指す。</p>	<p>(1) A</p> <p>(2) A</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (A)</p>
<p>研究活動活性化、学生教育のための情報交換を実施した。</p> <p>(1) 学類FD開催</p> <p>1) 入学前教育プログラム検討会(2017年6月20日):新入生の提出課題の平均点は目標得点に達しているが、期日内提出率が前年に比べ低い。期日内に提出する習慣を身に付けるように指導する必要があることを確認した。</p> <p>2) 学類教育カリキュラム検討会(2017年8月3日):カリキュラムの見直しを検討することで、取得資格等に対する共通認識を図ることができた。</p> <p>(2) 外部主催の研修会等につき、開催案内を学類会議等で周知し積極的に参加できるような体制をとった。</p> <p>次年度の課題</p> <p>研究と教育のバランス、両立のための環境整備についての検討が必要である。学会、研修会等に積極的に参加できるような講義日程、及び行事予定の調整を図る。</p>	
<p>10 教員自身の資質の向上</p>	
<p>10-9. 家政福祉学類 家政福祉学専修</p>	
<p>目標</p>	
<p>多様化する学生気質や理解力不足の傾向に対応できるよう、教員は常に、新しい教育・研究情報を収集して、授業内容はもとより教授法の改善に努める。また、価値観の多様化は学生に限られることなく、教職員間においても、常に相手の個性を尊重し合う風土の醸成に心がける。</p>	
<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度 (S, A, B, C)</p>
<p>(1) 教員は常に、学生の学力や理解力を適正に把握するよう努めると共に、学生の興味や関心と照らし合わせて授業の内容や指導方法を工夫し、課題に対応した学類FDを行う。</p> <p>(2) 教員は各自の授業の中で学生の授業評価を受けて、その結果を真摯に受け止め、より良い授業運営を心がける。</p> <p>(3) 全ての教員は各自の専門分野における資質向上を図るため、学会等に積極的に参加発表を実施する。</p>	<p>(1) A</p> <p>(2) A</p> <p>(3) S</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (A)</p>
<p>(1) 教員は、学生の理解力を把握し、学生の興味や関心も考慮して、授業の内容や指導方法の工夫に努めた。学類FDにおいて、多様化する学生を考慮しながら学科として今後どのような内容を教授していくべきかも含めて、検討を行った。</p>	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

(2) 教員は、授業評価結果を受けとめ、より良い授業の実施に努めた。

(3) 教員は、専門分野に関する学会等において参加発表を実施した。

次年度課題

教員は、引き続き、学生の理解力や関心を考慮しながらより良い授業運営を心がける。また、専門分野に関する取り組みも継続的に行う。

10-10. 大学院：人文科学研究科 英語文学専攻 日本文学専攻

目標

1. 英語文学専攻

国内外の学会で各人が研究成果を発表すると共に、他機関・隣接分野の研究者との交流を通して大学教育および専門領域の知見を広め、学内での教育・研究活動に還元する。

2. 日本文学専攻

教員各人が国内外の学会で研究成果を発表及び機関誌に掲載するとともに、それらが研究活動に還元されるようにつとめる。

年度計画：活動内容

達成度 (S, A, B, C)

1. 英語文学専攻

(1) 本学の紀要をはじめとして、専門分野の学会誌への論文投稿や口頭発表、著書・翻訳等の出版により、各人が研究成果を公表する。

(2) 各教員が学内のFD活動に参加すると共に、授業においても研究成果を生かした教材研究を行い、授業改善の工夫をする。

2. 日本文学専攻

和洋女子大学の紀要、和洋女子大学日本文学文化学会の研究誌『和洋国文研究』、また各専門の学会誌への投稿や出版により、各人の研究成果の公表につとめる。

1.
(1) A

(2) S

2. A

実施結果と次年度課題

総合
達成度 1. 英文専攻 (A)
2. 日文専攻 (A)

1. 英語文学専攻

(1) 教員のFDとして、学術講演会を行った。

(2) 研究成果や教材研究の成果等を発揮できるよう、学生獲得のための方策検討が課題である。

2. 日本文学専攻

(1) 雑誌の投稿、発表等に積極的につとめた。本年度は本学日本文学文化学会の「和洋国文研究」第53号、本学「大学研究紀要」第58集への投稿並びに口頭発表（絵入本学会など）がなされた。

(2) 次年度課題としては上記のほか内外学会の口頭発表、投稿の件数を更に増やしていきたい。

和洋女子大学 2017年度目標と計画

10 教員自身の資質の向上		
10-11. 大学院：総合生活研究科 総合生活専攻 博士前期課程 博士後期課程		
目標		
<p>これまで以上に学会発表や論文投稿を通じた外部研究者からの評価を行うことで、大学院担当教員自身の研究スキルのアップをはかる。また、これらの活動を通じて、全国規模の学会の役員などを出来るだけ多くの大学院担当教員が引き受け、学内だけではなく国内外の同僚研究者からの複眼的な評価を促進する。研究科主催のFDを実施することで、大学院教員としての資質向上、研究科組織改革への共通認識獲得を目指す。</p>		
年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）	
<p>以下の項目からFDとして、可能な限り複数の課題を取り上げ実施する。</p> <p>(1) 研究科内の現状組織の問題点と組織改革のための方向性に関する議論。</p> <p>(2) 研究環境の整備と意識向上のための外部講師によるFD・勉強会の実施。</p> <p>(3) TurnItInの運用についてのFDを実施。</p>	S	
実施結果と次年度課題	総合達成度	前期（ S ） 後期（ S ）
<p>実施結果</p> <p>研究科内FDとして、学科に直結した博士前期課程の授業の仕組みを廃止し、生活科学を研究の拠点とし、総合生活研究科1本とする方向性を洗濯することとした。また、剽窃検出ソフトが当初予定のソフトから変更されたことを受けて、研究活動における適切な画像処理の手法について学ぶFDを計画変更して、2月22日に実施する予定である。</p> <p>次年度課題</p> <p>担当教員が、研究倫理や研究に関わるコンプライアンス教育に参画し、学内での研究倫理リテラシーを醸成する先頭に立つ。</p>		
10 教員自身の資質の向上		
10-12. 全学教育センター		
目標		
<p>(1) 世の中の新しい情報や変化を捉え、学生および教員同士がコミュニケーションを取りながら「和洋らしさ」を共有し、教育活動に反映させていく。</p> <p>(2) 現状の和洋女子大学では、基礎教育の充実が大切であり、教員自身も学生の基礎学力を育成する教育方法を身につけなければならない。「わよらかフェ」への学内教員参加を積極的に促し、教員の能力向上を図っていく。</p>		
年度計画：活動内容	達成度（S, A, B, C）	

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>(1) 学生に歩み寄り、信頼関係を築き、学生の学びの相談に随時応じられるようにする。</p> <p>(2) 全学教育センター会議や所員会議において情報を共有する。</p> <p>(3) 全学教育センターFD研修を行い、全学教育センターでの活動内容や教授法などについて共有する。</p> <p>(4) わよらカフェへの教員の参加を促し、学生の基礎学力や学び方の実態に触れ、教育内容や方法について考える機会を増やす。</p>	<p>(1) S</p> <p>(2) S</p> <p>(3) A</p> <p>(4) S</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (S)</p>
<p>(1) 学生指導についてはラーニングステーションを拠点としてスタッフ・教員が連携して学生の学び相談に応じた。就職試験についての具体的相談や授業での課題に関する具体的質問などにも、できる限り所員の教員が臨機応変に対応した。入学前学習プログラムでは学類教員とも連携して受講生（高校生）に寄り添った指導を実施できた。</p> <p>(2) センター会議だけでなく所員会議（打ち合わせ）を回数多く実施し、教員の意識を高めて学生指導業務を遂行した。新たに加わった外国語部門の教員との連携も達成できた。</p> <p>(3) 平成29年度は全学的なFDを担当することはなかったが、英語担当教員へのレベル通知（上述）や看護学科教員への全学教育センター理解のための説明会、マナバの説明会の実施など、全学教育センターとしての活動の理解と協力を促す活動を積極的に実践した。さらに、3月に共通総合科目の担当教員（非常勤講師も含む）に向けて、共通総合科目の授業マネジメントの向上への点検、改善を学長と全学教育センター長の連名で依頼した。教務部長からの依頼があり、基礎ゼミのルーブリックの原案を作成した。</p> <p>(4) わよらカフェへの教員の参加を促し、学生の基礎学力や教養の学びを考える機会を増やした。</p> <p>平成30年度の基礎ゼミでは各学科の授業担当者に作成したルーブリック内容を提供し、授業の運営や成績評価への活用を試行する。その結果を授業担当者と共有してルーブリックをブラッシュアップし、平成31年度から学生に公開できるか否かを検討する。共通総合科目としての英語教育の改善（授業内容や教科書選定の方向などを授業担当者に示す）を目指す。マナバフォリオからマナバコース（授業支援ツール）への移行に伴い、教員、職員向けに説明会やFDを教育支援課と連携して実施し、教員による授業での積極的活用を目指す。次年度以降もこれらの活動を通して全学教育センターでの活動内容や教授法について、全教員内での共有を目指す。</p>	
<p>11 図書館・学術情報サービスの活性化</p>	
<p>11-1. メディアセンター</p>	
<p>目標</p>	
<p>本年度にメディアセンターは書架狭隘改善と所謂ラーニングコモンズ構想による、リラックスとディスカッションのスペース設置の大規模な改修工事を実施する。これにより実現する空間を最大限に活用し、新しい時代のメディアセンターの構築を目指す。</p>	
<p>年度計画：活動内容</p>	<p>達成度 (S, A, B, C)</p>
<p>(1) 改修によって、既成の図書館の概念には無い、飲食、談話、インターネット利用が自由な空間を提供する新メディアセンタ</p>	<p>(1) S</p>

和洋女子大学 2017年度目標と計画

<p>一を、学生・教職員に強力にアピールし、これまでとは全く異なる新たな活用を開拓・推進する。</p> <p>(2) (1) の実現のため①ソフトウェア（新しい利用形態）、②ハードウェア（設備）、③広報について検討する。</p> <p>(3) 夏期休業期間を利用し改修工事に伴う利用者への影響を最小限に抑えるプランを策定する。</p> <p>(4) 授業連携推進強化のため、基礎ゼミ内でのメディアセンターガイダンスに、蔵書検索、館内資料探索、自動貸出返却機の体験を新たに加え、学生のメディアセンター利用促進を図る。</p> <p>(5) 1 生向けパスファインダーの作成を継続する。2017 年度は日本文学文化学類版を作成。</p> <p>(6) (2) -③と併せ、利用案内の作成並びに動画での案内を作成する。</p>	<p>(2) A</p> <p>(3) S</p> <p>(4) S</p> <p>(5) S</p> <p>(6) S</p>
<p>実施結果と次年度課題</p>	<p>総合達成度 (S)</p>
<p>(1) 及び(2) 事前の学生へのアンケートの結果により、新空間のテーマを癒しとし、飲食、談話、インターネット利用が自由な空間に、マッサージチェアや落ち着いた色調のボックス席、フェイクグリーン（人工観葉植物）を設置した。飲食、談話を可としたことにより、多少なりとも無秩序な状態になることが懸念されたが、リニューアルオープンしてから現在まで、パソコンを囲んでのグループでの学習や友人同士での雑誌の閲覧などの利用が多く、期待通りの利用者の姿が見受けられる。リニューアルオープン後の入館者数は前年度の同月より月平均 15%増加している。しかし、(2) ①についての検討は今年度には結果を出せなかったため、次年度への継続課題とする。</p> <p>(3) 改修による休館前には、貸出冊数を 10 冊から 30 冊に増やし、また、文献複写依頼には事務室で受付をする等、利用者の資料入手に関しての最大限の手当てを実施した。</p> <p>(4) 11 クラス・308 名への実施が実現した。次年度も同内容のガイダンスを継続する。</p> <p>(5) 日本文学文化学類版を作成。次年度は心理学類を予定。</p> <p>(6) twitter による広報や施設利用紹介動画の作成・公開を実施した。</p>	